

---

# IS 史上最強の弟子イチカ

武芸者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 史上最強の弟子イチカ

### 【Nコード】

N6723V

### 【作者名】

武芸者

### 【あらすじ】

インフィニット・ストラトスと史上最強の弟子ケンイチのクロス。一夏が梁山泊と接点を持ち、かなり強化されます。

この作品はArcadiaにも投稿しています。

## プロローグ（前書き）

最初に一言。作者はセカン党です。もっともこちらでは鈴はサード幼馴染になりますが。セカンド幼馴染は美羽です。それからセシリアも好きです。

## プロローグ

「一夏あ！」

「ふおお、安心するといい、千冬ちゃんや」

「ちふゆ、ねえ……」

弟の身を案じる少女に向け、老人が愛嬌のある表情を浮かべて安心させようとする。

その老人の手の中には千冬の弟、衰弱した様子の一夏が抱かれていた。

「いつくんに手を出した不届き者は、わしが皆懲らしめてやったからのう。怪我もないぞ。ただ、いろんなことがありすぎて疲れただけのようじゃ」

なんでもないことのように、陽気に言う老人。彼の名は風林寺隼人<sup>ふうりんじ はやと</sup>。無敵超人の異名を持つ、史上最強の生物。

風貌はそれに相応しく、二メートルを優に超える筋骨隆々の巨体。ただでさえ目立つ容姿なのに、それに拍車をかける長い金髪の髪と髭。

その姿は圧巻で、隼人の微笑みが妙なギャップを生み出していた。ただ千冬は隼人に怯えることなく、一夏を受け取り、抱き締めながらお礼を言う。

「ありがとうございます、本当にありがとうございます」

「なあに、困った時はお互い様じゃよ。それにしてもよかったのか

のう？ いくくんが心配だったのはわかるが、今日は大事な試合だったのじゃろ？」

「そんなのはどうでもいいんです。一夏が無事だった、それだけで十分です」

「ふむ、お主は良い姉じゃの」

隼人は自身の顎鬚を撫でつつ、空いている手で千冬の頭をポンポンと叩いた。

「後はわしらに任せるといい。黒幕にはきっちり落とし前を付けるからのう」

優しい笑顔でささやかれるその言葉。それは千冬にとってとても頼もしく、そしてとても恐ろしかった。

――

「風林寺さんには、本当に頭が上がりません」

「気にするでない。何度もいっとるが、困った時はお互い様じゃ」

「ですが、いつもこちらが一方的に助けられてると思います」

「じゃから気にするでない。うちの者もいくくんのことを歓迎してるからのう」

千冬と一夏の姉弟には両親が存在しない。幼い一夏と、当時高校生である千冬を残して突然失踪したのだ。  
2人には頼れる親類もおらず、どうしたら良いのかわからなかった。そんな姉弟に向け、手を差し伸べてくれたのが隼人である。

「アパパパ」

「アパチャイすげっ！」

「いちか、スピード上げるよ。しっかりつかまってるよ」

「うん！」

あらゆる武術を極めた者達が集う場所、梁山泊。

幼い一夏の姿はそこにあり、今は優しき巨人、アパチャイ・ホパチャイと遊んでいた。

隼人にも負けない巨体であり、褐色の肌と水色の髪をした青年。その風貌から恐れられることが多々あるが、彼の本質はとても優しく、子供や動物などには絶大な人気を誇っていた。

一夏を肩車して嬉しそうに走っている姿から想像できるように、彼は大的子供好きだ。そんな彼が裏の世界では『裏ムエタイ界の死神』などと呼ばれているのを誰が想像できるだろうか？

「それはそうとドイツはどうじゃった？ 世界は広いからのう、何か新しい発見があったじやろう？ 今の千冬ちゃんはその顔をしておるぞ」

「……流石ですね」

隼人に指摘され、千冬は感心した。こうも見事に自身の心境の変化

を突かれるとは思わなかったからだ。

千冬は今までドイツにいた。あの事件から既に1年以上の時間が経ち、既にIS操縦者の現役を引退している。

IS インフィニット・ストラトス

女性にしか扱えない、世界最強の兵器。

当初は宇宙空間での活動を想定して作られていたのだが、千冬の親友である篠ノ之<sup>しののたはね</sup>束が兵器として完成させた。

彼女1人でISの基礎理論を考案、実証し、全てのISのコアを造った天才科学者なのだが現在は失踪中であり、世界中が束の行方を追っているとのことだ。

束の親友だったために千冬はISの開発当初から関わっており、ISに関する知識や操縦技術は並みのパイロットよりも遥かに高い。しかも公式試合で負けたことがなく、大会で総合優勝を果たしたことから誰もが認める世界最強のIS操縦者だった。

そんな彼女の突然の引退。よくよく考えれば、隼人じゃなくともなにかあったと勘ぐるのは当然かもしれない。

「最初は……借りを返すつもりで教官の話を受けました。ですが人に教えると言うことに意義を感じるようになり、その道に進んでみるのも面白いかと思っただけです」

「そうか……お主の決めたことじゃ。わしは応援するぞ」

「ありがとうございます」

「いつくんのことは任せなさい。血はつながっていなくとも、彼は既に家族のような存在じゃ。わしらがしっかりと面倒を見るから、安心するといい」

「はい」

縁側に腰掛け、お茶を飲みながら談笑を交わす隼人と千冬。そんな2人に、背後から女性の声がかけられた。

「千冬……来て、たんだ」

「お久しぶりです、しぐれさん」

「ん……」

剣と兵器の申し子、香坂しぐれ。

ポニーテールのように髪を後ろで束ね、くノ一のような格好をした美女。

年齢不詳だが、見た目からして歳は千冬とあまり変わらないだろう。彼女もまた、梁山泊で暮らしている者の1人だった。

「しぐれや、『あいえす』とやらの整備は終わったのかの？」

「今……秋雨が仕上げをしてい、る」

「そうかそうか、秋雨君に任せとけば安心じゃのう」

剣と兵器の申し子であるがゆえに、また、梁山泊で唯一の女性の達人であるがゆえに、彼女もまたIS操縦者だった。

しかも公式では負けなしとされている千冬だが、非公式、訓練などではしぐれに手も足もでなかった。

千冬が誰もが認める世界最強のIS操縦者なら、香坂しぐれは正真正銘、世界最強のIS操縦者である。

「逆鬼、一気に発電してくれ」

「まったく、何で俺がこんなことを……」

ISにいくつものコードをつなぎ整備、調整をしている胴着の中年男性。

彼が哲学する柔術家こと岬越寺秋雨。こうえつじ あきさめ黒髪と口髭が特徴的で、隼人やアパチャイに比べるとスマートな身体つきだが、武術の達人なだけにとても鍛えられた肉体を持つ。

書、画、陶芸、彫刻のすべてを極めたと謳われる天才芸術家だが、その他にも医師免許などを所持しており、からくりや機械関連の知識にも精通している。まさに完璧超人。

そんな秋雨だからこそ、世界最先端の技術の結晶であるISの整備ができるというものだ。

そして、ISにつながったコードの先端、自転車のような発電機で電力を生み出している人物の名が逆鬼さかき しお至緒。

ケンカ100段の異名を持つ空手家。口調は乱暴で、頬から鼻にかけて横断する一文字の傷があり、素肌の上に革のジャケットと言いついかにも恐ろしい風貌をしているが、心根はとても優しい青年だった。

「相変わらず、秋雨君の発明は見事じゃのう。その発電機のおかげで、うちの家計は大助かりじゃわい」

「収入が不定期な分、逆鬼の体力は有り余ってますからね」

「うるせえよ！」

逆鬼達のやり取りを見て、千冬は思わず笑みをこぼす。

平和な日常。両親がいなくとも、自分達姉弟を支えてくれる家族の  
ような者達。

これが幸せなのだと思ひ締めてみると、あっさりとその考えは崩壊  
してしまった。

「久しぶりね、千冬ちゃん。相変わらず良い体してるね」

「……………」

あらゆる中国拳法の達人、馬剣星<sup>ばけんせい</sup>。

長身とはいえ女性である千冬よりも小さく、小柄な中年の中国人男  
性。長い口髭と眉毛が特徴的で、帽子とカンフー服を愛用している。  
彼を一言で表すなら工口親父。美女を見ればセクハラ行為を働いた  
め、千冬は馬のことを苦手としていた。

「ほ、れ……………」

「ありがとうございます、しぐれさん」

「ちょ、ちょっと待つね！　いくらなんでも真剣は洒落にならない  
ね！…」

それでも最近は慣れてきたのか、馬に対する遠慮がない。

しぐれに渡された刀、真剣を受け取り、千冬はそれで馬に斬りかか  
る。

中国拳法の達人なだけあり、千冬の斬撃を紙一重でかわす馬だった  
が、その表情は引き攣っていた。

「アパパ、剣聖楽しそうよ」

「これ、アパチャイ。どこを見ればそう取れるね!？」

「千冬姉、頑張れ」

「いつちゃん!？ 頑張られたらおいちゃん死んじゃうね!」

その様子をケラケラと眺める一夏達。そんな彼らを制する少女の声が、梁山泊内に響き渡る。

「みなさん、おやつを用意ができましたわ」

無敵超人風林寺隼人の孫娘、ふうりんじ みう風林寺美羽。

一夏と歳の変わらない、長い金髪の美少女。幼いながらも梁山泊の家事を一手に引き受ける才女だ。

「あ、美羽ちゃん、私も手伝おう」

「ありがとうございます。では、こちらを運んでいただけますか？」

馬を追いかけるのを中断した千冬は、手伝いを申し出る。

いつまでもこんな日々が続けばいいのと思う、平和な毎日。だが物事に永遠なんてものは存在せず、日常とは些細な切欠で崩壊するものだった。

「これが、IS……」

「これこれ、勝手に触ったら……」

おやつを食べ終わった一夏が、秋雨の整備していたISに興味を持つ。

興味本位で触ることを咎める秋雨だったが、もう既に遅い。一夏は既にISに触れてしまった。

これはしぐれの専用機だったが、整備のために一時初期化していたのが原因だろう。そうでなくとも、まさかこのようなことになるか？  
誰が想像できただろうか？

「こ、これは……」

どんな原理かはわからないが、ISとは女性しか起動することができない兵器。男性では到底扱うことができない。

だが一夏は男性、男の子である。普通なら起動するはずがない。動くはずがなかった。

だと言っのに……

「ISが……起動した？」

ISの起動。動かせないはずの男が、ISを動かした。

これが日常の崩壊であり、世界を巻き込むことになるうとは、一体誰が想像しただろうか？

## BATTLE 1 剣と兵器の申し子に弟子入り！？

「ボクの弟子にす……る」

「待つてくださいしぐれさん！そんないきなり……」

一夏がISを起動させ、梁山泊は騒々しい空気に包まれていた。

「まあまあ、落ち着くね千冬ちゃん。しぐれどもいきなりすぎるね」

一夏を弟子にするというしぐれと、それを反対する千冬。言い争いを始めそうな2人を馬が仲裁し、仕切り直させた。

「しかし驚いたのう。本来、その『あいえす』というのは女性にしか動かせないんじゃない？なのに何故、いっくんが動かすことができたのかのう？」

「私にもわかりかねます。ただひとつだけ言えることは、彼は世界中で唯一ISを動かせる男ということでしょう」

隼人と秋雨は驚きと共に感心し、一夏を見定めていた。

IS、世界最強と呼ばれる女性専用の兵器。例え武術を極めた達人でも、男性なら動かすことは不可能な代物だ。

それをどこにでもいるような普通の少年、一夏が起動させた。ならば彼に何かがあると思うのは当然だろう。

「あばば、凄いよ一夏！」

「えへへ」

アパチャイは自分のことのように一夏を褒め称え、一夏は照れ臭そうに笑っている。

まるで他人事のようにであり、とても客観的な反応だった。

「一夏！ お前のことなんだぞ、もう少し真面目に……」

「だから落ち着くね、千冬ちゃん。いきなりのことではいいじゃないのね」

馬の言っていることはもつともだった。自身が世界で唯一ISを動かせる男と言ったところで、別に何かが変わるわけではない。一夏は一夏であり、千冬の弟、梁山泊の仲間なのだから。

だが、このことが世間に知られればこれまでの生活がなくなるのも事実。何せ、世界で唯一ISを動かせる男なのだ。世界各国の研究機関、またはその関係者が放っておかないだろう。

「幸い、このことを知っているのは我々梁山泊の身内の者だけだ。平穏な暮らしを望むというのなら、一夏君のことは内密にすべきだと思います」

「ふむ、そうすべきじゃろうな。もつとも、それはいつくんがどうしたいかによるがの」

「へ？」

話を降られた一夏は、間の抜けたような顔で呆然とする。

真剣な表情で問いかけてくる隼人の雰囲気恐縮し、言いようのない緊張感を味わっていた。

「これまでどおり平穏な日々を望むか、それとも茨の道を歩むのか？ それはお主の決断しだいじゃ」

「俺の、決断……」

場合によっては人生を左右するほどの決断。それを迫られた一夏は瞳を閉じ、真剣に思考を巡らせる。

世界で唯一ISを動かせるという事実。それを知った時はいまいち現実味を感じず、アパチャイに褒められるがままに喜んでいた。自分は特別な存在なんだと思い、表現のしようがない高揚感に包まれた。

だが、冷静になって考えてみると話は違ってくる。確かに一夏は特別な存在だ。それは否定のしようがない事実だろう。けど、そのことが知れ渡れば彼は日常を失ってしまう。

これまでどおりに梁山泊の者達と一緒に過ごすことができなくなり、研究付けの毎日を送ることになるかもしれない。流石に非人道的なことはされないだろうが、モルモット（実験動物）一歩手前の生活を送ることになるかもしれない。

そう考えると、喜んでばかりもいられなくなった。

「俺は……このままがいいです。梁山泊から離れたくないです」

だから、正直な気持ちを吐露する。男でISを動かせるというのはとても名誉なことだが、だからと言ってこの暮らしを失いたくはなかった。

「そうか、それがいつくんの決断じゃな」

隼人が微笑む。身内に向けられる、とても優しそうな笑みだった。

千冬も一安心したようで、安堵の息を吐く。

「残……念。弟子、欲しかった……な」

しぐれは残念そうに俯き、畳の上にのの字を書いていた。

「あ、いや、それはISについての話であって、別にしぐれさんに弟子入りするのが嫌だとかそういうわけじゃないですから」

「本当……？」

「はい。むしろしぐれさんほどの達人に剣を教えてもらえるなら教えて欲しいくらいです」

落ち込むしぐれに向け、一夏は彼女を氣遣つてのフォローを入れる。それが、地獄の始まりだということをまったく理解していなかった。

「じゃあ、教え……る」

「へ？」

「そうだな。私はISに関わるのは反対だが、しぐれさんに剣を教わるのは悪いことじゃないと思うぞ。お前も昔は剣道をしてたからな」

「ほう、ならいつくんはしぐれの弟子じゃな。剣の道は険しいぞ」

「しぐれズルいよ。アパチャイも弟子欲しい！」

一夏を他所に進んでいく話。

しぐれのフォローのために言った言葉が、なぜか彼女に弟子入りする意として取られていた。

「え」と、今のは冗談で……」

「弟子……ふ、ふふ……一夏、これからは私のことを、師匠と呼……べ」

（しぐれさんが笑ってる！？）

普段はどんなことがあっても顔色ひとつ変えず、感情を表に出さないしぐれが確かに笑っていた。  
香坂しぐれ、年齢不詳のスタイル抜群の美女。そんな彼女が笑う姿はとても美しく、そしてとても恐ろしかった。

＋＋＋

「ふ、ふふふ、ふははははっ！　いつそ殺せエエエ！！」

「わっ！？　一体どうしたのよ、一夏」

「鈴」

一夏は錯乱し、狂ったような悲鳴を上げた。

そんないきなり取り乱し始めた一夏に向け、一夏曰く『サード』幼馴染で中国人の凰鈴音、通称鈴が心配そうに声をかけてきた。

これまた一夏曰く、ファースト幼馴染の篠ノ之箒が家庭の事情で転校し、その後に仲良くなったのが鈴なのだ。ちなみにセカンド幼馴染

染は美羽だ。

一夏の悪友である五反田<sup>ごたんだ</sup>弾<sup>だん</sup>とも仲が良く、美羽も合わせて4人で一緒に遊んだりもしている。

「しぐれさんが無茶苦茶なんだよ……お前はあるか？ 日本刀持った女性に1時間以上追い掛け回されたことなんて………刃物怖い刃物怖い刃物怖い」

「な、なんか大変なのね……」

流されるがままにしぐれの弟子となった一夏は、毎日のようにトラウマを植えつけられる日々を送っていた。

そして、時折羨ましそうな視線を送ってくるアパチャイ。彼は一夏にムエタイを教えたいらしいが、それは謹んでご遠慮したい。

裏ムエタイ界の死神と呼ばれる彼の修行風景を見れば、その理由も理解できるだろう。

「何度死ぬ思いをしたか……今、こうして鈴と並んで帰宅しているのが俺の唯一の癒しだ」

「い、いい一夏！？ えっと、あの……私も一夏と一緒に帰るのに悪い気はしないわ」

「そうか……ああ、腹減った。帰りに鈴の家によつていいか？ 鈴の親父さんの酢豚と杏仁豆腐が食べたくなった」

「別にいいけど……一夏ってうちの酢豚好きよね」

「おう、アレは絶品だよな。もう毎日食べたいくらいに」

「そっか、そうなんだ……」

道中、いい雰囲気になる一夏と鈴。

鈴は頷きながら何かを考え、ある決意をした。

「じゃあね、一夏。私が料理がうまくなったら……」

「ん？」

「酢豚を毎日……」

「ラララ〜！ 一夏殿、奇遇ですね」

「あ、響」

「……………」

だが、鈴が言い切るより前に邪魔が入った。

歌いながらやってくる邪魔者、それは羽帽子と奇妙な服をした不気味な少年、九弦院響。くげんいん ひびき

彼は暇があれば歌って踊り、作曲などをしていた。その作曲に関しては類稀なる才能を持っており、将来的には音楽学校への進学が決まっているとか。

天才気質の少年だが、そんな彼を一言で表すなら変人である。

「本日はお日柄も良く、良い天気ですね。まるで私達の出会いを天がしゅくふ……」

「なんでいいところで出てくんのよお！ー！」

「ぐふあ！？」

そんな響を、鈴は情け容赦なく殴り飛ばした。

「スフォルツァンド（特に強く）……良い一撃でした。今ので素敵なメロディーが舞い降りてきましたよ。ラララ〜！」

「だからあんたは、殴られたのになんでそんなにピンピンしてるのよ！？ この国じゃ邪魔をする奴は馬に蹴られて死ねって言っけど、あんたは馬にけられても平気そうね」

「ララララ〜」

殴り飛ばされた響はやばい倒れ方をしたものの、すぐさま起き上がって作曲を始めていた。

羽帽子の羽の部分がペンとなり、懷から五線譜紙を取り出して曲を書き込んでいく。

彼から声をかけてきたというのにそれに熱中し、一夏と鈴の存在は忘れ去られていた。

「これは家で早速奏でてみたいですね〜！ では、一夏殿、鈴音氏。私はこれで失礼します。ラララ〜！」

「……………なにしに来たんだ？」

「こつちが聞きたいわよ！」

自由翻弄な響に呆気を取られ、一夏と鈴は同時にため息をついた。

十十十

あれから暫くの時が経った。

響經由で知り合った新たな友人、千秋祐馬ちあき ゆうまと知り合ったり、鈴や弾と共に遊んだり、しぐれの修行によってまた新たなトラウマを刻まれたり……

楽しかったことや思い出したくない出来事などなど、いろいろなことがあった。本当にいろいろなことがあった……

「俺の癒しが、心のオアシスが、酢豚が……」

「もう、一夏。そんなにマジ泣きしないでよ……」

「だって、だって……」

その日常が崩壊する。梁山泊の修行でボロボロとなった一夏の心のよりどころ、鈴が所謂家庭の事情と言う奴で祖国に、中国に帰るというのだ。

それに一夏は本気で涙を流し、空港で鈴との別れを惜しんでいた。

「ホントにやめてったら……帰れなくなるじゃない」

「帰らないでくれよ、鈴」

「そういうわけにもいかないわよ……」

「俺と一緒に暮らそう。絶対に幸せにしてみせるから」

「え、ええっ!?! ちょ、一夏! それってプロポ……」

「馬さんがそう言えば一発だって言ってたけど、これってどういう意味なんだ？」

「死ね！」

「ぐはっ……」

鈴の手加減なしのビンタが一夏に叩き込まれる。バチーンと乾いた良い音が響き、一夏の頬には鮮やかな紅葉の跡がついていた。

「な、なんで怒るんだよ？」

「うつさい馬鹿！ 死ね、本当に死ね！！」

怒鳴り、口論を始めてしまう一夏と鈴。

周囲からは呆れたような視線や、どこか微笑ましそうな視線が投げかけられるが、2人にはそんなものを気にする余裕はなかった。

「まあ、いいわ。一夏の病気は今に始まったことじゃないし……」

「俺はいたって健康だぞ」

「いいから黙れ」

これまでのやり取りで疲労し、鈴はがっくりと肩を落とす。だが、その表情はにやけており、例え一夏が言葉の意味を理解していなくともとても嬉しそうだった。

「ねえ、一夏」

「ん？」

だから、ちよつとだけ積極的になった。

一夏の背は標準だが、男なだけあって鈴よりも高い。鈴は背伸びし、一夏に顔を近づける。

「え……？」

呆気にとられた一夏は、状況を理解するのに少しばかりの時間を要した。

頬に触れる感触。柔らかくて温かいもの、鈴の唇。

「えへへ……」

「鈴……」

鈴は真つ赤な顔で照れ臭そうに笑い、一夏に言った。

「じゃあね、一夏。一時のさよならだけど、いつかきつと……」

「ああ……」

言い終わり、鈴は一夏に背を向ける。そのまま飛行機の登場口に向かって歩いていった。

鈴の笑顔を正面から見た一夏は未だに呆然としながら思う。鈴のこゝと、今まで一緒に遊んでいた良く知っているはずの鈴が、意外な一面を見せたような気がした。

（鈴って……笑うとあんなに可愛かったんだ）

胸が高鳴る。それと同時に締め付けられるような痛みが走った。  
感じるのは喪失感。いて当然だった存在が、自分の前からいなくなる  
悲しみ。

一夏はなんとなく、鈴に口付けされた頬の部分に触れて気づいた。

「あれ……？」

濡れていた。瞳から一筋の雫が垂れ、一夏の顔を濡らしていた。一  
夏は泣いていたのだ。

「やはり、お友達がなくなるのは寂しいですね。はい、一夏さん」  
そんな一夏に、隣に立っていた少女がハンカチを手渡す。

「ああ、ありが……って、えええええっ!？」

「うわっ、びっくりした!」

それを受け取った一夏だが、気配なく隣に立っていた少女に今更な  
がらに気づき、悲鳴染みた声を上げてしまう。  
その大声に、少女も吃驚したように声を上げた。

「いや、それはこっちの台詞……なにしてた美羽!?　ってか、  
見てた?」

「はい、ばつちりと」

「……………」

少女、美羽は素敵な笑顔で一夏の言葉に同意する。  
一夏は顔は火が吹き出そうなほどに熱くなった。

「いいですね、幼馴染というものは」

「いや、それを言うなら美羽と俺も幼馴染なんだけど……」

「あら、そうでしたわね。ならこの場合、なんと言うのでしょうか？」

「知らない。で、なんで美羽がここにいるんだ？」

「お友達の見送りをするのは当然ですわ。もう挨拶はしましたし、場の空気を読んで今まで隠れていたんですの」

「そうだったのか……」

「もっとも、それ以外にもここにいる理由はありますが」

「え？」

美羽の言葉に、一夏が首をかしげた。

「いつくんや、どうやらお別れは済んだようじゃのう」

「長老……え、どうしてここに？」

そんな一夏に、梁山泊の長である隼人が声をかけた。いや、彼だけではない。

「けっ、見せ付けやがって」

「グッジョブね、いっちゃん。でも、さっきの台詞は頂けないね」

「若いのはいいねえ」

「う……ん」

「アパパ」

「逆鬼さん、馬さん、岬越寺さん、しぐれさん、アパチャイまで！  
？」

梁山泊の者達勢揃い。未だに状況を理解できていない一夏は、パクと口を動かして固まっていた。

「はい、これ。一夏さんの荷物ですわ」

「え、ええ……なにこれ？　今から旅行にでも行くようなこの大荷物は」

「ようなではなく、本当に行くんです。飛行機に乗って空の旅ですわ」

「えええっ！？」

状況がまったく理解できない。既に定められた決定事項に、一夏は驚きの声を上げる。

「ちょ、説明を！　マジで理由を説明して」

「ふおつふおつふお、さあ、ゆくぞ皆の衆」

梁山泊、日本を発つ。

――

「セシリア・オルコット……ガキを始末するのに、なんでわざわざ俺達武器組がイギリスまで出向がなくちゃいけないんだ」

「そういうな。何でもその小娘は良いとこのお嬢ちゃんだな、事故で亡くなった両親の遺産をたんまりと持っているのよ。それが周りの親族達には面白くないらしくてな、我々『闇』に厄介ことが回ってきたということだ」

「ふん、気に入らねえ。反吐が出そうな仕事内容だな」

「依頼だから仕方がない。それにこの小娘、代表候補の腕前を持つIS操縦者らしいから結構楽しめるかもな」

「IS……か。世界最強の兵器ねえ。確かに使うものが使えば強力だが、ガキには過ぎた玩具だ。それにわざわざ、相手の土俵で戦う必要もない」

「まあ……始末さえしてくれるなら、方法は任せるさ」

「ああ」

事態が動き出す。ある少女に、強力な魔の手が迫っていた。

## BATTLE 2 イギリスへ！！

「ヂューヂュー！」

「不憫だな、闘忠丸……」  
とじちゅうまゐる

飛行機に乗るために行う手荷物検査にて。

一夏はゲージに入れられてしまったしぐれの友達、ネズミの闘忠丸に哀れみの視線を向ける。

いくら闘忠丸がしぐれの友達とはいえ、飛行機内に動物の持ち込みは許可されていない。

「それはそうとしぐれさん……あなた、そんなものを持ち込んで飛行機に乗るつもりだったんですか？」

「……………」

当のしぐれ本人は、手荷物検査にてあらゆる持ち物を没収されていた。

刀、鎖鎌、苦無、手裏剣、釵、トンファー、毒等等。驚愕を通り越してむしろ感心するほどの危険物を持ち込み、一夏はおるか手荷物検査を行う係員を呆れさせていた。

「特別許可が出た。通せ」

「ええっ！？」

その代わり、慌てて駆けつけてきた空港のお偉いさんらしき人物が述べた一言が係員達を驚愕させる。

没収すべき危険物は全てしぐれに返却され、闘忠丸もゲージから出される。

「ふっ」

しぐれは涙目の闘忠丸を頭に寄せ、何事も無かったようにゲートをくぐっていった。

「特別許可って……何したんですかしぐれさん？」

「別に……僕は何もやってな……い」

特別許可という単語に一夏は疑問を抱いたが、しぐれはそれだけしか答えてくれなかった。

ただなんとなく理解はできる。そんな特別な許可を出せるような存在となると、普段なら手も届かないような上層部の人間にしかありえないと。

一夏は知っていた。梁山泊には時折、各国のお偉いさんが訪れることを。そしておそらく、何か面倒そうなことが関係しているということ。

「……もしかして、これからかなり危険なところに行きます？」

「ふっ」

「誤魔化さないでください！？」

一夏の問いかけにしぐれは視線を逸らして笑みをこぼす。だが、その程度では一夏は誤魔化されなかった。

何せ命が懸かっているのだ。しぐれの襟首をつかみ、涙目で揺さぶ

る。

「まあまあ、落ち着きたまえ一夏君」

「岬越寺さん……」

秋雨が一夏を落ち着かせようと、その肩にポンと手を置いた。

「人間……生まれたら必ず死ぬんだ！！　なに、それが遅いか早いかの違いだよ」

「っ！」

が、それは逆効果だった。一夏は秋雨の手を振り払い、脱兎のごとく駆け出す。

今しがた入ってきたゲートを目指し、全力で走った。

「ふっ」

もう一度しぐれが笑った。返ってきた鎖鎌を早速取り出し、それを一夏に向けて投げる。

分銅が鎖を伴ってぐるぐると巻きつき、一夏は一瞬で拘束される。後は成す術もなく、一夏はあっさりと引き戻された。

「俺はまだ死にたくない！　た、助け……助けて千冬姉エエ！！」

「こら、静かにしないか。周りに変な目で見られるだろ」

泣き叫び、見つとも無くもここにはいない姉に助けを求める一夏。それを咎める秋雨だったが、そんなことを気にする余裕はなかった。

「今更そんなこと気にしてるんですか！？　そもそもこの組み合わせじゃ好奇の視線に晒されるのは当然でしょう！」

隼人、アパチャイ、逆鬼。この3人の巨漢だけでもかなり目立つ。それに加えて武器を所持したしぐれ、胴着姿の秋雨、カンフー服に帽子の馬は十分に目立ち、一夏の現状は更に拍車をかけていた。

「しぐれどんに秋雨どんも意地が悪いね。いつちゃん、なにもそんなに怯える必要はないね」

「馬さん……これって、本当にどういう状況なんですか？」

そろそろ收拾のつかなくなった状況を落ち着けるため、馬がフォロ―に回る。

しぐれの鎖鎌から解放された一夏は疑問の全てを馬に向けた。

「ちょっとした人助けね。いつちゃんも知つてのとおり、梁山泊にはたびたびお偉いさんやその関係者が訪れてくるね。そんな人達が持つてくるのは表沙汰にできない秘密裏の依頼がほとんど。もっともそれは梁山泊の貴重な収入源になるね」

「えっと、つまり……今回の旅行はその依頼のついでということですか？」

「そういうことね。あちらさんがおいちゃん達全員の旅費を出してくれるというから、どうせなら豪勢に観光をしようと思ってね。そうじゃないや、うちが海外旅行には行けないね」

「危険……じゃないですよ？」

「大丈夫ね……………多分」

「帰る！ 俺、お家に帰るウウ！！」

「男は度胸ね。いつちゃん、覚悟を決めるね」

「いやだ〜！ 千冬姉え！ 鈴！！」

收拾を図ろうとした馬も失敗。一夏は取り乱し、再び叫びだす。  
いい加減喧しくなってきたので、しぐれは筒のようなものを取り出して一夏に向ける。口にくわえ、軽く息を吹きかける。

「ぷっ」

「がっ……………」

「流石しぐれどん、見事な腕前ね」

それは吹き矢。先端には眠り薬が塗っており、一夏の意識が沈んでゆく。

意識を失って立つことすらできない一夏の体を馬が支え、視線を後方へと向けた。

「やっぱり飛行機はいやよ！ 簡便よおお！！」

「今更暴れやがって！ そもそもハンバーグ三週間で手を打ったはずだろうが！！」

「船がいいよ！」

「馬鹿、行くのはイギリスだぞ！ 何日かかると思ってたんだ！？」

そこでは飛行機に乗るのを前にして暴れるアパチャイと、それを取り押さえようとする逆鬼の姿があった。

実はアパチャイは飛行機恐怖症である。一時は美羽が毎晩夕食にアパチャイの好物であるハンバーグを出すということで落ち着きはしたものの、乗る直前になって再び駄々をこね始めた。

「しぐれどん、あっちも頼むね」

「うん……」

馬に促され、今度は吹き矢をアパチャイに向ける。そして一吹き。

「うっ……」

「命……中」

本来なら野性的な勘と並外れた反射神経で余裕で回避することのできるアパチャイだったが、逆鬼に取り押さえられているためにそうはいかなかった。

背中に吹き矢の矢が突き刺さり、動きを一瞬止める。が、それだけだった。

「いやよ、いやよ！ 飛行機はいやよ！！」

「象も眠らせる薬……なのに」

呆れるほどのタフネスさで眠り薬が効かない。しぐれの眠り薬は一

滴でインド象すら眠らせると言うのに、アパチャイの耐性はそれ以上だった。

「仕方がないのう。逆鬼君、秋雨君」

「はい、長老。ここは力技で……」

見るに見かねた隼人が袖をまくり、それに秋雨も続く。

逆鬼、隼人、秋雨。屈強な男3人でアパチャイをふんじばる。流石のアパチャイも3人だとどうしようもなく、悲痛な叫びを上げながら飛行機内に連行されていった。

「飛行機はいや、飛行機はいやよ！」

「いい加減大人しくしろ！」

「そうだよアパチャイ君。飛行機が落ちる確率は宝くじで一等が当たるより低いから安心したまえ」

「そうじゃよ。お前さんが機内で暴れたりしない限り大丈夫じゃから安心するといい」

「それ、洒落になつてねえな……」

騒々しく、騒がしく、梁山泊の面子はそんな感じで飛行機に乗り込んでいった。

そんなこんなでイギリス。

「うまつ！ピザうまい！！」

「いつちゃん、ピザじゃなくてピッツァね」

「アパパ、ピッツァおいしいよ」

「ごめんなさい、世界一料理のまずい国なんて思ってたごめんなさい」

「おい……しい」

「本当ですわ。ほつぺたが落ちてしまいそうです」

なんだかんだで一夏とアパチャイはイギリス旅行を満喫していた。馬やしぐれと、美羽と共にピザを頬張り、空きっ腹を埋めていく。飛行機内では機内食以外食べられなかったからだ。

アパチャイは飛行機を降りたらいつもの元気と食欲を取り戻し、一夏はイギリスに着いてしまったのでもはや開き直るしかなかった。食費を含めた滞在費は依頼主持ちらしいので、とにかく食べた。自棄食いのように、いや、それは正真正銘の自棄食이었다。

「あ……そうだ、一夏。一応これを持ってお……け」

「へっ……？」

現実から逃避しようとする一夏だったが、それをしぐれは許してくれない。

思い出したようにあるものを取り出し、それを一夏の前に差し出した。

「ちよっ、これって刀ですか！？ な、なんでこんな物騒なものを……」

「護身用だ。もしかしたらちよっと危険な目に遭うかもしれない……から」

「あははは…… アパチャイ、次はシーフードピザを」

「アパ、限界まで食べ続けるよ。最後の晚餐よ！」

「アパチャイ……それ、洒落になってねえ」

しぐれの物騒な言葉を聞き流し、さらに現実から目を背けようとする一夏だったが、アパチャイのあまりにも的を射た発言に現実へと戻されてしまった。

晚餐ではないが、これが一夏の最後の食事となりかねない可能性があった。

「ふっ、ただの刀じゃない……ぞ。知り合いの刀工がお前のために打ってくれた刀……だ。通常の刀とは刃と峰が逆になってい……る」

「へ……？」

しぐれに言われて、一夏は受け取った刀を少しだけ鞘から抜いてみる。

すると、しぐれの言葉通りこの刀は刃と峰が逆になった奇妙な刀だった。と言うか、これは……

「逆刃刀か!？」

正真正銘の逆刃刀。古流剣術飛天御剣流の使い手であり、人斬り抜刀斎と呼ばれた人物が不殺の剣士になつた時に用いた刀。

一夏の愛読書であり、しぐれもたまに読んでいる漫画に出てきたものだ。その現物を前にし、一夏の頬が引き攣る。

「なんですかこれ!? 俺に不殺の剣士になれって言つんですか？」

「まあ、そんなところ……だ。知つてるとは思うが、梁山泊の真髓は活人拳。人を殺すことをよしとはしない。それで刀剣を武器とする場合は峰打ちとなるわけだが、峰打ちと言つのは斬る時に峰と刃を逆にする高度な技……だ。実戦でそれを成すのはかなり難しい」

「確かにこの刀だと常に峰打ちになりますが……それなら木刀や竹光でもよくないですか？」

「その場合は、打ち合った時に相手の刀剣で得物ごと両断される……ぞ」

「もう帰りたい! 着いて早々ホームシックです! 千冬姉え、リイン!!」

相手が刀剣武器とした場合、木刀や竹光では強度に不安がある。それは理解できるが、そんな状況になるかもしれないという思いが一夏の平常心を蝕んでいた。

「不満……か？」

「いや、不満とか言う以前の問題です……」

「そうか……なら、一応もうひとつ用意した武器が……ある」

がつくりと肩を落とす一夏に向け、しぐれが新たな武器を取り出す。それは大きな、あまりにも大きな鍵だった。どんな巨大な門を開けるのだらうと思うようなほどに巨大な鍵。だけどそれは剣、武器だった。

「きゝぶれゝ……」

「逆刃刀がいいです！　これがいいです！！　それはやばい、なんかまずい気がする！」

しぐれがその剣の名称を言い切る前に一夏が抑止する。逆刃刀を握り締め、それが気に入ったような反応を見せることで誤魔化した。何故なら全てしぐれに言わせたら非常にまずい気がしたからだ。主に版權的な問題で。

「そう……か。せっかく、この武器専用の衣装も用意したんだ……が」

「うわぁ……どっかで見たことあるような、真っ黒なコートですね」

「ピストルも……通さない」

性能は確かそうだったが、一夏は丁重に断りを入れた。そして、再び現実から目を逸らす。

「アパチャイ、次はドミノピザにしよう……」

「アパパ」

この一時だけでも、現状を忘れたい一夏だった。

「ふむふむ、今回の依頼内容は彼女の護衛じゃな？」

「そういうことだ。なんでも名家のお嬢様で、遺産絡みのことで命を狙われているらしい」

「人の欲は深いものだね」

観光する一夏達とは打って変わり、依頼主によって用意されたホテル内で隼人、逆鬼、秋雨による3人で今回の依頼についての話し合いが行われていた。

「おそらく、今回の件には『闇』の武器組が出てくるだろうと言う事だ。マスタークラス達人級も何人かいるかもしれないねえ」

「ふむ、なら一応用心のために私も控えよう。逆鬼が交戦中でも、私が彼女を守るよ」

「わりいな……しかし、よかったのかよ？」

「ん、なにがだね？」

念入りに計画を練っている中、逆鬼がふと秋雨に尋ねる。

「一夏を連れてきたことだ。それに美羽もだ。そりゃ、滞在費全額依頼主持ちだから旅行にちょうどいいとは思ってたが、ちっと危なすぎはしねーか？俺達の関係者ということで狙われるかもしれないぜ」

「ほっほっ。逆鬼君は優しいのう」

「まったくですね」

「そんなんじゃないよー!!」

純粹に一夏の心配をする逆鬼だったが、隼人と秋雨に冷やかされて声を荒らげる。

顔が赤く、とても気恥ずかしそうだった。それが更に隼人達の笑いを誘う。

「まあ、なんじゃ。いつくんや美羽の方にはしぐれとアパチャイ、それに馬もついておるから大丈夫じゃよ」

「そうそう、例えば軍隊が来ようと一夏君達に危害が及ぶ心配はないさ」

「そりゃ、わかってるけどよ……」

一夏達には梁山泊の豪傑が3人もついているのだ。例えどんな相手が来ようと撃退できる。

はぐれたり、迷子になったりしなければ大丈夫だろう。そう結論付ける。

「まあ、何かあった時はあった時で、いつもの策でいけばよいじゃろっ」

「そうですね、それがいいです」

「……だな」

隼人の言葉に逆鬼と秋雨が頷く。彼らの言う、いつもどおりの策とは……

「うむ！ なりゆき任せ大作戦じゃー！！」

「なるようになるということですね」

「なんかあったら、その時にどうにかすればいいからな」

とても策とは呼べない、客観的過ぎる結論だった。

結論も出たので、話は仕事のものへと戻る。現在はホテルの部屋に滞在している3人だったが、これにはちゃんと意味があった。

「で、確かこの部屋に嬢ちゃんとボディガードが来るんだろ？ そろそろ時間じゃないのか」

「確かに……これは少し気がかりだね」

梁山泊が護衛する少女は命を狙われているため、常に身を潜める場所を変えているらしい。

そのためにそう簡単には接触できず、このように待ち合わせをしているのだが……時間になっても相手が姿を現さない。

「どうやら……」

秋雨がポツリとつぶやく。違和感を感じる。それと同時に荒々しいものを五感が感じ取っていた。

隠す気など微塵もない殺意。秋雨だけではなく逆鬼や隼人も既に感じ取っており、椅子に腰掛けながらドアへと視線を向けた。

「情報が漏れていたらしい」

瞬間、ドアが突き破られる。ボロボロとなり、意味を成さなくなつたドア板は無理やりはがされ、一人の男が室内に入ってきた。

その手にはトンファーが握られており、おそらくはそれでドアを破壊したのだろう。

「お前らが護衛の助っ人か？ はっ、無駄なことを。どうせ俺に殺されるって言うのによ」

男は傲慢な口調で秋雨達を見下していた。それがどんなに無謀なことかすらも知らずに。

「おやおや、マナーがなっていないね。ドアを破壊するなんてノックが過激過ぎやしないかい？」

「はっ、悠長なことを。んなもん気にする余裕なんてデメエらにあるのか？ ジジイに優男、それに人相の悪い男一人。全員この俺があの世に送ってやるよ」

「ふおっふおっ、なかなか血気盛んな若者じゃわい」

「ああ、しかも達人級ときたもんだ。ちっとは楽しめそうだな」

隼人が笑う。逆鬼も笑う。達人級、確かに強力な相手だ。だが、それは一般人やせいぜい弟子や妙手級ならの話。  
目の前の男など、梁山泊の豪傑達には眼中になかった。

「……舐めてんのか」

「滅相もない」

「ただ、青いなと思っただけじゃ」

「へへっ」

「やっぱり舐めているだろう！ 殺す！！」

隼人達の言葉が男の癪に障る。青筋を浮かべた男は激情のままに突っ込んだ。

彼に与えられた任務は護衛の殺害。つまりは隼人達を殺すことであり、言葉を交わすよりも行動で示した方が早いと思ったからだ。それにこれ以上の会話は億劫で、考えることすら面倒になったためにただ闇雲に突っ込んだ。それがどんなに愚かなことだろう？

「おせエ！」

「がふっ！？」

それを理解するのは逆鬼の拳が顔面に直撃し、意識を手放し、次に男が目覚める時のことだった。

＋＋＋

「……はぐれた」

織斑一夏は現在、迷子だった。トイレを探して席を立った時にしぐれ達とはぐれてしまい、一夏は内心でダラダラと汗を掻く。

「やばくないか、これマジで。こんな時に俺一人って……うわっ、どうしよう」

いまいち状況は理解できていないが、この場所はどうにも危険らしい。

少なくともしぐれが一夏に護身用の武器を渡すほどにだ。いくら逆刃刀とはいえ流石にそのまま持ち歩くわけにはいかず、今は刀袋に入れて持ち歩いている。

「とにかくホテルに戻らないと……道がごちゃごちゃしててわかりにくいな」

とりあえずは宿泊先のホテルに戻ろうと考える一夏。そこには隼人達がいるはずだ。

だが、そのホテルまでの道順がわからない。先ほども言ったが一夏は迷子である。

「誰かに道を聞けば……って、俺、あんまり英語得意じゃないんだけど。そもそもこの国の言語のイギリス英語ってなんだよ？ 普通の英語じゃだめなのかよ。ああもうっ、こんな時に逆鬼さんか岬越寺さんがいれば……」

考え事をしながら一夏は歩いていく。彼は意識していないが、次第に人通りの少ない裏路地に向けてだ。

それがまさか、人生のターニングポイントになるなど一夏は思いもなかった。

「とりあえず、話しかけてみないことには始まらないよな……うん。誰に声をかけよう？ あ、あの子とかいいかな？」

裏路地で見つけた、1人の少女。他に人影もなく、歳も近そうだったからなんの警戒心も抱かずに一夏は声をかけた。少女は鮮やかな金髪の長い髪を持ち、それを青のヘアバンドで止めている。それと同色の透き通るようなブルーの瞳。十人中十人が美少女と答える容姿の彼女に向け、一夏はなけなしの知識からひねり出した英語で話しかけた。

「え、エクスキューズミー……」

「だ、誰です!？」

話しかけられた少女は驚きの声を上げる。その反応に疑問を浮かべる一夏だったが、返ってきた流暢な日本語にほっと一息をつく。

「なんだ、日本語しゃべれるんですか。それは助かります。えっと、俺は織斑一夏と言んですが、道を……」

「どなたか存じませんが、今はそれどころではないんです。早々にここから退散しなさい!」

「いや、そうしたいのは山々なんですけど道が……」

道を尋ねようとする一夏だったが、少女は慌てた様子で遮る。

一夏としてもこんなところにいたくはなかったが、帰る道がわからないためにどうしようもない。

少女を宥め、もう一度訪ねようとする一夏だったが、

『ターゲットみつつけ！ これで僕が始末したら先生に褒められるぞ』

聞きなれない言語で、軽い感じの聲がかけられてきた。

『あ、あなたは……』

「ん？」

その声の主に、少女も一夏が聞きなれない言語で話をする。おそらくこれがこの国の言語なのだろう。一夏にはまったく理解できない。

2人は一夏を他所に、なんらかの会話をする。

『ちよろちよろ逃げ回ってさあ、めんどうだからとつと死んでくれない？』

『誰が死にますか。あなた方の思い通りになるとは思わないことですわ！』

声の主は男だ。一夏や少女とあまり都市の変わらない少年・その手にはトンファアが握られており、黒のコートを着ている。一瞬、先ほどしぐれが持っていたどこその機関員のような印象を受けたが、色は同じでもデザインが違っていた。

『虚勢張っちゃって、可愛いねえ。でもさ、どうするの？ いか  
君が代表候補生とはいえ、ISがないんじゃない？どこにでもいる普通の  
女の子だ。そんな君が僕に勝てると思っっているの？』

『……………』

『確かにISができてから世界は変わった。今の時代、女尊男卑が  
当たり前なんだろうね。でも僕は思っただよ、凄いのは女性ではな  
くISと言う兵器だ。けど、たかが500にも満たない兵器で女性  
全員が偉そうにするのは気に入らない。だから教えてあげるよ。兵  
器は、武器はISだけじゃないってことをね。攻守に優れたトンフ  
アーこそが最強なんだ！』

宣言と共に少年が少女に襲い掛かる。トンファアーを振り回し、目  
も止まらぬ速さで突っ込んだ。  
獣のように荒々しく、雄々しい動き。振り回されるトンファアーの一  
撃は強烈で、直撃すれば人間の頭部を粉碎するには十分だろう。  
もっともそれは、攻撃が当たればの話だが。

「うおわっ！！」

『っ！？』

一夏が間に入り、トンファアーの一撃を刀袋に入っただまの逆刃刀で  
受け止める。

あまりの威力に一夏自身が吹き飛びそうになったが、踏ん張ること  
によって耐え抜く。

トンファアーという重量のある武器を逆刃刀で真正面から受け止めた  
ことから強度による不安があったが、逆刃刀も一夏同様に無傷だっ  
た。

「なんだかんだでしぐれさんが用意してくれた武器。流石だな……  
鞘も鉄ごしらえらしいし」

『くつ、なんなんだよお前！？ 何で僕の邪魔をする！！』

「英語？ まあ、どのみち外国語は中国語以外わかんないからどう  
でもいいけどさ、今、お前がなんて言ったのかは予想できるぞ。何  
で邪魔をしたのか、か？」

声を荒らげる少年に対し、一夏はあくまで冷静だった。

少女を少年から庇う位置に立ち、刀袋から逆刃刀を取り出しなが  
ら述べた。

「女の子を襲う暴漢を見かけたんだ。そりゃ助けるのが男として、  
いや、人として当然だろう。何がなんだか状況がさっぱり理解で  
きないけど、邪魔をさせてもらうぞ」

「ちょっと待ちなさい！ あなたには何も関係ないでしょう。早く  
ここから離れなさい！！」

だが、一夏のとうとうとした行動。それを拒否したのはよりもよ  
うて命を狙われた少女だった。

「せっかく助けてやろうつてのに、その言い方ってないだろう？」

「誰も頼んでませんわ！」

『なに言ってるのかわからないけどさ、いいよ。邪魔をするって言  
うなら君も一緒に殺す！！』

けど、そんなこと少年にはどうでもよかった。邪魔者はまとめて処分する。そんな短絡的な思考で、今度は一夏に襲い掛かる。

「速いな。けど、その分直線的でわかりやすい」

獣のように荒々しく、雄々しい動き。だけどそれ故に素直で、動きを予測することは簡単だった。

一夏はステップを踏むように少年の動きを避ける。その場で更なるステップ。ダンスのように回転し、遠心力を載せた逆刃刀の一撃を少年の背中に放つ。

『がはっ……』

その一撃で勝負は決まる。少年は前のめりに地面に倒れ、ぴくぴくと痙攣していた。

逆刃刀だから切れず、死ぬことはないだろうと思うが油断はできない。こんな得物でも骨を砕くことは十分に可能であり、当たり所が悪ければ最悪死ぬ。

打った場所が頭部ではなく背中だったことからその心配はないだろうが、少年はしばらく起き上がることはないだろう。それほどまでに強烈で良い一撃が入ってしまった。

「あなた……まずいですわよ」

「まずいつて何が？」

少年が一夏によって撃退された。だと言うのに少女はあまりにも思わしくない顔色をしている。

それを不審に思う一夏に対し、小序は悲痛な声を上げた。

「彼らに目を付けられてしまいますわ！ ああ、なんてことでしょう。無関係の人を巻き込んでしまいましたわ」

「ちょ、落ち着け。彼らって誰だよ？ お前を狙っている奴が他にもいるのか？」

取り乱す少女と、状況を整理しようとする一夏。その時に感じてしまった。背筋を震わせる、ぞわりとした感覚。

あまりにも強大で、強力な気配。冷や汗が止まらない。ガタガタと体が震え、一夏の感覚すべてが警告音を鳴らしている。

「おいおい、マジかよ。あいつの弟子がやられたのか」

新たな男の声。日本語で、一夏にも意味を理解することができた。けど、安心はできない。何故なら一夏が警戒しているのはこの男が原因だからだ。

「坊主、少しはできるみたいだな。だがそこまでだ、その女を置いてとっと立ち去るなら見逃してやる。わかるだろう？ 俺はそこで寝ているガキとは桁が違う。坊主が逆立ちしようと思てない相手だ」

黒い髪とサングラス。いかつい表情には生々しい傷がいくつもあった。

その男の手には巨大な槍、ランスという武器が握られており、屈強な肉体はそれを難なく振り回すことが可能だろう。そんな男の姿を確認し、一夏は確信する。自分では絶対に勝てない相手だということ。

達人級。梁山泊の豪傑ほどではないだろうが、男は一夏がどう足掻

いても手の届かない次元の存在だった。  
まさに絶体絶命。緊張でカラカラになった喉を潤すためにぐくりと生唾を飲み、この状況をどう打破するべきか思考を巡らせ、答えはすぐに出た。

＋＋＋

「アパ、カレーを食べてたらいつの間にか一夏がいなくなってるよ」

「なに、ホントね？」

一夏がいなくなっていることに気がつく馬達。

アパチャイはカレーを頬張り、馬は美しいイギリス人女性を見つけ  
ては声をかけていた。

「アパ、まずいよ。いや、カレーは美味しいよ。けどまずいよ」

「秋雨どん達になんて言えばいいね？　くう、いっちゃんもいい年  
して迷子になるとは……」

その間に一夏の姿が消えており、馬とアパチャイは多少の焦りを見  
せる。

状況が状況なだけに、万が一という可能性もあるのだ。一夏と美羽  
のことを任されていたのに見失ったでは秋雨達に申し訳が立たない。

「だいじょう……ぶ」

「ふえ？」

そんな2人に向け、しぐれがどこか得意げに言う。美羽はピザを口にしながら首をかしげていた。

「闘忠丸と一緒に……だ。なにかあっても平気」

「そういうことね。なら大丈夫ね」

「アパパ」

織斑一夏、彼の命運は一匹のネズミが握っていた。

## BATTLE 3 動

「戦略的撤退！」

「きゃあ！？　ちょ、あなた！　なにをするんですの！？」

「黙ってる！　舌を噛むぞ」

達人級を前にし、一夏は逃走した。少女を抱えて脱兎のごとく逃げ出す。

いくら一夏がしぐれに剣術を教わっているとはいえ、達人級の武器使いに勝てるわけがなかった。戦えばほぼ確実に命を落とす。故に戦わない。達人級の恐ろしさは誰よりも理解しているつもりだ。

「なんでですの……あなたには何も関係ありませんのに」

「だから黙ってる。そもそも、放っておけるわけないだろ」

達人級の男の狙いはこの少女のようだ。男はこの件に関わらないなら見逃すと言っている。言われたとおりにすれば一夏に危害が及ぶことはないだろう。

けど、それは少女を見捨てるということだ。たまたまこの騒動に遭遇しただけの一夏だったが、襲われている少女を放っておくことなどできなかった。

「事情は飲み込めないけど、俺がお前を守ってやるよ。奴には指一本触れさせない」

「……………」

一夏は走り続ける。少女を抱えたまま、常人では考えられない速度で疾走していた。

一般的に知られている百メートル走の世界記録。一夏はそれを人を抱えた状態で更新している。

「……せめて、この抱え方は何とかありませんの？」

「これが一番抱えやすいんだよ」

現在、少女は一夏によって『横抱き』、通称お姫様抱っこをされていた。

両手はふさがれるが走りやすく、逃げるためにはこれ以上最適な抱き方はない。ただ、流石に逆刃刀まで持つてくる余裕はなく、その場に捨ててきてしまった。

せつかくしぐれが用意してくれたものだが、持っけていても邪魔になるし、そもそも達人級相手に戦うことが無謀なのでこの選択に迷いはない。

今は逸早く、この場から退散するべきだ。人通りの多いところに出れば相手は目立つのを避けるだろう。もしくは梁山泊の者達に合流する。梁山泊の豪傑に勝てる存在などほぼ皆無だ。合流さえできれば一夏の勝ちだ。

「なるほど……いい判断だ」

「なっ!？」

が、その考えは真横から聞こえてきた声によって粉々に粉碎される。声の主、一夏の真横を並走していたのはさっきの達人級の男。

いくら一夏が少女を抱えているとはいえ、世界記録を更新するほど

の速度で走っているというのに、男は数十キロはありそうな得物を持って、涼しい顔を浮かべて走っていた。

「勝てないともて、逃げに専念するか。少しでも軽く、そして走りやすくするために武器も捨てる。それにいい足腰をしている。確かに並みの者が相手なら十分に逃げ切ることができただろうな」

「くっ……」

「きゃっ!？」

加速。一夏は更に速度を上げ、アスリートを置き去りにする速度で走った。だがそれでも男は慌てず、不敵な笑みを浮かべてつぶやく。

「鬼ごっこか……やったのはガキのころ以来か？ いいだろう、少しだけ付き合ってやるよ」

男も速度を上げた。捕まれば死のリアル鬼ごっこ。

一夏は生き残るために必死で走った。

「チュー」

それを見守る……一匹のネズミ。しぐれのペットである闘忠丸だ。

闘忠丸は裏路地にある建物の屋根に上り、どこからかロケット花火とマッチを取り出す。

とてもネズミとは思えない器用さでマッチを擦り、ロケット花火の導火線に点火する。

導火線が燃え尽き、火薬に火が引火した。笛のような音が響きロケット花火が打ち上げられ、遙か上空で『パァン』と乾いた音を立てる。

「……………」

それを離れた場所で見えるものがあつた。闘忠丸のご主人、剣と兵器の申し子、香坂しぐれ。

「アパチャイ……馬……みつけた」

梁山泊の豪傑達が動く。

十十十

「ハア、ハア……ゲホツ、ゲホツ……撒いたか？」

達人級から逃げるために限界を超えて走つた反動か、一夏は辛そうに咳き込んでいた。

ここはある廃墟の建物内部。人通りの多い場所に逃げれば如何に達人級とはいえ手を出せないだろうと踏んだが、それは男も十分に承知しているようだった。

一夏を人通りの多い場所に逃さないように回り込み、追い詰め、更に人気のない場所へと誘導していく。

逃げることができず、戦うことなどもつてのほかな現状で体力の限界を迎えた一夏は身を隠すことを選択し、建物の中に身を隠していた。

「……で、一体どうゆう状況なんだ？」

「……………」

少女を助ける選択はしたものの、一夏は未だに状況を理解していない。

ただ放っておけなかったから、それだけの理由で少女連れ出し、男から逃げていた。

自分に危害が及ぶかもしれない。相手は達人級だ。最悪死ぬかもしれない。それでも一夏に少女を見捨てる選択肢はない。

おそらく、梁山泊の者の誰もが一夏と同じで、少女を助けようとするだろうから。

「そういえば、まだ名前も聞いていなかったな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。君は？」

とりあえずは状況の整理も必要だと考え、少女に状況の説明をしてもらうのは諦める。

未だに少女の名前を聞いていなかったことを思い出し、まずは軽い自己紹介を交わした。

「……セシリア、セシリア・オルコットですわ」

「そうか。セシリアって言うんだな。それにしても危なかったな。なんなんだよあいつら？　いきなり襲い掛かってきやがって」

「彼らは『闇』ですわ」

「闇？」

闇という単語。その言葉の意味がわからず、一夏は首を傾げるだけだった。

そんな一夏に、セシリアは闇のことを説明する。

「簡単に言っしまえば最低最悪の殺人集団ですわ。政財界に通じた者も多く、かなりの影響力を持っています。主に暗殺、諜報、誘拐、護衛、窃盗、傭兵派遣などの依頼を請負、遂行しているとか」

「マジ……映画とかじゃなくて、そんな組織が本当に存在するのによ？」

「ええ……それであなたは、そんな組織である闇に関わってしまいましたわ」

「そうだよ！ 思いっきり関わっちゃったよ！！ うわっ、なにしてんだ俺！？」

トンファーを持った少年を倒し、ターゲットのセシリアを搔っ攫って逃げ出した。一夏はこれ以上ないほどに闇に関わってしまった。達人級の男達、闇の狙いはセシリアらしいのでまた襲ってくることは確実だろう。関わってしまった一夏もまた、彼らに狙われるかもしれない。

「本当にあなたは余計なことをしましたわ。誰も助けてくれだなんて頼んでいませんのに」

「ははは、手厳しいな」

せめてもの虚勢で乾いた笑みを浮かべるが、一夏からは嫌な汗が止まらなかった。

どうやってこの状況を打破するべきか？ 一夏は冷静に考え、あるものを取り出した。

「そっだ、電話だ！」

「警察にでも連絡する気ですか？ 無駄ですわ」

携帯電話を取り出した一夏に、セシリアの冷たい声が響く。  
なにもかも諦めたようで、感情を感じさせない声だった。

「先ほども言いましたが、闇は強大な力を持っていますわ。警察ごときに何かできるわけ……」

「違う違う。闇のことは知らないけど、俺だって達人級を警察が何とかできるなんて思ってたねえよ。達人級には達人級。今、その人達に連絡を……」

セシリアの疑問に返答し、一夏は携帯を操作する。アパチャイやしぐれは携帯を所持していなくとも、馬は持っているはずだ。それも最新型の物を。

だが耳元に当て、呼び出し音を聴いたところで、一夏の携帯は粉々に粉碎された。

「へっ、あ……俺の携帯が……」

「いつから鬼ごっこがくれんぼに変わったんだ？」

「っ！？」

それを成したのは達人級の男。気配を押し殺し、気づかれないように一夏とセシリアの元に接近した上で、あの巨大なランスで一夏の携帯のみを破壊していた。

「くそつ、俺の携帯が！」

「きゃあー!？」

悪態を吐き、一夏は再びセシリアを抱えて走り出す。

戦闘は無謀。故にこれしか手段がない。唯一の活路、梁山泊の者達への連絡手段は男によって断たれてしまった。

それでも一夏は考える、希望を見出す。この状況をどう打破すべきか？

「もう遊びには十分付き合ってただろう。終わりだ」

「あがつ、あ、あああああつ!!！」

「あう……」

だが、その僅かな希望すら摘まれてしまった。

ランスの先端が一夏の右足、太ももの辺りに突き刺さった。骨が断たれ、大量の血が流れる。倒れる一夏。投げ出されたセシリアは床を転がり、体を強打した。

こんな負傷をしたら、セシリアを抱えて走れるわけがない。

「つつ……一体なにを、きゃあああつ!？」

一夏に抱えられていたセシリアは状況を理解することが遅れ、投げ出されたことに対する抗議をしようとしたところで状況を把握した。足を押さえ、蹲る一夏。彼の右足は真っ赤に染まっていた。

「一般人がこつちの世界に足をつっ込むからそうなるんだ。高い授業料だと思いな、坊主」

男の嘲笑気味の言葉が耳を打つ。聞き分けのない子供を咎めるような声だった。

ただ状況はそれほど微笑ましいものではなく、緊迫し、重苦しい雰囲気が充満していた。

「さて、それじゃあとつととターゲットの始末を……ん？」

男は蹲ってる一夏の横を通り抜け、青白い顔をしているセシリアを始末しようと近づく。

男の接近に気づき、セシリアが『ひっ』と小さな悲鳴を上げた。けど、彼女には抵抗する術がない。

今で腰が抜けてしまい、恐れ of 混じった表情で男を見ていることしかできなかった。

ならば何故、男はその足を止めたのか？ それは、蹲っていた一夏が男の足をつかんだからだ。

「待て、よ……」

「おいおい、タフだな。肉体的にも、精神的にも」

これほどの目に遭っても畏縮しない一夏に、男は感心する。

武術に多少の心得があるのなら対峙するまでもなく実力差を知り、臆してしまうことだろう。そんな中でも一夏は冷静な判断を下し、またこのように負傷しても諦める気配はなかった。

一夏は男を睨み殺すような視線で見つめ、問いかける。

「なんで、殺そうとする。セシリアが……なにをしたって言うんだ？」

「別に何もしてねえよ。ただ、仕事だからやってるんだ」

「仕事……？」

「というか、事情を知らないのにあんなことをしたのか？ 随分なお人好しだな、坊主。いいぜ、教えてやるよ」

いくら視線が鋭くともあの怪我ではまともに動けないだろうと判断し、油断し、男は一夏の問いに素直に答えた。

「こいつはある名門貴族のお嬢様だ。その上ISのイギリス代表候補生。そう聞くとなんの苦労もなく育った才色兼備のお嬢様だが、実はそれなりに苦労してるんだよ。両親を事故で亡くして莫大な遺産を継ぐことになる。それ目当てに親族が歩み寄ってきたが、このお嬢様は猛勉強の末にそれを守り通した。凄いな、素晴らしいことだ。が、それで面白くないのは遺産を手に入れられなかった親族達。歳若い小娘が遺産を独り占めするのが気に入らず、それを手に入れようと躍起になった。で、その中の誰かが言っただ。もしこのお嬢様が死ねば、遺産が自分達に回ってくるんじゃないかってね」

男は笑う。失笑をこぼし、嫌悪感に染まった表情だった。

「反吐が出そうな理由だろ？ ったく、人間ってのはロクなもんじやねえ。どいつもこいつも欲望に塗れてやがる」

「ふざ……けるな。お前もそのロクでもない奴の一人じゃないのか！？ 人殺しなんてやってる時点で！」

一夏の視線が更に鋭くなる。それを受けても男は飄々とし、軽い口調で答えた。

「ああ、そうだな。俺もロクでもない人間の一人だ、人殺しなんてやってる時点で。でも、そんなクソツタレなことが俺の仕事なんだよ」

「ぐうつ……」

男が一夏の手を蹴り払う。もはや遮るものは何もなく、男はセシリアと向き合った。

「ひ、あ……」

セシリアの表情が恐怖に引き攣っていた。いくら気丈に振舞おうと、いざ死を目の前にすると誰でも臆するものだ。それは彼女も例外ではない。

恐怖し、畏縮し、絶望し、さまざまな負の感情に彩られた表情を見せる。更に一夏の足から流れる大量の血液が、セシリアの恐怖心に拍車をかけていた。

「せめてもの情けだ。安らかな死を……」

男は別に、セシリア自身に恨みがあるわけではない。仕事だからやるが、罪悪感を感じないというわけではないのだ。

歳若い少女を手にかけるのは若干の抵抗がある。故に責めて、自分にできる範疇としてセシリアを苦しませないように、一撃で急所を断って殺そうとした。

振り上げられる凶器。それが振り下ろされる前に、一夏が立ち上がった。

「オオオオオオオオ!!」

「おいおい、嘘だろ……」

立ち上がり、男に攻撃を仕掛ける。

拳だ。正拳突きなんて上等なものではなく、ただ力任せに殴りかかっただけ。故に達人級の男には容易く避けられてしまうものの、男が驚愕したのは別のところにあった。

「その怪我で立つのか？ 普通立ち上がれないだろう。痛覚を感じていないのか？」

骨を断たれ、大量の血を流したというのに一夏は立ち上がった。

右足ががくがくと震え、膝が笑っている。先ほどの拳にだって力が乗っていなかった。それでも一夏は立っており、男を睨みつけている。

「くっ、はっ……ごほっ、カハアアア」

咳き込みながらも息を整える。視線の鋭さと共に威圧感が増し、その姿には達人級の男も背筋に薄ら寒さを感じるほどだった。

そして、理解する。

「そうか、そういうことか！ 坊主、お前は典型的な動のタイプなんだな？」

武術家には大きく分けて二つのタイプが存在する。

心を落ち着かせて闘争心を内に凝縮、冷静かつ計算ずくで戦う『静』のタイプと、感情を爆発させ、精神と肉体のリミッターを外して本能的に戦う『動』のタイプ。一夏は後者、典型的な動のタイプの武術家だということだ。

これらの属性に優劣の差があるわけではなく、個人の戦闘スタイルや性格的な向き不向きで決まる。

静は自身の実力を常に安定して発揮でき、力量が劣る相手との戦いで不覚を取ることが少ない。対して動はその時のテンション次第では実力以上の力を発揮できる場合もあり、時にはアドレナリンの多量分泌により痛みすら感じなくなる。今の一夏の状態がまさにそれだ。

「ウオラアアアッ!!」

「ちいつ!?!」

獣のような咆哮と共にまたも一夏が殴りかかる。基本もなにもなっていない、力任せに振るっただけのただの打撃。

大振りで隙だらけ。そんな拳など、達人級の男なら簡単に避けられるはずだった。だが避けられない。

「速っ……」

拳が男の顔にかする。出鱈目なほどに速い拳。

一夏は肉体のリミッターをはずしているために、普段は無意識のうちにセーブされている力が解放された。

いわゆる火事場の馬鹿力状態。予想外の動きに不覚を取った男に、更なる一夏の追撃が加えられる。

「ウラア!」

「くっ……」

男の所有する武器はランス。必然的に攻撃方法は突きのみとなり、



攻撃の手は未だに収まらない。怯んだ男に向け、一夏は更なる追撃を放っていく。

暴れるように荒々しく、怒濤の攻め。あまりの猛攻に流石の男も成す術がないようだ。

「いい加減に……」

少なくとも一夏はそう思っていた。

「しやがれえええええ！」

男の怒りが爆発する。ほぼ密着状態では役に立たないランスを投げ捨て、一夏の拳をつかんだ。

振りほどこうとする一夏だったが男はそんな暇を与えず、拳を握ったまま投げ飛ばした。

「ふう！」

背中から壁に叩きつけられ、肺の中の空気を全て吐き出されてしま  
う一夏。痛みを感じずとも流石にこれには堪らず、息苦しそうな表  
情を見せる。

「末恐ろしいな、坊主。油断しすぎていいのをもらっちゃった」

倒れこんだ一夏に警戒しつつ、男は冷静に先ほど投げ捨てたランスを拾い上げる。

サングラスが割れた時の目元の傷、手刀による切り傷、一夏の猛攻を受けたというのにそれ以外目立った外傷はなかった。

「が、基本がなっちゃいないな。なんだあれ？ 剣以外素人か？」

せつかく筋がいいのに、無手の戦闘だとああもお粗末なんだな」

動として覚醒した一夏は確かに強かった。並外れた身体能力を披露し、思わず男が不覚を取ったほどにな。

だが、基礎がなっていない。一夏が師事していたのはしぐれだけであり、剣術以外の修行をまともにやったことはなかった。

無手の武術に関してはほぼ素人であり、高いだけの身体能力で暴れまわることしかできない。ましてや達人級に挑むこと自体が無謀である。

「く、そ……」

「おいおい、もうやめとけ。それ以上やったら死ぬぞ」

尚も立ち上がろうとする一夏に、男は呆れたように言う。

アドレナリンの多量分泌によって痛みを感じなかった一夏だが、だからと言って無傷というわけではない。むしろ怪我をしても痛みを感じるできないという、大変危険な状態なのだ。

一夏の場合は元から右足を負傷しており、それを無理に動かしたので酷いことになっている。血が絶え間なく流れ続け、既に致死量一歩手前までに血液を失っていた。

痛みがどうこうという状態ではなく、意識が朦朧とし始めている。

「坊主、お前は生かしといてやるから安心しな。もう少し腕を上げて、また会う機会があったらその時は殺してやるよ」

「ま、待て……」

この場は生き残れそうだった。だが、安心も安堵もまったくできない。

今日、偶然であつたばかりとはいえ、一夏は歳の近い少女が目の前で殺されるのを傍観できるタイプではない。放つて置くことができない。

何とかして助けたいと思う。だが、これ以上は体が言うことを聞かなかった。

「むっ!？」

そんな時、ふと男の動きが止まった。一夏はなにもしていない。なにもしていないのに男が何かを感じ取り、その場に立ち止まった。

「どうやら、一匹ネズミがいるようだな」

「は？」

一夏には何のことだかわからない。が、男は冷静で、動きを止めた原因、腕に刺さったものを引き抜く。

それは爪楊枝ほどの大きさの槍。おそらくは、これを投擲したのだろう。

「暗器の類か？ 毒は塗ってないみたいだがいい腕だ。俺に気配を悟らせないとはな。だが、もう隠れても意味はない。姿を現せ！」

男の言葉に答え、姿を現したものの。それは……

「チユッ」

「……………はあ!？」

本物のネズミだった。この展開には、流石の男もポカーンと口を開

けて固まってしまう。

「とう……ちゅうまる？」

「なんだ坊主。このネズミはお前のペットか？」

そのネズミの正体は鬨忠丸。一夏のペットではなく、しぐれのペットで友達。

そして彼（？）がどうしてここにいるのかというと……

「弟子が世話になった……な」

「っ！？」

「しぐれ、さん……」

ご主人様をここに案内してきたからだ。

「おいおい、おいおいおい……まったく気配を感じなかったぞ。何者だ、小娘……」

男と一夏の間、その場所に突如現れた気配と姿。剣と兵器の申し子、香坂しぐれ。

彼女の登場に、男は激しい動揺を見せる。

「アパ、大丈夫かよ、一夏」

「むっ、これはいかな。急いで止血針を」

事態の変化はそれだけではない。更に2人、男が気配すら感じ取る

こののできなかったものが現れる。

いつの間にか、気づいたらそこにいたのだ。達人級である男がこの3人の者の気配にまったく気づけなかった。そのことから考えられるのは一つだけ。

「達人級が3人？　しかも坊主、お前の身内か？　お前が一番なんなんだよ？　何者なんだ！？」

男の技量を遥かに超える存在。男は達人級ではあるが、達人としての格付けは下の方、相撲で例えるなら幕下だ。

だが、この3人は違う。男とは雲泥の差を持っている。遥か上位の存在、横綱とでも言うべきか？

男の第六感が先ほどから絶え間なく悲鳴を上げている。

「人は斬らぬと……誓った……が、一夏の敵だ。無事で済むと思う……な」

「まずいな、こりゃ……」

立場が逆転し、絶望的な状況に追いやられる男。

3人の達人級を相手にし、生き残れる可能性はほぼゼロといってもいいだろう。

今度は男がこの状況を、どう打破すべきか考える番だった。必死に考え、何か案をひねり出す。

この際ターゲットの始末を諦め、逃げ出すというのも手だ。だが、あの3人の達人から無事に逃げ出せるか？

そう考えていると次の瞬間、建物の屋根がものすごい音と共に吹き飛んだ。

「あらあら、まだ手間取っていたんですか？　相変わらずどんくさ

い」

「ちつ……余計なお世話だ」

現れたのは二十代後半ほどの女。彼女は見晴らしのよくなった上空で、クスクスと馬鹿にしたような笑みを浮かべていた。

目を見張るべきはその身に纏った武装。間違いなくあれが建物の屋根を跡形もなく吹き飛ばしたのだろう。

それはIS。女性にしか扱えない史上最強の兵器。

「無能なのに口だけは達者ですね。これだから男というものは」

女は女尊男卑を地で行くような性格で、言葉には男を馬鹿にした態度が十分に含まれていた。

それに対して男も忌々しそうに舌を打ったことから、この2人の仲は良くないらしい。

が、そんなことなど梁山泊の者には関係ない。男と女の仲などどうでもよいことだ。

ISは最強の兵器だ。故にそれを扱える女は自身がこの中では最強だと思っているようだが、それは違う。

彼女は知らない。武術を極めた者、達人の恐ろしさを。

「あいやゝ、今日はおいちゃんにとってラッキーデーね。是非とも縛札衣ばくさつゐを使うね」

「アパチャイもやるよ。死んだ一夏の敵を取るよ」

「アパチャイ、俺、死んでないから……」

テンションの上がる馬と、意気込むアパチャイ。一夏はアパチャイ

の発言に突っ込みを入れる。

そんな中でしぐれだけ、真剣な面持ちで言葉を発する。

「妙……だな。お前達の狙いはあの子一人……なんだろう？ それなのに達人級とIS操縦者まで出てくるとは……随分ご執心なんだ……な」

しぐれの感じた疑問。今回、イギリスに来たのは少女を、セシリアを保護するため。

セシリアを襲う組織は闇の武器組。セシリアがいくらIS操縦者で代表候補生とはいえ、現状はISを持たない少女に達人級だけではなく、武器組みに所属するIS操縦者までも出てくるのは予想外だった。

「別にそうでもないですよ。本来ならこの仕事は私が受ける予定だったんです。それなのに何の因果か、役立たずな男にも話が回ってましてね。だから仕事を譲ってあげたんです。その際にサービスとしてその子のブルー・ティアーズというISを点検中に掻っ攫ってきたのに、まだ始末できていなかったから私が自ら出てきたんですよ」

「なっ、あなたがわたくしのブルー・ティアーズを……」

「ええ、拝見しましたが良い機体でしたね。あんなものを使われたらこの男には荷が重いと思つてのサービスだったんですけど、こうも期待はずれだと呆れるしかありません」

「けっ……」

要は仲間割れのようなもの。同じ武器組とはいえ、使う武器によつ

て不仲があるらしい。  
ましてや女は高圧的な態度で男を馬鹿にしている。あれでは仲が悪くて当然だった。

「さて、おしゃべりは終わりにしましょうか。ここから先は私がやりますので、あなたは下がっていてください」

「……わかったよ」

女は男を下がらせる。素直に距離を取った男の姿を確認し、しぐれ達を見下したように言う。

「さて、あなた方は男ですが、せつかくの達人級とのことですからね。ここは私の弟子達に戦わせてみましょう」

いや、正確には馬とアパチャイをだ。余裕をかまし、そんなことを言う。

その宣言と共に、上空から更に2人の少女が降りてきた。量産型だが、ISに身を纏った十代半ばほどの少女。彼女達を馬とアパチャイに宛がうつもりなのだろう。

それが、どんなに無謀なことなのかも知らずに。

「いいねいいね、最高ね。全員おいちゃんが纏めて相手してあげるね」

「アパパパパ」

馬のテンションは鰻上りとなり、アパチャイは笑っていた。

そんな中、しぐれは冷静で、無表情で待機形態となっていた自身のISを起動させる。

しぐれの首飾りが光を発して形を変え、最強の兵器となった。  
その名は黒影<sup>こくえい</sup>。その名の通り、黒一色のISだった。鎧のような装  
甲をしており、見た目どおりに強固な防御力を有している。  
腰にはしぐれの愛刀、『刃金の真実』と呼ばれるものと酷似した刀  
が差されていた。

「馬、アパチャイ。あいつとそいつは……ボクの獲物だ。手を出す  
……な」

「あいやく、しぐれどんはいっちゃんをやられて随分お怒りのよう  
ね。わかったね、おいちゃん<sup>おなご</sup>は弟子の女子<sup>おなご</sup>だけで我慢するね」

「オーケー牧場よ」

しぐれの言葉に頷く馬とアパチャイ。イギリスでの騒動を締めくく  
る戦闘が始まるうとしていた。

## BATTLE 4 ふさわしい者

「は、ははは……」

圧倒的だった。あまりにも圧倒的過ぎてもはや笑いしか出て来ない。達人級の男は乾いた笑みを浮かべ、目の前の光景に見入っていた。

「馬家ばけ 縛札衣ばくさつゐ！！」

「えっ……きゃああああああ！？」

馬と相對した少女が悲鳴を上げる。何が起きたのかわからない。気が付いたら身に纏っていたISが解除され、さらにはその下に着ていたISスーツまでもが脱がされていた。

脱がされたISスーツは手足を拘束するように巻きついており、少女は身動きひとつ取ることができない。

羞恥心に顔を真っ赤にし、少女は泣き叫ぶことしかできなかった。

「武術と服には密接な関係があるね。中国拳法には袖を取る型が多くあり、柔術は和服を基本としてつくられ、ローマの格闘技では公平をきすため全裸で行われた。つまり、服を用いて無傷で制す……この技も活人拳の極みのひとつね！！」

真顔でもっともそうなことを言う馬。仮にそうだとしても、まさか実戦であんな技を使うとは思えない。

それを成した馬に男は戦慄する。そして、ちらりと少女に視線を向けた。

まだ少女ゆえにこれからの成長に期待だが、晒された乳房がエロい。これは見事な眼福だった。

「イゝヤバダバドウッ!!」

「ごふっ!?!」

男が少女に気を取られた一瞬、その間にもう片方の少女の方の決着も付いた。

シールドバリアー、絶対防御、なにそれ？ 美味しいの？

アパチャイのパンチ。パンチパンチの連打。それだけだ、たったそれだけでISの防御が打ち破られた。

装甲は完全に破壊され、ISはもはや鉄屑と化している。ガラクタとなったものの流石はISといったところか、少女はかろうじて生きていた。目立った外傷は見当たらないが、びくびくと痙攣し、完全に気を失っている。

(圧倒的過ぎるだろう……)

男も達人だ。ISは確かに強力な兵器だが、扱う者が並みの者なら互角以上にやりあう自身はある。そう思っているが、だからと言って馬とアパチャイに勝てる気はまったくしなかった。

達人級としてのプライドがあるが、そのプライドと自信が粉々に碎け散っていく音を聴いた気がした。

「ふっ……」

「な、なんで……」

しぐれと女との決着も付いた。これまた一瞬であり、到底戦闘なんて呼べるものではない。

一回の交錯、たったの一太刀によって女は敗れた。本当はもっと刀

が振るわれたかもしれないが、男では一太刀にしか見えなかった。それほどまでにしぐれの剣速が早く、そして見事だった。

ISが両断される。細切れとなり、金属の破片が辺りに散らばった。それと同時に女のISスーツも細切れとなっており、布切れが宙を舞う。ISと衣服の切断。だと言うのに女には切り傷一つない。

ISと衣服のみを切断しただけであり、その上峰打ちを叩き込んだのだらう。しぐれの技量に男はただただ驚くばかり。

「は、ははっ……はははは」

もはや笑うしかなかった。女のことは気に入らなかったが、それでも実力は認めている。だからこそ冷静に状況を分析し、現状を理解する。

打つ手なし、お手上げ、詰み。こんな状況で任務を遂行できるわけがなく、だからと言って逃げることにすら叶わない。逃げたとしてもこの3人が相手ならすぐに捕まってしまう。

男の命は風前の灯。彼の運命は、しぐれ達が握っていた。

「さて、次はお前の番……だ」

しぐれが刀を男に向けて宣言する。その威圧感に思わず発狂してしまいそうだ。

男はランスを構え、ポツリと言う。

「まあ、なんだ。俺もなんだかんだで武人でね。背中晒して逃げるなんてことはしたくねえ。もっとも逃げたところで、あんたらから逃げ切ることではできねえだらうがな」

選んだ道は対峙。それがどれほど無謀なことかは理解している。だが、逃げることにすらできないと言うのなら、せめて華々しく散らう。

そう決意して、男はしぐれと向かい合った。

「良い覚悟……だ。いくぞ」

しぐれが動く。男にはしぐれの体がISに溶け込み、同化したように思えた。

ISも武器。武器とは空手家の拳、ムエタイ家の膝、己の体の一部であるもの。それを武器使いの端くれとして理解している男だったが、しぐれのそれは次元が違った。

（ああ……勝てるわけねえよ）

悟ると同時に、男の意識が闇へと沈んでいく。ランスは真つ二つに両断され、男の腹部に峰打ちが叩き込まれる。胃液をぶちまけ、男はその場に崩れ落ちた。

「ははは……流石しぐれさん達。スゲーや」

一夏も笑う。自分の今までの苦労はなんだっただろうと思い、改めて師との差を実感した。

「いや、あの……あれはそんな言葉で済まされるものですか？ というかISを、世界最強の兵器を……殿方が素手で……」

セシリアは目の前の光景が信じられない様子だった。それも当然だろう。ISを素手で倒すなど誰が信じるだろうか。

だが、そんな規格外の者が存在するのも事実。それが達人なのだ。

「梁山泊に常識は通用しないんだよ……」

「りょう……ざんぱく？」

「そう……とっても頼りになる俺の家族だ」

子供が親の自慢をするように、一夏は笑っていた。笑い、意識が薄れていくことに気づかないほどに安らかな表情を浮かべている。

「ちょっと、あなた！？　しっかりしなさい」

「血を失いすぎたね、これは。早いとこ輸血しないと大変なことになるね」

「アパ、アパチャイ一夏を病院に運ぶよ。それで万事休すよ」

「万事休すじゃ……まずい」

一夏の変貌に慌てふためく者達。武術の心得はあるものの、馬以外は医療に関する知識はなかった。

馬の行った止血針を刺すという行為も、所詮は応急処置。出血を抑えるだけであり、失った血は戻らない。

一夏は眠りに落ちるように目を閉じ、そのまま意識を失った。

十十十

「ここは……？」

目を覚ました時一夏がいたのは、知らない天井の部屋だった。もっともここはイギリスなので、どこでも知らない部屋なのだが。

天井と同様、真っ白な壁とシーツ。一夏はベッドに寝かされており、腕には点滴用のチューブが付いていた。おそらく、ここは病院なのだろう。

「目が覚めたかね？」

「秋雨……さん」

目覚めた一夏が最初に見た人物は秋雨。この病室には一夏の他に彼しかいなかった。病室特有の殺風景な景色と相成ってか少し寂しげな印象を受ける。

「外傷は右足だけだね。骨が断たれているから暫くは絶対安静。しぐれとの修行も暫くは休みだ。それと出血が酷かったが、それについては既に輸血を済ませてある。馬の止血がなければ出血多量で死んでいるところだったよ」

「はあ……そうなんですか。危なかったんですね」

「まったくだ」

死んでいたかもしれないと言うことに僅かな驚きを受けるが、それだけだった。いまいち実感がわかず、現実的に受け止めることができないからだ。

そんな一夏に、秋雨が呆れたように言う。

「さて、一夏君。君とはしっかりと話し合っておかねばならぬことがある」

「えっ？」

呆れてはいたが、秋雨の表情はいつになく真剣だった。ベットから起きられない状況だったが、思わず一夏の背筋が伸びる。

秋雨のその言葉に梁山泊の豪傑達、隼人、逆鬼、馬、しぐれ、アパチャイと全員が入ってきた。

皆堅苦しい表情で、中心にいる一夏を見つめている。

「織斑一夏」

その中を代表して、隼人が口を開いた。いつもはいつくんなどと茶目つ気たつぷりに一夏を呼ぶのに、今の言葉にそんな軽い感じは微塵もない。

畏まり、一夏のことをフルネームで呼んでいた。

「達人級を前に戦いを挑むとは何事じゃ！！ 愚か者め！！」

「っ……！？」

ここが病室だと言うことも構わずに叫び声を上げる。

隼人に怒鳴られ、一夏はいろんな意味で驚きを感じていた。こんなことは初めてだ。いつもは飄々とし、豪快だがなんだかんだで優しい隼人が怒鳴り声を上げ、一夏を叱っている。

隼人に初めて起こられた一夏は体をびくりと震わせ、呆然としながら続けられる言葉を聞いた。

「たまたま生き延びたから良いものの、命を失う可能性がほぼ確実じゃったことは普段、わしらと生活しておるお主ならわかっていたはずじゃ！！」

確かに一夏は達人級の恐ろしさを嫌と言うほど理解している。

だから当初はセシリアを連れ、その場から逃げようとしていた。だが、逃げられる状況ではなかった。男はセシリアを狙っており、一夏が逃げれば彼女は殺されていただろう。そんな状況だったと、一夏は言おうとした。

だけど、憤怒する隼人を前にしてそう言うことができなかった。

「確実に死ぬとわかっていて立ち向かうのは自殺と変わらぬ!!」

一夏、お主が死ぬことで悲しむ者が何人おると思う!？」

隼人の真剣な言葉が一夏を打つ。一夏は自分が、どれほどの心配をかけてしまったのか理解した。

もし、自分が死んだりしたら千冬が悲しむだろう。梁山泊の者達もだ。弾も涙くらいなら流してくれるかもしれない。鈴も泣いてくれるだろうか？

想像し、彼女なら悪態を吐きながらも泣きじゃくるだろうと結論付けた。鈴が泣く姿は、正直あまり見たくない。もう会えないかもしれない幼馴染のことを考え、胸が締め付けられるような痛みを感じた。

「そのことを考え、しかと反省せよ」

延々と説教を受け、最後にそう締めくくって隼人達が病室を出て行く。

一夏は一人部屋に取り残され、思考を巡らせた。

（確かに達人級に挑んだのは無謀だった……けど、逃げられる状況じゃなかったんだよねあ）

最初は逃げようとした。達人級相手に戦うのが無謀だなんて百も承知だからだ。

だが、足を負傷し、逃げられる状況ではなくなってしまった。

（セシリアを見捨てれば逃げられた？ 冗談、そんな選択死んでもごめんだ）

今日であつたばかりの赤の他人。それでも一夏にセシリアを見捨てるなんて選択肢は最初から存在しなかった。

自身の信念を貫き、死ぬのならそれも仕方ないと思っていた。

（でも、それだと……）

だが、もしそうなつてしまつたら隼人の言つとおり、何人もの人が悲しんだかもしれない。

一夏は知り合いに恵まれていることを実感し、怒られはしたものの梁山泊の優しさに感謝する。

（ああ、くそつ……わかんねえよ！）

それでもあの状況で、セシリアを見捨てることが正しかつたとは思えない。

頭を掻き耄り、一夏は唸っていた。そんな彼の病室に、再度人が訪れる。

「あの……失礼します」

「え、セシリア？」

「はい……」

部屋を訪れてきたのは、一夏が悩んでいる原因であるセシリア・オ

ルコットその人。

ベットの側まで歩み寄り、申し訳なさそうに一夏に問いかけた。

「……お怪我の方は大丈夫ですか？」

「あ、ああ……まあな。右足が動かせないのは辛いけど、もう痛みはないよ。治療が適切だったんだろうな」

「そうですの……」

セシリアは暗く、会話が弾まない。負い目のようなものを感じており、一夏のことを直視できないでいた。それでも何とか言葉を紡ごうと、必死に発する言葉を探した。

「あの、その……申し訳ありませんでした」

そしてでてきたのが、謝罪の言葉。

「結果的に巻き込んでしまう形になって……このセシリア・オルコット一生の不覚ですわ」

発端は身内の陰謀。セシリアはそれに無関係な一夏を巻き込んでしまったことを申し訳なく思っていた。

さらに一夏がいなければ、自分はある男によって殺されていただろう。一夏はセシリアにとって正真正銘の命の恩人だ。とても頭が上がない。

「いや、一生の不覚って大げさな……それにセシリアが悪いわけじゃないだろう？」

「ですが……」

「あゝもう、暗い話は勘弁してくれ。ただでさえ、長老に怒られてへこんでるんだ」

「それに関しても……申し訳ありませんでした」

その態度は一夏にとって気持ちの良いものではなかった。畏まられるのはどうも苦手だ。

この空気を一変するために隼人のことを引き合いに出す一夏だったが、一夏が怒られたのは自身が関係しているからだと余計に卑屈になってしまふセシリア。

一夏はボリボリと頭を掻き、深いため息を吐いた。

「あゝ、だから……な。セシリアがなにも気にする必要はないって。怪我したのだって俺が至らないからで……」

「……………」

「まあ、その、なんだ……俺はまだまだ未熟だけど、それでもさ、セシリアを守れてよかったよ」

「え……？」

「今の時代、確かに女尊男卑の世の中だけどさ、それとは関係ないって言うか、男が女を守るのは責務っていうか……要するに俺のくだらない意地の問題だけど、それでもセシリアを守れてよかったと思っっている。だから、自分を責めないでくれ」

確かに隼人の言ったとおり、一夏は愚かなことをしたかもしれない。

それでも、この選択が間違いだったとは思えない。

セシリアは助かった。その事実があれば、一夏は胸を張ることができる。だからいつまでもぐじぐじ、暗いままでいられるのは正直辛い。

「俺は……ん？」

「あ、うつ……」

「あれ、どうした？　なんか顔が赤いぞ」

一夏は言葉を切ったところで、セシリアの異変に気づく。彼女の顔は赤かった。

発熱でもしたかのように顔が赤くなり、わたわたと慌てふためいているように見える。落ち着きがなく、その様子が一夏を心配させる。

「な、なんでもありませんわ！」

「そ、そうか……」

「お、思ったより元気そうで安心しましたわ。その……お体に障るでしょうからわたくしはこれで失礼いたします！」

「あ、ああ……」

「ではっ！」

セシリアは顔が赤いまま、慌てながら病室を出て行った。

理由をまったく把握できていない一夏に対し、今度は病室の扉ではなく窓側から声がかかってくる。

「前々から思っていましたが一夏さんは女性の敵ですね」

「人聞きが悪い。なんなんだよ美羽。ってか、ここ何階だけ？」

「5階ですわ」

「そうか……」

窓側から入ってきたのは美羽だ。その登場に特に驚くこともなく、むしろ呆れて、一夏は聞き捨てならない台詞に突っ込みを入れる。

「鈴ちゃんも大変ですわ」

「そこで鈴が出て来る意味がわからないんだが……あいつ、今頃は中国に着いてるんだよな。ちゃんとやっていけるかな？」

「ええ、きっと大丈夫ですわ。なんたって鈴ちゃんですもの」

中国に帰った鈴のことを思い、一夏は考え深い気持ちになる。

よく考えてみれば鈴と別れて、まだ数日と経っていない。昨日日本を発ったので、実質一日ほどだ。それなのにもう何ヶ月も、何年も離れ離れになった気持ちにさせられる。

いつも顔を合わせていた幼馴染がいなくなるのが、こんなにも違和感を生み出させるとは思わなかった。

「はあ……酢豚食べたいなあ」

「うふふ、今度作って差し上げますわ」

「ありがとう、美羽」

美羽の気遣いに一夏は微笑みを浮かべる。それに対して美羽も笑みを浮かべ、思い出したように言った。

「そうそう、先ほどのおじい様のお話ですが、あんまり気にしない方がいいですよ!」

「へ……?」

「では」

「あ……」

それだけを言つて、美羽は病室を出て行く。窓から飛び降りる姿を見て、内心では扉を使えと突っ込みを入れる。

美羽の言ったことを理解できない一夏は、ベットに横になりながら天井の染みを数えることにした。

十十十

「ガハハハ!! しかし一夏の奴、よく頑張ったじゃねえか。命を懸けて立ち向かうたあてーしたもんだ」

「逆鬼どん、ここは病院ね。けど逆鬼どんが褒める気持ちもわかるね。いっちゃんはよくやったね」

病室の廊下、そこで愉快そうに笑う逆鬼。馬はそれを咎めるが、彼

の表情もまた緩んでいた。

「命を賭して人を守る。まさに梁山泊にふさわしい行動じゃー!」

「今夜は赤飯炊かな……きゃ」

一夏のことを怒鳴り飛ばした隼人も今では柔らかな笑みを浮かべ、褒め称えていた。

しぐれは無表情だったが、ほんの僅か、確かに笑っていた。

「おっと、そんなこと、彼の前では口が裂けても言っではいけませんよ。ここにいる誰もが通った道とはいえ、褒めたら彼の死期を早めかねない」

秋雨が釘を刺すように注意する。だが、彼も内心では一夏の行動を喜んでいるのだろう。

これまた僅かだが、口元がほころんでいた。

「うわっはっは！ 一夏は死なねーよ」

「そうよ、もしなんかあっても一夏はアパチャイが殺しても守るよ」

「殺しちゃ駄目だろう」

アパチャイまでも、みんながみんな笑っている。一夏の成長。それを自分のことのように心から喜んでいる。

だが、一夏のためを思っつか面と向かって褒めることができない。実力を過信することは大変危険だ。引き際を誤れば死ぬ危険性すらある。

だからここは心を鬼にし、一夏を叱ると言っのが梁山泊の者達の同

意だった。

「へへ……いつの間にか……たくましくなりやがって……」

「なんね逆鬼どん、感動して泣いてるね？」

「アパパパ！！」

彼らは一夏のことを小さなころから知っている。そんな彼の成長に喜ぶなど言っのが無理な話であり、思わずホロリと涙を流してしまうほどだ。

逆鬼の涙腺が緩み、馬も逆鬼のことを指摘しているが、その瞳からは一筋の嬉し涙が溢れていた。

「うむ、一夏君は確かに成長した。たくましくもなったね。これもしぐれの指導の賜物だろう」

「え……へん」

秋雨の言葉にしぐれは胸を張る。が、続いて告げられた彼の言葉には顔を顰めた。

「だが、少々武器に頼りすぎる傾向があるね。剣技ばかりで、素手での戦闘は随分おろそかだ」

「む……」

「ここはそうだね……一夏君を徹底的に鍛えてみないかい？」

秋雨が笑う。優しい、死神のような笑顔だった。

「それはいいね。剣で戦い、時には柔術、拳法を使う達人……育て甲斐がありそうね」

「さらにムエタイも加えれば最強よ！」

馬が便乗し、アパチャイも乗り気だ。秋雨はあごに手を当て、考えるしぐさを取った。

「そうか、君は弟子を取ったことなかったっけ」

「そうよ、何事も経験よ」

「しかしアパチャイは手加減を知らないからね。一歩間違えばいつちゃんが死ぬね」

「アパ、『テカゲン』って何よ。日本語むずかしいよ！」

「アパチャイにだけはやらせちゃいけない気がしたね……もつとも、潰れたら所詮はそこまでと諦めはつくけどね」

今までの気遣いはなんだったのかという会話が平然と交わされる。悪巧みをするように計画を企て、彼らはとても楽しそうだった。

「一夏はボクの弟子……だい」

「しぐれどん、嫉妬かね？ けど、いつちゃんのような才ある子を独り占めするのは少しずるいね」

「ふおっふおっふお、確かにいつくんは才能豊かじゃからな」

しぐれは嫉妬し、むくれているが、もしこれほどの達人達が一夏を鍛えたら凄いことになるだろう。

それを想像するだけで、本当に面白い。

「逆鬼どんも加わらんね？ いっちゃんの改造計画」

「けっ、俺は弟子は取らねえ主義だ」

「なら仕方ないね」

逆鬼はどうも素直になれないようだ。馬はあっさりとその言葉を受け入れ、これからの修行の計画を立てる。

「一夏はボクの弟子……なんだい」

「そうだね、一夏君はしぐれの弟子だ。それに加えて少々、私達が面倒を見るだけだよ」

「腕が鳴るね」

織斑一夏。彼には知らぬ間に茨の道が用意されていた。

## BATTLE5 入学

（なんでこうなった……）

暫しの時が流れ、一夏は現在高校生。今日がその入学式であり、新しい世界の幕開けだった。

それ自体は別にいい。むしろ喜ぶべきことなのだろう。だが、一夏は素直に喜ぶことができないでいた。

何故なら、このクラスに男は一夏一人。残り二十九名は全員女だったからだ。

（弾に馬さんは羨ましがってたけどさ、これってめちゃくちや辛い…… つか、何で俺の席がこんな特等席なんだよ？ いい注目の的じゃねえか）

一夏は冷や汗をたらだらと流し、緊張していた。自意識過剰や思いつき上がりではなく、本当にこのクラス全員の視線を感じていたからだ。その上一夏の席は真ん中の最前列。嫌でも目立つ場所であり、これが一夏の精神を蝕む原因のひとつでもあった。

（助けてくれ、箒……）

心の中で叫び、一夏は六年ぶりに会った幼馴染、篠ノ之箒に視線を向ける。が、彼女は救いを求めるような一夏の視線に対し、窓側に顔をそらすことで答えた。

（箒イイ！ あれっ、なんか怒ってない？ 感動の再開のはずだよな！？ 六年ぶりなのに……もしかして俺って嫌われてる？）

すごく憂鬱になってしまった。心が重たくなり、今にも挫けてしまいそうだ。

それでも救いを求めて、一夏は今度は後ろの方の席に視線を向ける。一夏が後ろを向いたことで女子達の注目をさらに集めてしまったが、その先に目当ての人物はいた。

セシリア・オルコット。イギリスに行った時、ある騒動で出会った少女だ。

一夏の下宿している道場、梁山泊は彼女を保護することとなり、ごたごたが終わるまで匿ったことがあった。

その期間は一月にも満たなかったが、その短い間共に過ごした少女。付き合いは浅くとも、友と呼んでも遜色ない間柄だ。

そんなわけで一夏はセシリアに助けを求めた。が、彼女は曖昧な笑顔を浮かべて手を振るだけ。頑張れと励ましてくれているようだが、それ以上はしてくれなかった。

いや、できないというのが正しいのか。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はい!？」

何故なら今は自己紹介中だ。入学式初日、クラスメイト達はほぼ全員が初顔合わせ。故に自己紹介。

そんな中席を立ったり、面と向かって声をかけたりすることなどできるわけではない。

副担任の呼びかけに驚き、一夏は裏返った声で返事をしてしまう。その様子にくすくすと女子達の笑い声が聞こえてきた。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな? ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だから

らね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

副担任の名は山田真耶。その山田先生がこちらの方が申し訳なくなるくらいにぺこぺこ頭を下げてきた。

身長はやや低めで、女生徒のそれとほとんど変わらない。服はサイズが合っていないのかだぼつとしており、眼鏡も大きめなためか少しずれている。

そのために見た目以上に小さく見え、生徒といわれても疑われないほどに幼い容姿をした女性だった。

若干頼りない印象を受けつつ、一夏は申し訳ない気持ちで返答した。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていつか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔を上げ、一夏の手を取り、熱心に詰め寄る山田先生。その行為でまたも注目を浴び、これ以上ない居心地の悪さを感じる一夏。

それでも何とか立ち直り、自己紹介しようと席を立つ。やはり何事も第一印象が大事だ。既に手遅れな気もするが……

(うつ……)

今まで以上に視線が集まるのを自覚する。一夏を見捨てた筈までもが横目で見ているのだから尚更だ。

別にながり症ではなく、特に女子に苦手意識なんてものは持っていないが、このように視線が集中したらたじろぐのも無理はない。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしく願いします」

ペコリと頭を下げ、完結に自己紹介を終える。だが、それだけではクラスメイト達は納得してくれそうになかった。

期待のこもった視線が一夏に向けられ、集中する。そこには無言の圧力があつた。

（いかん、マズイ。このままだと『暗い奴』のレッテルを貼られてしまう）

このまま黙っているのは良くないと判断した一夏は、一度深呼吸をし、思い切つて口を開いた。

「以上です」

がたたつ、と音を立て、思わずずっとこける女子数名。その中にセシリアもいたのが印象的だった。

「あ、あのー……」

背後からかけられる、山田先生の悲しそうな声。

一夏に悪いことをしたと言つ認識はないが、それを聴くとどうにも罪悪感が芽生えてしまう。

すると……

「いつ……！？」

パアンツ、と乾いた音が鳴り響き、一夏は自分の頭が叩かれたのだと理解する。

この叩き方、威力といい、角度といい、速度といい、一夏にとってとても身に覚えがある者の仕業だった。一夏はおそろおそろと振り返り、そこにいた者が予想通りの人物だと理解する。

「げえっ、アクア！」

「ヴェン……って、なにをやらせる……！」

もう一度叩かれそうになる。一夏の頭を叩いたのは彼女が持っていた出席簿だ。それが一夏の頭に直撃する寸前、一夏は両の手で挟んで受け止めた。これぞ真剣白羽取り。

「ほう、少しはやるようになったな」

「へへっ」

向かい合う2人。一夏の正面にいたのは実姉、織斑千冬だった。出席簿を受け止めた一夏に感心したそぶりを見せ、次にニヤリと獰猛そうな笑みを浮かべた。

「だが、甘い」

「えっ、ちょっと待って。それは……」

出席簿を持っていない、千冬の空いてる腕が一夏の頭部に伸びる。出席簿を抑えている一夏はその腕を払うことができないでいた。顔面がつかまれる。そのまま力が込められた。

「あたたたた！ ギブ、ギブアップ！ ちょ、タンマ。マジでタン

マァアー!!」

アイアンクロー。正式名称はブレーン・クロー。別名、束殺し。戯れる姉弟の姿に、周囲が引いているのがわかる。横目で見てみると、セシリアも引き攣った笑みを浮かべていた。

「お、織斑先生……もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田先生。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「……………」

山田先生の言葉に、千冬がやっと一夏を開放する。

自由になった一夏は力なく崩れ落ち、頭を痛そうに抑えていた。そんな彼には目もくれず、千冬はクラス全員に堂々と宣言した。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

そんな千冬の発言に対する、クラスメイト達の返答は黄色い声。

「キヤーーーーーー！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

きやいきやいと騒ぐ女子達。一夏は改めて千冬の人気の高さを知ったが、当の千冬はとても鬱陶しそうな表情をしていた。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

これには流石の一夏も引いた。このクラスにはMっ気のある変態が何人いるのだろつと本気で頭を抱える。

もつとも頭がいたいのは、先ほど千冬にやられたアイアンクローが原因だが。

「で？ 挨拶も満足に出来んのか、お前は」

やっと女子達は落ち着きを取り戻し、千冬が一夏に手厳しい言葉を投げかけた。

「いや、千冬姉、俺は……」

再び出席簿が振り下ろされる。一夏は同じ轍は踏まない。今度は避

けた。

「甘い！」

「なっ……」

一夏の避けた方向に、回り込むようにして出席簿が迫る。

この技を、この剣技を一夏は知っていた。あの宮本武蔵と並び称され、日本人なら誰もが知っている剣士、佐々木小次郎が得意とした必殺の剣技、燕返し。

避けることなど叶わず、一夏の顔面に出席簿が叩き込まれた。

「織斑先生と呼べ」

「ふあい……おりむりゃへんへい（織斑先生）」

鼻を押さえ、一夏は痛そうに言う。そのやり取りが原因で、どうにもばれたらしい。

「え……？ 織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ。世界で唯一の手ISが使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わって欲しいなあっ」

さて、今更だがどうして一夏がここ、『IS学園』にいるのか？ それは一夏が世界で唯一ISを使える男として認知されてしまったからだ。

あれはそう、今年の二月、受験シーズン真っ只中の時。その時はま

だ、IS学園に通うなんてことは決まっていなかった。

学費が安く、就職率も高い私立藍越学園を受けようと思っていた。あいえつ

なのに試験会場で迷ってしまい、何の因果かIS学園あいえすの試験場所に到着。そこでISを起動してしまい、世界で唯一ISを動かせる男としてここ、ISの操縦者育成を目的としたIS学園に入学させられてしまったのだ。

そのことを梁山泊の者達に話したら爆笑された。ドジの間抜けだの言われ、存分に馬鹿にされた。

そんなこんなで一夏は現在、ここにいるわけなのだが……まさか姉である千冬がIS学園で教師をしているとは知らなかった。

おそらく隼人辺りは知っていたのだろうが、もしそうだったら別に教えてくれてもいいのにと内心でばやく。

ショートホームルーム

「さあ。SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんだかんだで自己紹介も終わり、チャイムがSHRの終わりを告げる。

千冬の暴君のような発言に呆れつつ、一夏は小さなため息を吐いた。

十十十

「これは辛い……」

「大丈夫ですか？ 一夏さん」

「セシリアが普通に接してくれるのが唯一の救いだ……」

「まあ」

一、二時間目の授業が終わり、現在は休み時間。今日が入学式初日だと言うのに、IS学園では普通に授業が行われていた。

短縮とか、昼までなんて甘くはない。学内の案内などもなく、自分で地図を見ると投げやりな状況だった。その分みっちり授業が行われるので、一夏からすれば溜まったものではない。

「専門用語ばかりでさ、まったくわかんねーよ！ なにあれ、呪文！？」

「入学前に必読の参考書が届けられているのですが……まさかそれを捨てたとは思いませんでしたわ」

「はっはっは、酢豚こぼしてばっちくなっただから古い電話帳と間違えて捨てた」

「威張ることじゃありませんわよ」

セシリアの呆れた視線が一夏に突き刺さる。だがそんなもの、今の一夏からすれば些細なものだ。

なぜなら常に、一夏には熱烈な視線が向けられていたからだ。動物園のパンダなんかはこんな感じなのだろう。

世界で唯一ISを使える男と言うのが珍しく、このクラスの者だけではなく、他のクラスの者、二、三年生先輩などが詰め掛けている。そんな中、一夏曰くファースト幼馴染の筈が物凄い視線で睨んでいる気がするが、気のせいだと思いたかった。

「一夏さん、あの方に睨まれているようですが、何かしたんですか?」

「気のせいだと思ったのに……やっぱりあれか? 俺って簿に嫌われてるのか?」

思いたかったが、簿の視線に気づいたセシリアがそうはさせてくれなかった。

現実逃避すら許されない現状に、一夏は心身ともに参ってしまう。この状況を打破するためには、一刻も早く授業を再開して欲しかった。

そうすれば少なくとも、教室の外から視線を向ける他クラスの者、先輩方の視線から開放されるからだ。

そう思っていると、一夏の希望通りに休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「では一夏さん、また次の休み時間に」

「ああ」

セシリアは自分の席に戻り、廊下にいた者達も自分のクラスに戻っていく。

未だにクラス内の者からは視線を感じるもののだいぶマシになり、

一夏はやっと一息ついた。

「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目は山田先生が教壇に立っていたのだが、今は一夏の姉、千冬が教壇に立っていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス代表戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、千冬が思い出したように言う。だが、一夏にはそれが何のことなのかまったく理解できなかった。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間の変更がないからそのつもりで」

千冬の説明だとそういうことらしい。もともと、男と言うだけでこの学園に入れられ、知識に乏しい一夏にはまったく関係のないことだが。

そんな彼にクラス長が勤まるわけがない。クラス長になった者はたぶん、面倒な仕事を押し付けられるのだろうと他人事のように考えていると……

「はいっ。織斑君を推薦します！」

そんな意見が上がった。

（え、なに？ このクラスには織斑ってもう一人いるのか？ そいつは奇遇だな）

「私もそれが良いと思いますー」

（おう、俺も俺以外がなるのなら誰でも……）

「では、候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

（ほうほう、織斑一夏ってこのクラスにはもう一人……ってそんなわけあるか！）

一夏は勢いよく立ち上がる。自分で自分を指差し、素っ頓狂な声を上げた。

「お、俺！？」

向けられる視線の一斉射撃。あまりにも無責任な期待の込められた眼差しが一夏に集中し、一夏は慌てふためいた。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いらないなら無投票当選だぞ」

「ちょ、ちよつと待った！ 俺はそんなものやらな……」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「ぐっ……じゃ、じゃあ、俺はセシリアを推薦します！」

千冬は一夏に反論を許さなかった。ならば一夏は、セシリアを推薦してクラス長を押し付けることにした。

「流石一夏さん、よくわかってますわね」

得意げにセシリアが言う。こういったことは嫌いではなく、彼女も満更ではなさそうだった。

一夏はもう一押しすることにした。

「セシリアはイギリス代表候補生ですし、俺なんかよりよっぽど適任だと思います」

「ふむ、そうか。ならば多数決を取るとしよう。セシリア・オルコットが良いと思う者？」

「はいっ！」

千冬の言葉に一夏は、勢いよく手を上げて返事をする。だが、それだけだった。結果は一人。

「……………」

一夏とセシリアの表情が引き攣る。

「もはややるまでもないが、織斑一夏が良いと思う者？」

一斉に女子達の手が上がった。

「決定だな」

「なんでだよ!？」

「うるさい。静かにしろ」

「あがつ」

圧倒的多数。その結果に思わず絶叫を上げる一夏。  
そんな彼に千冬の出席簿が叩き込まれ、パンと乾いた音が教室内に響き渡った。

十十十

「まあ、前向きに考えよう。IS学園に入学して散々な目にあっただけど、良いこともあった」

放課後。クラス長を務める羽目になり、肩を落とす一夏。セシリアはシヨックだったのか落ち込んでおり、元気がなかった。

彼女はプライドが高いので、ああも極端に差をつけられてしまっただけは仕方がないだろう。

「それは梁山泊（修行）から開放されたことだ！ イエイエイ！ あそこは人権がないからな、マジで……」

それよりも今、一夏の気分は有頂天だった。IS学園は全寮制。それは男である一夏も例外ではない。

それは梁山泊の非人道的な修行から解放されることを意味しており、一夏の足が浮き足立っても仕方のないことだった。

一夏の正式な師はしぐれただ一人。が、面白そうという理由で秋雨に基礎体力作り、そして柔術を仕込まれている。馬には内攻を鍛えられ、時には中国拳法を仕込まれていた。

その修行方法が問題であり、しぐれには主に恐怖を植えつけられる。秋雨はさまざまなトレーニング機材からくりを作り出し、その実験台に一夏を使用する。馬は怪しげな漢方を一夏に飲ませたり。前に間違っ

て秘伝の精力剤を飲まれた時は大変な目に遭った。

逆鬼は弟子を取らない主義らしいので指導を受けたことはなく、それでも時折羨ましそうな視線で見られてことがある。アパチャイはムエタイを教えようと躍起になっていたが、一度一夏が死に掛け、それ以来しづれが一夏に教えるのを許可しなかった。

現在、アパチャイはてつかめんの練習中だとか。その前にまず、『手加減』と言う日本語を覚えて欲しいと思う。

なんにせよ、あのまま梁山泊にいればいつか命を失っていた。洒落や冗談ではなく、割と本気で。故にそれから開放される寮という存在は一夏にとつてとても魅力的だった。

当初は急な話で一夏の部屋はまだ決まっておらず、一週間ほどは梁山泊からの通いとなっていたはずだが、副担任の山田先生の話では事情が事情なので部屋割りを無理やり変更したのだとか。政府のお達しとのことだ。

いきなりのことだったが梁山泊から解放されることが嬉しく、深く考えずに部屋へと向かう一夏。その手には山田先生から受け取ったルームキーを握っている。

そんなお気楽思考の一夏に、背後から声かけられた。

「織斑」

「千ふ……織斑先生、なんですか？」

声をかけてきた人物は千冬だ。千冬姉と呼ぼうとし、再び出席簿が振り上げられたので慌てて呼び直す。

下ろされた出席簿を見て、一夏はほっと一息をついた。

「いや、なに。お前の荷物のことだ。着替えと携帯電話の充電器は私が用意してやったが、秋雨さんからお前宛に荷物が届いていてな。職員室に置いてあるから取りに来い」

「秋雨さんから……?」

話を聴き、嫌な予感しかしない。あの秋雨から、一体どんな荷物が届けられたというのだろうか?

「それから、お前がIS学園に在籍している間は私がお前の修行を監視することになった。これまた秋雨さんから修行メニューをもらっている」

「ええっ!?!」

「サボれると思ったか、愚か者め。それと休日には梁山泊に顔を出すようにとのことだ。良かったな、織斑」

梁山泊からは逃げられない。一夏にとって、秋雨は魔王のように思えた。

案外、的を射ているかもしれない……

「あ、荷物……って、千冬姉それだけしか持ってきてな……いたっ」

「織斑先生だ。ったく、いい加減慣れる。荷物はそれだけあれば十分だろう」

結局、出席簿はまたも振り下ろされてしまった。

頭を押さえる一夏は恨めしそうに千冬を見つつ、自分の言いたいことを言う。

「いやいや、男にはそれ以外にも必要なものがありまして……その、なんというか……」

「お前の部屋にあった工口本ならこの際に全部捨てたぞ」

「NOooooooooo!!」

一夏は魂からの叫びを上げる。血涙を流す勢いで、心の底から叫んだ。

「馬さんの影響か？ あの人の影響を受けると碌な大人にならないぞ。しかも中国人の貧乳ものとは趣味が悪い」

「俺の勝手だよな？ ってか見たの、見たんだな千冬姉え!?!」

「弟のことを把握するのは姉の責務だ」

「そんなことは把握しないでもいいから、マジで……」

場所も構わず、一夏は床に四つんばいになって落ち込む。馬經由で集めたお宝、それを処分されて相当ショックだったのだろう。

「じゃあ写真は!?! 俺の部屋にあった中学の時の写真!」

それと同じくらい、いや、それ以上に大切なものを思い出して一夏は叫ぶ。

梁山泊の一夏の部屋に飾ってあった大切な写真のことだ。

「ああ、あれか？ あれも捨てた」

「千冬姉ええ!!」

その言葉に流石の一夏も激怒する。姉ということすら関係なく、胸倉をつかみかからんほどの勢いだ。

「まあ、それは流石に冗談だな」

もつともそれは冗談であり、千冬はあっさりとその写真を取り出した。

写真立てに入れられ、大事に保管されていた一枚の写真。それを目の前に差し出され、一夏は落ち着きを取り戻す。

「心臓に悪いよ……」

「すまん、ちょっとからかい過ぎた」

冗談だったが、そんなことを言う千冬も珍しい。写真を受け取った一夏は大事にそれを仕舞った。

「ここでは先生だが、やはり姉としては焼けるものだ。そんなにその写真に写っている幼馴染が大事か？」

「関係ないじゃん……」

「まあ、それはそうだな」

千冬は小さく笑い、意地の悪そうな表情で一夏を見ていた。

「ただ、条件がある。お前の嫁になる者は私を倒すことが条件だ」

「ちょ、それなんて無理ゲーなんだよ！ 俺の嫁になる奴大変だな……」

「そうだな。さて、私は会議があるのでこれで失礼する。荷物はちゃんと取りに來い」

「あ、ああ……」

一夏の突っ込みをさらりと受け流し、千冬は会議へと向かう。取り残された一夏は、荷物を受け取るために職員室へと向かった。

「こ、これは……」

そして現在、その荷物を持って今度こそ部屋へと向かう。だが、その前に、届いた荷物についていろいろと突っ込みたかった。

「秋雨さんどんな感性してんだよ……まさかIS学園で『これ』を見る破目になるとは思わなかったぞ。ってか、これを部屋に運ぶって……夜に動き出しそうで怖いな」

秋雨から届けられ、一夏が運んでいる荷物。それは『投げられ地蔵グレート』。

両手を突き出し、胴着を着たお地蔵さんであり、投げ技の練習、筋トレに大いに役立つ万能の地蔵だった。

だが、それを運ぶ一夏の姿は異質だった。寮内で地蔵を運ぶ姿はシユールなんてものではなく、ドン引きするレベルのものだ。

秋雨はこの投げられ地蔵を用いて修行しろとのことらしいが、正直あまりこれを使う気にはなれない。なんというか恥ずかしい。

捨てたり、置き去りにしたい気持ちは山々だったが、もしそんなことをすればどんな制裁を受けるのかわかったものじゃない。一夏は

いろいろと諦め、投げられ地蔵を部屋へと運ぶことにした。

「ここが俺の部屋か……」

やっと着いたのが1025室と書かれた部屋の前。

部屋番号を確認した一夏はキーを差し込むが、最初から開いてることに気がついた。

「無用心な……」

部屋に入り、内装を眺める。まず目に入ったのが大きめのベッド二つ。

高級そうな家具がそろっており、下手なホテルなんかより上だった。流石はIS学園といったところか。

「うおっ、柔らけえ」

荷物を置き、投げられ地蔵を立て、千冬から受け取った写真立てを机の上に置いた一夏はベッドにダイブする。

ふわふわ、もふもふした最高級の肌触り。これはきつと高価な羽毛布団なのだろう。

「誰がいるのか？」

その柔らかさを堪能していると、突然奥の方から声が聞こえてきた。シャワー室の方からだ。

全室にシャワーがあるとのことだったので、後から使おうと思っていた矢先のことだ。

「ん？」

そして、一夏は異変に気づく。既に人がいる？　もしかして同室？  
となると、ここはIS学園だ。すると生徒は女子しかないわけで

……

「ああ、同室になった者が。これから一年よろしく頼むぞ」

一夏の予想は当たった。シャワー室から出てきたのは、一人の女子。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之……」

「箒……？」

「い、い、いちか……？」

その人物はファースト幼馴染の箒。シャワーを浴びていたために肌  
と髪が濡れており、バスタオル一枚で姿を現す。

止まる時間。無音の世界。一夏のIS学園初日は、波乱の幕開けだ  
った。

## BATTLE 6 ファースト幼馴染

六年ぶりに再会し、こうやって面と向かい合った幼馴染。だが、タ  
イミングがあまりにも悪かった。

誰がシャワーを浴びていたと思うだろうか？ いや、そもそも、い  
くら幼馴染とはいえ女子と同室なんて思いもしなかった。一夏は呆  
け、ベットに座ったまま固まっていた。

箒は壁に立てかけてあった木刀を手に取り、一夏に殴りかかってく  
る。基本的に忠実な鋭い一撃だ。

「どわあっ!？」

呆然とした状態から復活した一夏が、悲鳴染みた声を上げると同時  
に木刀を受け止める。千冬の出席簿をも受け止めた真剣白羽取りだ。  
ギリギリと鬨ぎ合い、息がかかるくらいに近い距離で向かい合う一  
夏と箒。

箒は羞恥と怒りに染まった真っ赤な表情で、一夏に問いかけてきた。

「なぜ、お前がここにいる!！」

「いや、俺もこの部屋なんだけど……」

「はあ!？」

一夏の返答に箒が意味がわからないという顔をした。一夏もまったく  
同じ心境だった。

「お前が、私の同居人だというのはのか？」

「お、おう。そうらしいぞ」

「ど、どういっつもりだ」

「へ？」

「どういっつもりだと聞いているっ！ 男七歳にして同衾せず！常識だ！」

一夏はいつの時代の常識だと思った。だが、確かに15歳の男女が同じ部屋で生活するのは問題があると思う。

美羽や一時的に一緒に暮らしていたセシリアとは事情が違う。梁山泊という道場で暮らしており、そもそも部屋が違っていた。

「お、お、お……」

「お？」

箒が意味を成さない言葉を発し、木刀を握る力が緩んだ気がした。そのことにほっとし、一夏も若干だが力を抜く。

「お前から、希望したのか……？ 私の部屋にしろと……」

「そんな馬鹿な」

が、次の瞬間には一気に箒の力が増した。先ほどよりも強い力。一夏は思わず木刀を手放してしまいそうになった。どうにも返答を間違ってしまったらしい。

「お、落ち着け、箒！」

「馬鹿……馬鹿だと？　そうかそうか……」

怖かった。どれくらいかというところ、初めてしぐれに指導を受けた時くらい怖かった。

鬼神のごとく激昂した箒。だが、それよりも一夏は先ほどから気になっていたことを口にした。

「あの、箒さん……」

「……なんだ？」

「いや、そろそろ服を着ていただけるとありがたいんですが……」

「っ！？」

箒はバスタオル一枚のままだった。その姿は男として目のやりどころに困る。

箒の体は最後に見た小学校4年生のころとは大違いで、凶悪なまでに育った二つの果実。それが激しい動きをしたためにぶるんぶるんと揺れていた。

「み、見るな！」

「は、はいっ」

やつのことで木刀は手放され、一夏は慌てて後ろを向く。

箒はその間に急いで着替えをした。布の擦れる音が聴こえる。かすかな音だが、一夏の鍛えられた感覚、聴力は嫌でもその音を拾ってしまう。

「もう、いいぞ……」

「お、おう」

着替えが終わり、箒が声をかけた。一夏が振り向くと、そこには剣道着を身にまとった箒がいた。傍にあり、すぐに着られる服がこれだったのだろう。大急ぎで着たためか帯の締め方が甘かった。

「わ、悪かったな、箒」

「いや、こちらも少し感情的になりすぎた。すまない、一夏」

まずは互い非を認め謝罪をする。着替えというワンアクションを挟み、冷静になったのだろう。

冷えた頭で言葉を交えた後、箒から話題を振ってきた。

「本当に久しぶりだな、一夏」

「ああ、六年ぶりだよな。教室で話しかけたかったんだけど、状況が状況だったし」

「災難だったな……ところで一夏、ひとついいか？」

「ああ、なんだ？」

箒は一夏の私物を指差し、引き攣らせた表情で問いかける。

「アレは……なんだ？」

「ああ、アレか？」

「ああ、アレだ」

箒が指差しているのは投げられ地蔵。部屋にあんな異物が運び込まれれば不審に思うのも当然だろう。

その辺りのことは一夏も十分に承知しており、頬を掻きながら困ったように言う。

「投げられ地蔵グレートだ」

「な、投げられ地蔵ぐれーとお？」

「まあ、なんだ。トレーニング器具なのかな？ 投げ技の練習、筋トレなんかには便利な秋雨さんの自信作だ」

「秋雨とは誰だ。いや、待て。その前に投げ技って……一夏、お前剣道はどうした？」

「えっ、いや、剣道ならだいたいぶ前にやめたけど」

「やめただと！？」

激昂したように箒が怒鳴る。思わず怯んでしまう一夏だったが、何とか取り繕って箒を宥める。

「だから落ち着けって。剣道はやめたけど、その後は剣術をやったんだよ」

「剣術？」

「ああ、香坂流って剣術をな」

「『こうさか』流……聞かないな。で、まさかそのこうさか流という剣術には投げ技があるというのか？」

「いや、投げ技に関しては柔術だ」

「柔術？」

「ああ、他にも拳法を少々……」

「つまりお前は、そんな軟弱な気持ちで、片手間で武術をやっている？」

宥めたはずが箒の怒気が増した気がした。だが、片手間といわれたことに一夏も少なからず怒りを感じる。

「片手間？ とんでもない！ そんな覚悟であんなことできるか」

「い、一夏？」

「俺は、最初は剣術だけのつもりだった。いや、その剣術も最初は無理やりやらされたんだけどそれは別にいい、もう諦めた。なら剣術を極めようと思ったわけだが、どういうわけかある日突然、柔術と拳法を叩き込まれる羽目になったんだ。箒、お前は死に掛けたことがあるか？ 走馬灯を見たことはあるか？ 俺はあるぞ。何度も死に掛けたし、何度も走馬灯を見た。や、やめっ……しぐれさん、真剣での練習は洒落にならな……秋雨さん、なんですかそのからく

りは！？ 馬さん、それなに？ その怪しげな薬はなにイイ！！  
あ、アパ、アパチャイ！？ いや、俺はムエタイはやらな……ひい  
ひいひいひいひいっ！！」

一夏は自分の主張をするが、それが後半になると体を震わせ、青白い表情で悲鳴を上げていた。  
幼馴染の豹変に箒は動揺した。彼女は触れてしまったのだ、一夏のトラウマに。

「死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない  
い」

「い、一夏、私が悪かった。大丈夫、大丈夫だから落ち着け。なあ」

「はっ……俺は一体なにを？」

「覚えていないのか？ いや、それならいい。なにがあつたのかは  
わからないが、辛いことなら忘れてしまえ」

正氣に戻った一夏に、箒は哀れみの視線を向けた。六年会わなかつた幼馴染に一体なにが起こつたのだろう？

気にはなるが、それはあえて聞かない。その方が一夏のためな気がしたからだ。

「あ、そうそう、六年ぶりだって話だったよな。久しぶりだけど、  
箒ってすぐわかつたぞ」

先ほどまでの会話をなかつたことにし、一夏が口を開く。

「え……」

「ほら、髪型一緒だし」

自分の頭を指差して一夏が言つと、箒は恥ずかしそうに自身のポニテールにした髪をいじりだした。

「よ、よくも覚えているものだな……」

「いや、忘れないだろ。幼馴染のことくらい」

「……………」

ギロリと睨まれる。その理由が一夏にはわからない。

まさか、自分は本当に箒に嫌われているのではないかと自己嫌悪に陥りつつ、何か話題を不老と必死に思考を巡らせた。

「そういえば、去年、剣道の全国大会で優勝したんだってな。おめでとつ」

当たり障りのない話題を、箒を褒める言葉を選ぶ。  
だが、当の箒は何故か微妙そうな顔をしていた。

「なんでそんなことを知ってるんだ？」

「なんでって、新聞で見だし」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

新聞くらい誰でも読むだろうと一夏は思う。あまりにも理不尽、そして意味不明な言葉。

これには箒も思つところがあつたのか、顔を赤くし、罰が悪そうに言った。

「す、すまない。今のは忘れてくれ……」

「あ、ああ……」

「……………」

「……………」

暫しの間、沈黙が流れる。一夏はそれに耐えられず、キョロキョロと視線をさ迷わせた。

窓の外、壁、天井、机といった順。机の上には先ほど置いた写真立てが置いてあり、無意識のうちにその写真を眺めていた。

「一夏。その写真は……」

「ん？」

すると、沈黙を破つて箒が口を開いた。一夏が眺めていたもの、写真を見て不安そうな声で問いかけてくる。

その意図がまったく理解できていない一夏は、平然と箒の問いに答えた。

「ああ、これか？ 中学の時の写真だ」

その写真に写っていた一夏は、地元の中学校の制服を着ていた。

「いや、それはわかるが……私が言いたいのはその隣に写っている

女についてだ」

「ん、ああ、鈴のことが」

「りん？」

その隣には、これまた中学校の制服に身を通した少女が写っている。ツインテールがトレードマークのとても可愛らしい少女だった。そんな少女がツーショットで一夏と共に写っている。箒が興味を抱いたのはそのことについてだ。

「ああ、箒が引っ越していったのが小四の終わりだったたる？ そのあと、小五の頭に転校してきて仲良くなったんだ。つまり幼馴染だな。箒がファーストで、鈴がサード幼馴染」

「ファースト、サード……？ 待て、セカンドはどうした？ 間が抜けてるぞ」

「セカンド幼馴染は美羽。俺がお世話になってる道場主のお孫さんだ。歳も近いし、機会があれば紹介するよ」

「みう……女か、また女なのか！？」

「美羽って名前が男のものに思えるのか？」

「そういうことを言ってるんじゃない！ 一夏はまったく……」

一夏には、箒がなにを怒っているのかまったく理解できていない。何故、機嫌が悪そうなのか、ぶつぶつぶやいているのかわからない。

不服そうな顔で、箒は思い出したように言う。

「そういえば、教室でも親しそうに話していた女子がいたな。あれは誰だ？」

「セシリアのことか？ 自己紹介を聞いていなかったのか？」

「そういうことじゃない！」

「なんなんだよ……セシリアは一年前くらいに前に、イギリスに行った時に知り合った。その後なんだかんだあって、一月ほど一緒に暮らした」

「一緒に暮らしたあ！？ 一夏、そこに直れ！ その腐りきった根性、私が叩き直してやる！！」

「なんでだよ！？」

正直に答えたのに、あまりにも理不尽な仕打ち。あくまで一夏の主観だったが。

箒は再び木刀を手に持ち、一夏に襲い掛かった。一夏も負けじと、再び真剣白羽取りを決める。

入学初日の夜は、このように騒がしく更けていった。

＋＋＋

「ふんっ」

まだほとんどの者が眠っている夜明け前、早朝の四時。一夏は日課となった修行、トレーニングを始める。

短い呼吸。それと共に振り回される投げられ地蔵。使用する地蔵は三体。

一体の頭の上に片足立ちで立ち、バランス感覚を鍛える。その状態で左右の手には一体ずつの投げられ地蔵が握られており、それを振り回すことによって腕力を鍛えていた。

等身大の地蔵を片手で持ち上げる。一夏の筋力は常人のそれを遥かに凌駕するほどまでに鍛え上げられ、尚も進化を遂げていた。

「朝から精が出るな」

「千冬姉！」

「織斑先生だ。だが、まだ早朝で二人つきりだからそれでもいいだろう」

そんな一夏の元に、千冬が顔を出す。ジャージを身にまとい、肩には二本の木刀が担がれていた。

「本当に遅しくなったな、一夏。まさかそれを振り回せるようになるとは思わなかったぞ」

「鍛えているからな。これくらい当然だ」

一夏は一旦投げられ地蔵を地面に置き、一体の頭の上から飛び降りる。

千冬と向かい合い、はにかんだ表情で笑った。

「で、それを持ってるって事は久しぶりにやるのか？」

「ああ、弟の成長を直に体験しようと思ってな」

千冬も不適に笑う。一夏は千冬から木刀を受け取り、互いに構えを取って向かい合った。

「千冬姉と手合わせなんて久しぶりだな。ほとんどしぐれさんとはっかかりだったし」

「ふつ、本気で来いよ。しぐれさんほどではないとはいえ、私も達人級だ」

「ああ、いわれなくったって！」

宣言すると共に一夏の姿が消える。否、消えたとは思えない速度で動いたのだ。

一瞬で千冬の背後、死角に回り込み最速で刺突を放つ。常人なら成す術がなく、一撃で絶命するほどの威力だった。もつとも、相手が常人ならの話だが。

「ほう、縮地か。見事だ。だが、まだ無駄な動きが多いぞ」

一夏は背後を取り、死角から刺突を放った。だが、千冬は反応して見せ、一夏の刺突を木刀で弾く。

刺突が失敗したと理解すると同時に、一夏は背後に後退した。すると今まで一夏がいた場所に千冬の斬撃が走る。

一、二、三の連続攻撃。一瞬のうちに三太刀も木刀が振るわれた。

「危ねえ……死ぬかと思った」

「よく避けたな」

冷や汗を流す一夏と、純粹に弟の成長を喜ぶ千冬。  
今のは決まったと思っただが、一夏は見事に回避して見せた。その動きに惜しみのない賞賛を送る。

「やっぱり強いな、千冬姉は」

「当然だ。まだまだお前に遅れを取るわけには行かないからな」

会話を交わしつつ、互いに接近する。ぶつかり合う木刀と木刀。そのまま打ち合いを始め、木々がぶつかり合う音が周囲に響く。

「それにしてもここで教師をしてるなんて知らなかったぜ。なんで教えてくれなかったんだよ？」

「言う必要がなかったからな」

「なんだよそれ……あ、そういえば千冬姉は昨日はどうしたんだ？」

「私は一年の寮長をしているからな。寮長室に泊まりだ」

「なるほど、それでなかなか帰ってこなかったのか」

打ち合い、受け止め、時には流し、避ける。一瞬のうちに行われる数々の攻防。

激しい戦闘が行われているはずなのに互いの表情は緩みきっている。まるで姉弟が戯れている様子、そのままの光景だった。

「本当に強くなったな、一夏」

「千冬姉に言われると照れるな……」

「だが、そろそろ終わりにしよう」

その光景も終わりを迎える。千冬が後退し、距離を取った。一夏はすかさず距離を詰めようとした。だが、できない。一夏は近づかず、千冬と同じように距離を取った。

理由は特にない。ただ、接近したらまずいと思ったからだ。背筋が震える。全身の感覚が警告音を鳴らす。

見える、理解できる。千冬の制空圏。そしてその巨大さ。

武術の第二段階の『緊湊』に到達した者は、自身を中心とする全方位に『制空圏』と呼ばれる球状の空間を展開し、その領域を侵犯した敵に対して条件反射で迎撃行動を取ることが可能となる。

有効範囲は体得者の実力によって個人差があるが、真後ろなどの死角からの攻撃や、複数の敵による多角的な攻撃にも半ば自動的に応じ、回避、反撃することができる。いわば自分の領域、武力による結界だ。

一夏もそれは可能ではあるが、千冬とはその練度が違う。こちらは射程外なのに対し、一夏が現在千冬の領域、制空圏内にいる。このままではまずいと判断し、領域からの脱出を図った。が、それが成功することはなく、千冬の手によって一夏の意識は闇へと沈んだ。

十十十

「第、これうまいな」

「……………」

千冬に伸された一夏は目を覚ますと、ずいぶんと時間が経っているのに気づいた。修行を切り上げ、朝の準備を終えてから朝食を取ることにする。

時間は八時。寮だから校舎とは五十メートルも離れていないが、少し急がないとやばい時間だった。

同じ部屋のよしみでとやらで箒が隣にいるわけだが、どうにも彼女は昨夜から機嫌が悪い。やはり、昨日のやり取りが多かれ少なかれ関係しているのだろう。

「箒、まだ怒っているのか？」

「怒っていない」

「けどさ……」

「だから、怒っていないと言っている」

箒はそういうが、それを言葉のとおりを受け止めることはできない。明らかに怒っているような反応だった。

怒っている人物の怒っていないという言葉ほど信用できないものはない。

「ねえねえ、彼が噂の男子だって」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」

「えー、姉弟揃ってIS操縦者かあ。やっぱり彼も強いのかな？」

それはそうと、今日も相変わらずだった。周りでは女子達が一定の

距離を取り、好奇の視線を向けてくる。

動物園のパンダにでもなった気持ちで、そんなに男が珍しいのかと一夏が考えていると、唐突に声かけられた。

「お、織斑君。隣いいかなっ？」

「へ？」

見ると、朝食のトレーを持った女子が三名、一夏の反応を待ちわびるように立っていた。

「ああ、別にいいけど」

それに対し、一夏はあっさりと頷く。その様子を見ていた周囲からは妙なざわめきが上がった。

「ああ〜っ。私も早く声かけておけばよかった……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

もつとも、そんなことは一夏には直接関係ないが。今は目の前の朝食を片付けることに集中する。

「うわ、織斑君って朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「ん、まあ、これくらい食べないと体が持たないんだよ。体を結構動かすしさ」

食事は体の資本であり、特に朝食は大事だ。梁山泊の修行は厳しく、故に食事をしっかり取らないと体が持たない。

アパチャイほどではないにしろ、一夏はよく食べる方だった。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

三人組の女子は、それぞれトレーのメニューこそ違うが、飲み物一杯にパン一枚、おかずが一皿と明らかに少なめだった。

一緒に暮らしていた美羽はしっかりと食事を取っていたため、それが一夏には信じられない。

「わ、私達は、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

「お菓子よく食べるしー」

のほほんとした雰囲気少女に一夏は眉をひそめる。間食はあまり体によくない。

梁山泊では栄養管理もしっかりとなされていたために一夏はそういったことに過敏だった。

「……一夏、私は先に行くぞ」

「ん？ ああ、また後でな」

そんなことを考えていると、食事を終えた簾はさっさと行ってしまった。

そういえば、セシリアはどうしたのだろうと思う。もう食事を済ませたのだろうか？ 食堂では姿を見かけない。

「織斑君って篠ノ之さんと仲がいいの？」

「ああ、まあ、幼馴染だし」

「え！？」

第とのやり取りを見て疑問に思ったのか、三人組の一人が一夏に問いかける。

それに正直に答えたわけだが、驚かれ、周囲には動揺が走った。

「それと同じ部屋だな。同室だと知ったときは戸惑ったけど、全然知らない子となるよりはよかったよ」

さらにざわめく周囲。今度は別の三人組の一人が、一夏に質問を投げかけようとしたところで……

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグランド十週させるぞ！」

寮長である千冬の声が響いた。そのとたん、食堂にいた全員が慌てて食べ始める。一夏も残りをかき込んだ。

確か、IS学園のグランドは一周五キロはあつたはずだ。それを十週、つまりは五十キロ。遅刻してフルマラソンを越える距離を走らされてはたまったものじゃない。

（なんだ、遅刻してもたつた十週でいいのか）

もつとも、梁山泊で厳しい修行を受けた一夏にとってそんなものはどうってことなかった。だが、自ら進んで罰を受けたいと言っわけ

ではない。

食事を終え、授業を受けるべく教室へと向かった。

## BATTLE 7 篠ノ之

「……ギブアップ」

「だ、大丈夫ですか。一夏さん」

入学二日目の休み時間。ISに関する知識が絶対的に不足している一夏は、授業後に机に突っ伏していた。それを心配し、声をかけてくるセシリア。

「大丈夫なのか俺？　こんなんで本当に大丈夫なのか？　クラス代表にもなっちまったし……セシリア、今からでも代わってくれ！」

慣れないことで心身ともに参っており、その上クラス代表という立場まで背負わされてしまった。

不安でいっぱいな一夏はがばっと起き上がり、セシリアの手を取って懇願するように言う。

「い、一夏さん！？　か、顔が近い、近いです！　そ、その……代われると言ったのでしたらわたくしも代わって差し上げたいのですが、織斑先生がそれをお許しになられるかどうか……」

「そうなんだよなあ……千冬姉がなあ……」

セシリアが顔を赤らめていたが、一夏にはその理由がわからず、あつさりとスルーする。

手を離し、肩を落として深いため息をついた。最強無敵の姉、千冬。一夏にとって、彼女はいろんな意味で鬼門だった。

「ねえねえ、織斑君さあ！」

「はいはい、質問しつもん！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

一夏が思考にふけっていると、いつの間にか周囲にはクラスの半数を超える女子が集まっていた。

一日が経ったが、やはりそれでも男という存在が珍しいのだろう。昨日のどこか牽制し合う動きがなくなっていたことに、一夏は気づいていなかった。

「いや、一度に聞かれても……」

「そうですね。一夏さんが困ってらっしゃるでしょう」

一斉に來た質問に戸惑っていると、セシリアが助け舟を出してくれた。

「もう、セシリアだけ抜け駆けするって」

「なっ、別にわたくしにそんなつもりは……」

「ねえねえ、随分仲が良さそうなんだけどさ、ひょっとして二人って付き合ってるの？」

「っ、付き合って！？ い、いえ、そういうわけでは……」

だが、新たに向けられた質問に顔を紅くし、おろおろと狼狽していた。ハッキリ言って使い物にならない。

「そうだぜ、そんなわけねえじゃん。俺とセシリアは付き合っちゃいないよ」

あつさりと否定をする一夏。その隣では何故かセシリアが恨めしい表情で睨んでいたが、その原因を特定することが出来ない。わけがわからずに、一夏は首をかしげていた。

「ねえねえ、織斑君ってば」

その間も質問攻めは終わらない。次々に飛び交ってくる一夏への質問。

十五分の休み時間はそれだけで終わろうとしていた。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの!？」

一際興味深く、見れば質問してきた当人以外もうんうんと頷いて一夏に詰め寄ってきた質問。

やはり、憧れの人物の私生活というものは気になるのだろう。

「え。案外だらしな……」

正直に答えようとした一夏。その直後、パァンと乾いた音が教室中に響いた。

「う、うおおおっ……」

頭を抑えて悶絶する一夏。彼が気配を感じ取ることが出来ずに接近を許し、頭部を出席簿で殴打した人物。

言うまでもなく実姉、織斑千冬その人である。

「休み時間は終わりだ。散れ」

個人情報漏らされそうになったからか、千冬の機嫌はかなり悪そうだった。

日本最強、いや、世界最強である千冬お姉様とやらが、自宅ではどれほどらしい生活を送っているのかこのクラスの女子達は想像も出来ないだろう。

部屋を片付けられない、料理が出来ない。ISの才能はあっても家事の才能は皆無。そのために一夏は家事が得意となり、梁山泊では美羽と共に家事を担当していた。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

またも思考にふけっていると、授業の準備をしていた千冬が思い出したように言ってきた。

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう  
だ」

「マジで!？」

その言葉に一夏は驚愕する。教室中からもざわめきの声上がり、さまざまな意見が飛び交う。

「せ、専用機!？ 一年のこの次期に!？」

「つまりそれって、政府からの支援が出てるって事で……」

「ああ。いいなあ……私も早く専用機欲しいなあ」

専用機というのは、いわゆるエリートの証。

ISの心臓部、コアを作れるのは篠ノ之博士だけ。けど、その博士は現在コアの開発をしておらず、ISは全世界でたった467機しか存在しない。

そのために国家、企業、組織、機関では、それぞれに割り振られたコアを使用して研究、開発、訓練を行っている。

それとコアの取引は、アラスカ条約第七項によって全ての状況下で禁止されているようだ。

「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家、あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった」

「なるほど……」

つまり実験体ということだ。だが、専用機という話は素直に嬉しい。一夏の知り合いで専用機を所持しているのはイギリスの代表候補であるセシリアと、師であるしぐれの二人だ。ちなみに篠ノ之博士という人物だが……

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

女子の一人がおずおずと挙手し、質問をした。篠ノ之という苗字がそうそうあるはずもなく、いつかはばれることだろうと一夏は思う。篠ノ之博士こと篠ノ之束。ISをたった一人で作成、完成させた稀

代の天才。千冬の同級生で、箒の実姉だ。

ちなみに一夏の初恋の相手でもある。現在は、軽く自己嫌悪に陥ってしまいそうなくらい後悔しているが、子供のころの自分はなにを考えていたんだろうと本気で後悔したものだ。

それでも束が美人で、可愛い女性だということは否定しない。顔だけはいいのだ、顔だけは。性格も子供のころの一夏とは馬があったのだろう。だから好きになった。

もつとも、気の迷いと言ってしまうえばそれまでだが……

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

いつかはばれることだろうと思った。だが、あまりにもあっさりと個人情報をばらす千冬。先ほど叩いたのはなんだったのかと問い詰めたいほどだ。

束は全世界が行方を探っている超重要人物だ。消息を絶ち、両親とも連絡を取っていないらしい。

もつとも、束は千冬と箒のことをとても大事にしていたので、この二人とはなんらかの方法で連絡を取っているかもしれないが。

「ええええーっ！ す、凄い！ このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱ天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりするの！？ 今度ISの操縦教えてよっ」

クラスは盛り上がり、授業中だというのに箒の元にわらわらと人が集まっていた。

そんな中、箒の声が響く。

「あの人は関係ない！」

冷たく、拒絶するような大声。

クラスメイト達は冷水を浴びせられたように静かになり、困惑した様子で箒を見ていた。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことはなにもない」

そう言つて、箒は窓の外に顔を向けてしまった。それ以来口を開くことは市内。

束は箒のことを大事にしているようだったが、箒本人は姉のことをあまり快く思つてはいないらしい。

そのことが、一夏はどうしても気になった。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

クラス内の困惑を千冬が締め、授業が開始される。

山田先生も戸惑いを見せ、箒のことが気になっている様子だったが、そこはプロの教師。すぐに気を取り直し、ちゃんと授業を進めていた。

（後で箒に話を聞いてみるか……）

そう決意して、一夏は教科書を開いた。

――

「箒、飯食いに行こうぜ」

「勝手に行け」

いきなりだが心が折れそうだった。昼休み。一夏は箒を誘って学食に行こうとした。それを拒否する箒。明らかに機嫌が悪そうだ。

「他に誰か一緒に行かない？」

「おい、一夏」

が、その程度では一夏も引き下らない。

先ほどの一件でクラスでは妙に箒が浮いており、それをフォローするためにクラスメイトを何人が誘ってみる。

「わたくしも参りますわ」

「はいはいはいっ！」

「行くよー。ちょっと待ってー」

「お弁当作ってきてるけど行きます！」

セシリアを始めとして入れ食い状態だった。やはり、クラスメイト同士仲良くしたいのだろう。

一夏はあくまでそう思っている。

「だから、わたしはいいと……」

「まあ、そう言うな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おいっ。私は行かないと……う、腕を組むなっ！」

箒を誘う時は行動で、多少強引に誘えばいい。六年振りとはいえ一夏と箒は幼馴染だ。

故に、こんな時の対策は万全である。

「なんだよ、歩きたくないのか？ おんぶしてやろうか？」

「なっ……！」

ボツと顔を赤くする箒。一夏も悪乗りをしていた。

一夏と箒は共に高校生。だと言うのに小学生の時と同じような接し方をしている。これが間違いだった。

「は、離せっ！」

「学食に着いたらな」

「い、今離せ！ ええいつ」

箒は一夏が絡ませていた腕を取り、肘を中心に曲げて投げる。

宙に浮く一夏の体。そのまま床に叩きつけられようとする一夏だったが、宙でバランスを立て直し、見事に着地した。

「あぶねっ……いくらなんでも幼馴染を投げるな！」

「ふん……お前が悪い」

「なんだよその理屈……でも、腕を上げたな、箒」

「こんなものは剣術のおまけだ。だが、一夏、お前も腕を上げたな……」

「そりゃどうも」

梁山泊ではおまけ程度ではなく、正真正銘、本物の柔術の使い手から毎日のように投げられていた。その成果とでも言うべきだろう。

「え、えーと……」

「私達はやっぱり……」

「え、遠慮しておくね……」

だが、このやりとりは周囲の者を引かせるには十分だったらしい。蜘蛛の子を散らすように退散していくクラスメイト達。残ったのはセシリアだけだった。

「さて、それでは参りましょうか」

「ああ、そうだな」

こんな時、セシリアの存在はありがたかった。一月に満たないとはいえ、あの梁山泊の者達と共に過ごしたのだ。

こついう騒動の耐性は高く、何事もなかったように一夏に笑顔を向ける。

一夏は再び箒の腕をつかみ、学食へと向かった。

「お、おいつ。いい加減に……」

「黙ってついて来い」

「む……」

有無を言わずに一夏が箒を引っ張る。その後は特に抵抗をせず、黙って着いてきた。

そんなこんなで学食。お昼時のこの時間はやはり込むが、なんとか3人分の席を確保することは可能だろう。

「箒、なんでもいいよな。なんでも食うよなお前」

「ひ、人を犬猫のように言うな。私にも好みがある」

「ふーん。あ、日替わり三枚買ったからこれでいいよな。鯖の塩焼き定食だつてよ」

箒の言葉を流し、一夏は販売機から日替わり定食三人前の食券を購入する。

「わたくしですか？」

「ああ、悪い。セシリアはピザの方が良かったか？ この魔女め」

「何故にその選択ですか！？ いえ、別にピザは嫌いではありません

んけど。そもそも魔女ってなんですか？」

「共犯者だ」

「お前達はなんの話をしている！？　というか一夏、私の話を聞いているのか？」

「聞いてねえよ。俺がさっきまでどれだけ緩和に接してやってると思っただけ馬鹿。台無しにしゃがって。お前、友達できなかったらどうすんだよ。高校生活暗いとおまんないだろ」

「わ、私は別に……頼んだ覚えはない！」

「俺も頼まれた覚えがねえよ。あ、おばちゃん。日替わり三つで。食券はここでいいですよ？」

右手だけで食券をカウンターに置き、一夏は食堂のおばちゃんに問いかけた。

左手は未だに箸をつかんだままだ。放せば逃げてしまつかもしれない。それはもう、はぐれメタル並みに。

逃げられないようにし、一夏は言葉が続けた。

「いいか？　頼まれたからって俺はこんなこと、普通はしないぞ？　箸だからしてるんだぞ」

「な、なんだそれは……」

「一夏さん！　先ほどから聞いていれば篠ノ之さんばかり……不公平です。わたくしとも手をつないでください！――」

「なんでだよ？ ややこしくなるからセシリアは黙ってる！」

「……………」

セシリアはむくれてしまった。何故だろう？

それはさておき、一夏は箒に向き直る。

「えっと、どこまで話したっけ？ …… ああ、そうそう。なんだものにもあるか。おばさん達には世話になったし、幼馴染で同門なんだ。これくらいのお節介はやらせろ」

ある事情により、両親が存在しない一夏。そんな時に世話になったのが箒の両親だった。

また、箒の父親は道場も開いており、幼少期の一夏はそこで剣道をしていた。今は香坂流をやっているのが元同門となるが、この際、そんな細かいことはどうでもいいだろう。

「そ、その…… ありがとう……」

箒は多少、いや、かなりひねくれているところがあるのかもしれない。そんな彼女でも、一夏にこう言われてお礼を言おうとした。だが、あまりにもそのタイミングが悪かった。

「はい、日替わり三つお待ち」

「ありがとう、おばちゃん。おお、うまそうだ」

「うまそうじゃないよ、うまいんだよ」

「そうなんだ。箒、テーブルどっか空いてないか？」

「……………」

「箒？」

出来上がった定食。それに反応した一夏は、箒の言葉を完璧に聞き逃していた。

重たい沈黙。そして益々不機嫌そうな表情を浮かべる箒。

「…………向こうが空いている」

一夏の手を払い、自分の分の日替わり定食を手にしたと歩き出していった。

背後ではセシリアの大きなため息が聞こえる。

「一夏さん、それはありませんわ。本当にありませんわ」

「えっ、なに？ 俺やっちゃったの？ 箒を怒らせちゃった？」

「ええ、それはもう盛大に。少し、篠ノ之さんが可愛そうになりましたわ」

毎度のことながら、一夏はなんで箒が怒ってしまったのかわからない。

が、セシリアにそういわれると無性に罪悪感が込み上げてくる。

気まずい雰囲気で一夏とセシリアも日替わり定食を手にし、箒のいる席へと向かった。

「その、箒……ごめん」

「別に怒ってはいない」

「いや、怒ってるって」

「怒っていないと言っているだろう!」

席で謝罪するも、箒はもとに取り合ってはくれなかった。怒っていないと言っているが、その反応は明らかに怒っている時のそれだ。いつまで経っても平行線、話が進まないだろうと判断し、セシリアがフオローを入れる。

「とりあえず落ち着いてくださいな。篠ノ之さんも一夏さんとの付き合いが長いなら、一夏さんの不治の病くらい把握してますでしょう?」

「おい、なんだよ不治の病って? 俺は至って健康だぜ」

「確かにそうだな……些細なことで怒った私が馬鹿だった」

「今ので伝わったのか? なに、俺って何の病気? いつの間にか病に蝕まれていたのか!？」

箒とセシリアが同時にため息をついた。一夏の病気はまさに不治の病。完治の見込みはないらしい。

「それにしてもクラス代表どうするかな……クラス対抗戦にも出ないといけないんだろ?」

話題が変わる。言葉どおりの意味で、クラスごとの対抗試合だ。クラス代表を務めることになった一夏が試合に出るのが確定し

ており、それに頭を悩ませていた。

「そついえば一夏、お前はISをまともに起動させたことはあるのか？」

「一応な。IS学園への入学が決まった時、しぐれさんが剣術のついでにISの指導をしてくれた。基本動作はマスターしたぜ。もっとも射撃戦はてんで駄目だ」

「しぐれ……か。そついえば昨日もその名を聞いたが、誰なんだ？」

「剣術の師匠。ISの操縦技術も抜群なんだぜ。もっとも知識や理論より感覚つてタイプだから、ISに関する知識はまったく学べなかったけどな」

ISの操縦は大雑把に言ってしまうえばイメージで行うらしい。

IS操縦の基本中の基本、飛ぶという行為。そのために必要な急上昇と急降下は『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』をするそつだ。

もっともそんな論理的なことは一夏には理解できず、イメージするならば鳥。しぐれもISで飛行する時は燕を意識しており、急上昇、急降下、旋回などを難なくこなす。

動物などの動きを真似るのは武術の基本でもあった。中国拳法の象形拳うけけんを始め、古来より人は強さを野性の中から取り込もうと試みてきた。

空手にも猫足という構えがあり、その他にも動物の名前を冠する構えが無数に存在する。一夏の場合はまさにそれだった。

「それならばIS操縦の訓練はあまり必要ないかもしれせんわね。専用機が届きましたら、とりあえず一次移行を済ませましょう。そ

うすれば一夏さんなら後は大丈夫ですわね？」

「専用機があればある程度自由に訓練も出来るだろうし、実際に乗って慣らすよ。問題はやっぱり知識だよな……」

「なら、わたくしを頼ってくださいな。わたくしはイギリスの代表候補、セシリア・オルコットですよ」

「マジで助かるよ、セシリア。ありがとな」

一夏はセシリアに感謝の言葉を向ける。それに対してセシリアがはにかんだ。  
それを面白くなさそうに見つめる筈。

「一夏。ISもいいが、一度お前の腕を見てみたい」

「は？」

「今日の放課後、剣道場に来い。確かめてやる」

一夏を強引に誘う筈。それに異議を唱えたのがセシリアだった。

「あら、ISを使用しない訓練なんて時間の無駄ですわよ」

「なにを言うか！ 剣の道はすなわち見<sup>けん</sup>という言葉を知らぬのか？  
見とは全ての基本において……」

「いや、セシリアは日本人じゃないし当然じゃないか？ そもそも俺も知らなかったぞ」

「お前は黙ってる！」

「一夏さん、放課後はわたくしとご一緒に授業のおさらいをしましょう」

わいわい、がやがやと騒ぐ箒とセシリア。

その中心である一夏当人は、ずずずと味噌汁を啜り、平然と答えた。

「でも、箒の言い分もわかる。なんだかんだでISは人が使う兵器だ。身体能力や技術も大事だよな」

「一夏」

「一夏さん……」

箒の声が弾み、セシリアの声が沈んでいく。

一夏はそれにも気づかず、自分の考えを続けて口にした。

「それに俺、近接格闘型だし。さっきも言ったけど射撃なんてできねえよ。殴るか蹴るか、投げるか斬るかだからな」

剣術、柔術、中国拳法。さまざまな武術をやっている一夏だが、射撃などは流石に専門外だった。

しぐれなら武器と兵器はなんだって扱えるのだろう。なんたって剣と兵器の申し子だ。彼女に扱えない得物などこの世には存在しない。

「もちろん、セシリアにもちゃんとお願いするぜ。ただ、今日は箒の言うとおりに剣道場にだな。久しぶりに会ったし、箒の腕も上がったみたいだからちょっと試してみたいんだ。同門だしな」

「一夏さんがそう言うのでしたら……」

セシリアは渋々と同意し、箸を器用に使って鯖の身をほぐしていた。梁山泊での生活もあり、育ちも良いために箸の扱いは日本人顔負けだ。

なににせよ、これで今日の放課後の予定は決まった。

## BATTLE 8 白式

「よつと」

「なっ!？」

幹竹割り一閃。一夏の竹刀が上段から勢いよく振り下ろされ、それを箒が竹刀で防御する。

だが、そんなことなど意味を成さなかった。一夏の振り下ろした竹刀は箒の竹刀を容易く両断した。まるで真剣で斬ったかのような切り口だ。

一夏の竹刀はそのまま箒の首筋に突きつけられ、ぴたりと動きを止めた。あまりにもあっさりとした幕引きだった。

「俺の勝ちだな」

「ああ……参った」

勝ちを宣言する一夏と、それを認める箒。時間帯は放課後、場所は剣道場での出来事。

一夏と箒は久しぶりに手合わせを行い、今、その決着がついたところだ。

「本当に腕を上げたんだな、一夏。まさか竹刀で竹刀を両断するとは思わなかったぞ」

一夏の腕前に、箒は感心したような眼差しを向けてくる。それに悪い気はせず、むしろ気分が良さそうに一夏は言った。

「まあ、これも修行の成果かな？　とは言ってもしぐれさんと比べたらまだまだなだけだよ」

「ほう、ということはそのしぐれとか言う人も竹刀でこの程度のことができると言うことか？」

「ああ、それどころかしゃもじで斬鉄すらするともない人だ」

「ざ、斬鉄？　しゃもじで！？」

「嘘だと思っただろ？　冗談だと思っただろ？　それが本当なんだよなあ。俺じゃしゃもじで竹刀を斬ることしかできないのに」

「待て、斬れるのか？　しゃもじなんかで竹刀を斬れるのか！？」

「本当か嘘かは定かではないが、一夏が冗談を言っているようには見えない。」

「箒は幼馴染が人間をやめたのではないかと本気で心配になった。」

「お疲れ様です、一夏さん」

「ありがとう、セシリア」

「手合わせを終えた一夏に、セシリアがタオルとドリンクを差し出してくる。」

「手合わせは一夏の圧勝で、すぐに決着がいてしまったので特に疲れてはいないが、セシリアの好意を無碍にするのも気が引けたので、一夏は素直に受け取ることにした。」

「それにしても悔しいな……少しは差が埋まったかと思ったが、逆

に開いていた」

ドリンクで喉を潤している一夏に、箒が寂しそうに言う。小学生のころ剣道を共にやっていた二人だが、当時も一夏は箒を圧倒していた。

しぐれ達が言うには一夏には才能があるらしいが、当時は剣道が楽しかったので毎日練習を欠かさなかった。その成果もあってかそれなりの腕を有していた。

それが今は、梁山泊の者達による拷問のような扱き。いやいやながらにそれを受け、今の一夏は並みの者では太刀打ちできない域にまで達していた。

「いや、箒も腕は上がってるって。流石は中学の全国大会優勝者。ただ、俺の場合……この力を手に入れるにはいろいろと大切なものを失ったわけで」

一夏の体がガタガタと震える。目が虚ろになり、覇気が消えた。顔面が蒼白となり、昨夜と酷似した状態になってしまう。

スイッチが入ってしまったのだ。一夏のトラウマスイッチがONとなる。

「う……うわああああああっ！ や、やめつ、やめろ ヨツカーアア！ しぐれさん、だから真剣での稽古は……刃物いや、刃物怖いイイ！ 秋雨さん、だからそれなに？ その怪しげな発明はアア！ にがっ、なんですこの薬？ 馬さん？ 馬さん！ 目を逸らさないください！！ アパチャイイ！！ 手加減を、まずは手加減を覚えて！ それ死ぬ、死ぬから……あ、ああ、あああああああああああ！！」

「い、一夏！？」

「一夏さん、落ち着いてください。ここはIS学園ですわ。大丈夫、あの方達はここにはいらっしやいませんか」

昨夜と同じように豹変する一夏。その姿はあまりにも不憫で、箒を心配させるには十分だった。

セシリアは実際に梁山泊の豪傑達を知っているため、親身になって一夏に接してくれた。それがとてもありがたかった。

「ごめん、取り乱した」

「いや、大丈夫ならいいが……一夏、苦勞しているんだな」

正氣に戻った一夏に箒の優しい言葉がかけられる。それに対して一夏は泣いた。目に涙を滲ませ、感激していた。

このように心配されるのはいつ以来だろう？ 梁山泊ではあの非人道的な修行が日常化しているためこんなことはあまりなかった。美羽によるフォローはあったが、彼女もまた浮世離れた人物。どこかで常識や見解が違っており、すれ違うことが多々あった。

別に美羽が嫌いなわけではない。梁山泊の者達のことを嫌っているわけではない。だが、ここには梁山泊の者はいない。一夏に理不尽な修行を強要する者がいない。

それは梁山泊からの解放を意味しており、一夏は自由だということだ。IS学園への入学は戸惑いを生んだが、これから訪れるであろう明るい未来に一夏は内心でガッツポーズを取る。

そんな、一夏の儚い希望は……

「織斑、ここにいたか。そろそろ秋雨さんから預かっている修行メニューを始めるぞ」

「……………」

いつの間にか剣道場の出入り口前に立っていた、実姉の千冬によって粉々に打ち砕かれてしまった。

一夏は千冬が昨夜言っていた言葉を思い出す。IS学園にいる間は自分が一夏の修行を監視すると、確かにそう言っていた。

「は、はは……あはは……」

一夏は壊れたように笑う。梁山泊の魔の手からは、いや、秋雨からは逃げられない。ならば諦めて運命を受け入れるか？  
否、一夏は諦めることが大嫌いだった。

「戦略的撤退イイ!!」

「き、消えた!？」

故に逃げる。そのあまりの逃走スピードに筭が消えたと勘違いするほどだった。

それも当然だろう。一夏が使ったのは縮地。あらゆる武術でも最高峰の歩法であり、目にも映らぬ速さで間合いを詰めたり、移動することが出来る。

それを逃走するためだけに使うという、無駄遣いも甚だしい一夏の使用法。千冬は呆れていたが、あそこまで完成した縮地を見て感心もしていた。

「早朝も見たが、錬度はなかなかだな。だが甘い!」

千冬は剣道場に立て掛けてあった竹刀を手を取った。それを、窓を開けて逃げようとしていた一夏に向けて投擲する。

出入口には千冬が立っているのだ。ならば窓から逃げるしかない。そんな一夏に矢のごとく迫る竹刀。

「くっ!？」

一夏は手の甲、裏拳の要領で竹刀を弾いた。力を失い、地に落ちる竹刀。それにほっと一安心する暇など一夏には存在しなかった。

「油断大敵だな」

「っ!？」

いつの間にか背後に回っていた千冬。おそらくは一夏が竹刀を弾き、僅かに油断した隙に背後に回っていたのだろう。

流石は達人級と言ったところか。一夏は千冬に後ろ襟首をつかまれ、見事に捕まってしまう。

「さあ、修行を始めるぞ」

「は、はは……箒、セシリア。俺が生きてたらまた明日会おう」

「い、一夏……」

「一夏さん……」

そのまま千冬にずるずると引っ張られ、引き攣った笑みで剣道場を退室していく一夏。

ドナドナの音楽がとても似合いそうであり、売られていく子牛を見るような目で、箒とセシリアは一夏を見送った。

――

一週間後。

「生きてるよ。俺……ちゃんと生きてるよ」

「大袈裟……とも言えないな」

「一夏さん、よくぞご無事で」

なんだかんだで一夏は生きていた。それどころかこの一週間、千冬の扱きを見事耐え抜いた。

流石に一週間ほどで何かが劇的に変わるということはないが、修行の壮絶さは箒達も目撃している。

あれはもはや拷問だった。一歩間違えれば殺人未遂。それを耐え抜き、一夏はここにいる。そのことに箒とセシリアはある種の感動を抱いていた。

「来たか。織斑、お前のISが届いているぞ」

一夏を追い詰めた張本人、千冬が何事もなかったかのように一夏に言う。

ここはビット内。一夏の専用機が届き、今日はそれのお披露目の日だった。

「名は白式だ。<sup>びやくしき</sup>お前の専用ISとなる。大切にしろよ」

千冬の言葉と共にビット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防

壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりと開いていった。

「これが……」

そして……『白』が現れる。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。まぶしいほどの純白を纏ったISが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「綺麗……ですわね」

セシリアがポツリと感想を漏らす。その言葉に一夏も内心で同意した。

世界で唯一ISを動かせる男、織斑一夏のためだけに用意されたIS。特別に感じるのは当然であり、戸惑いながらも一夏はISに触れる。

「あれ……？」

その瞬間、異変を感じる。初めてISに触れた時には電流のような感覚を感じた。これには、白式にはそれがなく、ただ、馴染む。理解できる。これがなんなのか。何のためにあるのか……わかる。

「背中を預けるように、ああそくだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

千冬の言葉に従い、一夏はISを装着していく。受け止められるような感覚。一夏を包み込むようにISが纏わりつき、装甲が閉じた。かしゅっ、かしゅっ、と空気を抜くような音が響く。生まれた時から己の一部だったような一体感。最初から自分のためだけに存在し

ていたように、一夏と白式が繋がる。

解像度を一気に上げたかのようなクリアな感覚が司会を中心に広がって、全身に行き渡る。武術を嗜んでいる一夏はそれなりに感覚に自信があるが、通常時とは非にならないほどの違いを感じる。

各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見ているように理解できた。

「ISのハイパーセンサーは間違いなく動いているな。よし、一夏」

白式が戦闘待機状態のISの反応を捉える。気が付くと、そこにはいつの間にかISを展開した千冬が存在していた。

打鉄。うちがね純国産として定評のあるの第二世代型IS。安定した性能を誇るガード型で、初心者でも扱いやすい。そのことから多くの企業並びに国家、IS学園においても訓練機として一般的に使われていた。武者鎧のような形態をしており、どこかしぐれのISを思わせる。基本武装も同様に刀型近接ブレードであり、千冬はそれを手にとつて雄々しく佇んでいた。

「えつと……千冬姉？」

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

厳しい言葉が一夏に投げかけられる。出席簿を持っていなかったの  
で叩かれるということはなかったが、視線だけで人が殺せそうなほどに鋭いものを向けられてしまった。

それに思わず身震いをし、一夏は千冬の言葉に耳を傾ける。

「フォーマットとフィッシングはこれからやる実戦でものにしろ」

「え、ちょっと待って織斑先生。実戦って、相手はもしかして……」

「何のために私がISを装備していると思う？　つまりそういうことだ」

これから千冬と戦えということ。いくら専用機があるとはいえ、あの千冬と戦えというのだ。

時雨という例外が存在するが、それでも世界最強という名の肩書きを持つIS操縦者、織斑千冬との戦闘。いくら専用機があり、千冬のISが訓練機の打鉄とはいえ、その間には圧倒的な差が存在した。主に経験による差。勝てるわけがない。一夏は内心で即答する。

「ちふ……織斑先生が一夏と戦うんですか！？」

「世界最強の称号、ブリュンヒルデ。その力をこの目で……」

驚愕する筈と、どこかキラキラした瞳で千冬を見つめるセシリア。いくらセシリアでも、代表候補として千冬にはどこか思うところがあるらしい。千冬曰く一部の馬鹿ほどではなくとも、世界最強という存在に少なからず憧れは抱いていた。

だが、そんな想いなどこれから戦う一夏からすればまったく関係がない。

「いや、織斑先生。流石にいきなり実戦と言うのは……」

「何事も体で覚えるのが一番だ。お前はいつもそうしてきただろう？」

「そっいつ問題じゃ……そもそも俺はISの初心者で……」

「うるさい、黙れ。男がぐちぐち言っな」

千冬との実戦を回避しようとする一夏だったが、暴君のような理論に押し込められてしまう。

なんだかんだ言っても、千冬には梁山泊の豪傑達より頭の上がらない一夏だった。

「一夏……死ぬな」

箒の言葉が身に染みる。一週間受けた扱きの中で、もっともハードな訓練がこれから始まるうとしていた。

## BATTLE 8 白式（後書き）

セシリアが既に落ちてるのでクラス代表決定戦はカットです。でも、その代わりに千冬と戦うという無理ゲー……

一夏、がんばれ。

さて、これでは少し短いのでおまけの方を。

おまけ

五反田食堂営業中

「弾、ちゃんこを頼む」

「ねえよ馬鹿」

「なぬう、ちゃんこがないだど！？ ちゃんこくらい置いておけ」

「無茶を言っな！」

地元では評判の五反田食堂。弾の友人である千秋祐馬ことツールが訪れ、注文をしていた。

「ならば仕方ない。業火野菜炒めだ」

「はいよ」

ツールは五反田食堂鉄板メニュー、業火野菜炒めを注文する。それを弾が厨房に通し、五反田食堂の大將である五反田巖が厨房で鍋を振るい始めた。

八十を超えているとは思えない筋肉隆々の肉体。その豪腕は巨大な中華鍋を一度に二つ振るほどに鍛え上げられており、それから繰り出される拳骨は弾やその関係者達を震え上がらせるほどだ。

誰かが言った。五反田食堂の大將は達人級ではないかと。もっとも根の葉もない噂ではあるのだが。

「ラララ」。お久しぶりですね、だん……」

「うるせえ、ガキが！」

「へぶっ!？」

歌いながら五反田食堂の中に入ってきた人物、九弦院響ことジークフリート。またはジーク。

そんな彼に厨房からおたまが投げつけられ、顔面に直撃した。

「いきなりおたまが飛んでくるとは思いませんでしたよ。相変わら

ずのようですね、大将」

「だからなんでお前はそんなに元気なんだよ？ 他のガキどもはこれを喰らったら大抵大人しくなるって言うのに」

「それは私が不死身の作曲家だからです！ ああ、曲が、曲が浮かんできましたよ。ラララ」

「だからやかましいわ！ 歌うな！！」

「あがつ！？」

厨房から出てきた敵に直接殴られ、ジークは歌うのをやめる。殴った敵はすぐに厨房に戻り、調理を再開した。

殴られてばかりと床に倒れるジークだったが、すぐにむくりと起き上がる。

「スフォルツァンド（特に強く）。相変わらずお歳を感じさせない、良い一撃です」

「だからなんでお前はそんなにピンピンしてるんだよ？ 一夏と同様に人間やめてないか？」

弾の言葉などジークには届かない。ジークは平然とツールと同じ席に座り、メニューを注文した。

「カボチャ煮定食をひとつお願いします」

「よりによってそれかよ。ぶっちゃけるとそのメニュー、あまり人氣ないぞ。いっつも売れ残ってるしな」

「私は好きですけどね、深い味わいがあって、良い品です。そう、一曲作りたいほどに」

「だからって歌うなよ。また拳が飛んでくるぞ」

ジークは相変わらずマイペースだ。武術、作曲などに天才的な才能を持っているが、天才には変人が多いとも聞く。ジークの場合はまさにそれだった。

別に変人なのは構わないが、振り回される方からすればたまったものではないというのも事実。弾は呆れたようなため息をついた。

「それにしてもうちの食堂に、七拳豪しちけんこうのうち二人がいるなんて何の冗談だ？」

「その七拳豪に関しても、最近では八拳豪になるのではと噂されますよね」

七拳豪とは、武闘派不良集団ラグナレクの称号。コードネームとして北欧神話にまつわる神などが使われ、第五拳豪のジークと第七拳豪のツールはそこからきている。

これに近々、新たな拳豪が加わるのではないかと噂されていた。

候補は二人。一人はテコンドーなんじョウ使いの南條キサラ。そしてもう一人と言つのが……

「なに、おぬしなら大丈夫だ。秘めたる力を見せてやれ」

「ねえよ、そんなもん。そもそも拳豪に興味ねえって」

五反田弾その人。ジークやツールと接しているうちに、流されるま

まにラグナレク入りしてしまった彼だった。

二人の拳豪と仲が良いことから幹部として扱われ、また拳豪候補に上がるほどの実力を有していることから注目度も高い。

もともと本人は友達づきあいの延長でラグナレクに入ったため、拳豪なんてものに興味はなかった。

「やあ、やってるかな？」

「ああ、いらつしや……って、ええっ!？」

だからと言って無関心だとか、無知だつてわけではない。拳豪に関してはある程度の知識を持ち、全員の顔を知っている。それも当然だろう、彼らはラグナレクの中枢なのだから。

だからこそそのトップが、第一拳豪のオーディーンこと朝宮龍斗あさみや りゅうとが五反田食堂を訪れたことが意外だった。

「おや、オーディーンですか。こんなところで奇遇ですね」

「ジークフリートか。ツールもいるね。なに、近くを通ったから話題の食堂に来てみただけだよ。ここの業火野菜炒めが絶品らしいからね」

「はい、美味しいですよ。じいちゃん、業火野菜炒めもう一丁追加」

「おうよ」

五反田食堂は今日も大繁盛だった。

## BATTLE 9 サード幼馴染

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。ために飛んでみせろ」

四月も下旬。遅咲きの桜も全て散ったところ、今日のIS学園、一年一組の授業は実践訓練だった。

一夏とセシリアは専用機持ちであるため、千冬に言われて生徒達に手本を見せることになる。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

急かされ、一夏は右腕のガントレットに視線を向けた。ISはフィッティングしたら、操縦者の体にアクセサリーとして待機する。その形状が一夏はガントレットであり、セシリアは左耳のイヤークラスだった。

（普通はアクセサリーだよな？　なのに何故、俺のはガントレットなんだ？）

一夏は考える。ガントレットはアクセサリーではなく防具だ。

千冬との地獄の戦闘でフィッティングさせ、体でISの操縦を覚えたのは別にいいが、何故このような形状をしているのだろう？

そんなどうでもいいことを考えていると、千冬から活が飛んできた。

「集中しろ」

（やばっ、次は叩かれる）

出席簿での殴打を予想し、一夏はすぐさまISを展開させる。右腕を突き出し、ガントレットを左腕でつかむ。まだまだISには慣れていない一夏は、このポーズが一番集中でき、ISを展開するイメージを浮かべるのに適していた。

（来い、白式）

右手から全身に薄い膜が広がっていく感覚を味わう。約0・7秒の展開時間。一夏の体からは光の粒子が解放されるように溢れて、そして再集結するように纏まり、IS本体として形成される。

白式。フィッティングが終わっているため、この機体は完全に一夏専用のものへとなっていた。

初めて白式を展開させた形状とは異なる。工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的だ。中世の鎧を思わせるデザイン。

そして、何より驚いたのがISの武装。近接特化ブレード一本と言うあんまりな装備だったが、その装備が問題だった。

ゆきひらにがた  
雪片二型

雪片。それは、かつて千冬が振るっていた専用IS装備の名称。刀かたなに型成かたなした形名。

世界最強の証であり、雪片の前にはあのしぐれでも苦戦したと言う。そんな刀が自分のものとなり、嬉しくて一晩中振っていたことを思い出す。もっとも徹夜をしてしまったため、翌日の授業は地獄だったと苦い思い出もあった。あの日は居眠りをし、何度千冬に出席簿に叩かれたことが。

「よし、飛べ」

一夏が再び思考に耽っていると、千冬の指示が飛んだ。

セシリアは既にブルー・ティアーズ、その名の通り青く、フィン・アーマーを四枚背に従えた、王国騎士のような気高さを感じさせるISを展開しており、それですぐさま急上昇する。

遙か上空でセシリアが静止したのを確認し、一夏もそれに続いた。イメージは燕。燕が空を舞う姿を、しぐれがISで飛ぶ姿を想像し、イメージする。空を切り裂くように舞い上がる白式。すぐさまセシリアと同じ高度に到達し、静止したところで通信回線から千冬の声が聞こえた。

「上出来だ。まだまだなところもあるが、少しはISにも慣れてきたようだな」

「そりゃ、先生がいいですから」

急上昇、急降下を習ったのは昨日の授業でだ。だが、一夏はIS学園入学前にしぐれから手解きを受けており、入学後も毎日のように千冬から指導を受けている。これで上達しなければ泣けてくるころだった。

「本当に素晴らしいですね、一夏さん。短い稼働時間でよくここまで」

「さつきも言っただけど、先生がいいんだよ。もっとも、何度逃げ出したいと思ったことか……」

一夏のつぶやきにセシリアは苦い笑みを浮かべる。あの修行を直に見た者だからこそ思える気持ちだろう。

「それにしても不思議だよな。実際に飛んでて今更何言ってるんだっ

て話だけど、なんで浮いてんだ、これ？」

話題を変え、一夏は疑問を口にした。一応白式には翼状の突起が背中に二対ある。が、だからと言って飛行機と同じ原理で飛んでいるわけではない。だからと言って鳥と同じ原理と言っわけでもなく、一夏のイメージする燕にしたって飛行の軌道だけだ。

ISとは翼の向きに関係なく好きに飛べるらしく、一夏の頭では原理を理解することなど到底不可能だった。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

「そう、残念ですわ。ふふっ」

セシリアが説明をしてくれようとするが、それでも一夏は理解できないだろう。ISについての知識、専門用語はまだまだ、圧倒的に不足しているからだ。

「ISの実践はともかく、知識はいまひとつですわね。一夏さん、放課後にわたくしが講義してさしあげましょうか？」

「お願いできるか？ ありがとな、セシリア」

「いえいえ、そのくらいどうってことありませんわ。で、一夏さん。その時は二人つきりで……」

「一夏っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りて来い！」

セシリアとの会話中に、通信回線から怒鳴り声が響いてきた。

発信源は地上。上空から見下ろすと箒が山田先生からインカムを奪っており、ご立腹の様子で一夏達を睨んでいた。

その隣ではインカムを奪われた山田先生がおたおたしている。やはり、ISのハイパーセンサーによる補正は素晴らしい。現在、二百メートルの高度で飛んでいるのだが二人の睫毛が見えるほどだ。

一夏がその気になれば何百メートル離れていようと望遠鏡要らずなのだが、流石に睫毛などは見えないだろう。もっとも、梁山泊の豪傑達なら睫毛どころか毛穴すら見かねない。目の良さは武術家にとつてとても重要な要素だった。

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんでしてよ。元々ISは宇宙空間での稼動を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ」

宇宙空間での稼動。そういえば、山田先生が授業でそんなことを言っていたなと思ひ出す。

今現在では兵器として使用されているISだが、元々はそのために作られたマルチフォーム・スーツなのだ。ならばこの性能も納得がいく。

流石に梁山泊の豪傑達でも、何万キロという単位になると肉眼での確認は大変困難なことだろう。そう考えると、やはりISは凄いだと再認識した。

「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

千冬からの通信に従い、すぐさまセシリアは地上へと向かった。ぐんぐんとその姿が小さくなっていく。危なげなく下降していき、地上すれすれで見事に停止して見せた。

「うまいもんだなあ」

その姿に一夏は感心する。流石は代表候補と言ったところか。次は一夏の番だ。

落ちるように下降する。重力に従い、落下していく。どんどん地上が近づいてきて、一夏は完全停止の体制に入った。

「よし」

またもイメージは鳥。今度は燕ではなくカワセミだった。

停止飛翔、ホバリングのイメージ。飛行原理は違うが、ISの操縦で一番大事なのはそのイメージだ。一夏のイメージどおりに白式の翼上の突起はバツバツサと羽ばたき、地上十センチで見事に停止した。

だが、白式の羽ばたきにより風圧が発生し、土煙が舞い上がる。周囲にいたクラスメイト達はゴホゴホと咳き込み、千冬は出席簿で団扇のようにして土煙を払いながら、厳しい視線を一夏に向けた。

「停止は出来ているが織斑、その方法は即刻改善しろ」

「はい……」

この方法は迷惑過ぎる。一夏としてはこれがやりやすいのだが、そのたびに風圧や土煙が起こるのは問題だ。

もっと静かに、目立たずに完全停止する方法を模索する必要があるだろう。

「次だ。今度は武装を展開しろ」

「あ、はい」

千冬の新たな指示が飛び、そのまま授業は続行された。

＋＋＋

「ふうん、ここがそうなんだ」

夜。IS学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなボストンバツクを持った少女が立っていた。

暖かな四月の夜風になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結んである。所謂ツインテール。茶色がかった黒髪が美しく、金色の留め金がよく映えていた。

「えーと、受付けってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから一枚の紙切れを取り出す。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表しているようだった。

「本校舎一階総合受付け……って、だからそれがどこにあんのよ」

うがーっと妙な叫びを上げる。だが、叫びを上げたところで返事を返してくれる者などいない。

少女は苛立ちと共に紙を上着のポケットに捻じ込むが、その時にま

た中でぐしゃつという音が聞こえた。だけど、そんな些細なことは気にしない。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

気にしている余裕がないのだ。ぶつぶつ言いつつも、その足取りが止まることは決してなかった。思考よりも行動。つまり、少女はそういう性格だということだ。良く言えば実践主義。悪く言えばよく考えないだけ。

愚痴をつぶやきながらも、彼女は先へと進んでいく。

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）

あまりにも広いIS学園の敷地内を当てもなく歩き回り、キョロキョロと辺りを見渡す。

とはいえ、現在の時刻は八時過ぎ。既にどの校舎も灯りが落ちており、生徒は普通なら寮にいる時間だ。そう都合よく、人影が見つかるわけがなかった。

（あーもー、めんどくさいなー。空飛んで探そうかな……）

そう考えたが、電話帳三冊分にも匹敵する学園内重要規約書を思い出してやめる。

まだ転入の手続きが終わっていないというのに、学園内でISを起動させたら事である。最悪、外交問題に発展するかもしれない。

それだけは本当にやめてくれと、何回も懇願していた政府高官の情けない顔を思い出す。少しだけ気が晴れたような気がした。

（ふっふーん。まあねー、私は重要人物だもんねー。自重しないとねー）

自分の倍以上も歳がいつてる大人がへこへこと頭を下げる姿は、ハッキリ言って爽快だった。

少女は昔から歳をとっているだけで、偉そうにしている大人が嫌いだった。政治家や大学の教授なんて名乗っていても、無能な者はいくらでもいる。大事なはその人自身の能力、実力だった。

また、子供のころは男ってだけで偉そうにし、女を見下したように接する子供が大嫌いだった。

だから、少女にとって今の世の中は居心地がよかった。女尊男卑のこの世界。けど、何事にも例外は存在する。

（元氣かな、一夏）

世界で唯一、ISを動かした男。少女の幼馴染であり、周りの男達とは大きな違いを持っていた。

そして、少女がこうやってIS学園を訪れた最大の理由。会ったのは一年ぶりになるはずだ。

（怪我は……いつものようにしてたわね。死んでないかな？）

洒落にならないことを思い浮かべる。一夏が居候している道場。そこにはISすらものともしない達人達が住んでいた。まさに人外魔境そのものである。

そこでの生活はまさに命がけであり、一夏は様々なトラウマを抱えていた。毎日のようにボロボロとなり、壊れていく一夏。

それを支え、癒しのような存在だったのが少女だ。一夏は少女のことを気に入っていた。それに対し、少女も満更ではない様子だった。記憶がよみがえってくる。日本で暮らした日々。少女と一夏の思い出。

（まったく。一夏はあたしがいないと駄目なんだから）

少女は得意気に鼻を鳴らして笑う。そんな時、声が聞こえた。

少女はその声の主を受け付けの場所を聞こうと歩み寄る。だが、唐突に今まで止めなかった足が止まってしまった。

なぜなら交わされる会話、その一方の方を少女はよく知っていたからだ。

「バンドをやりたい」

「いきなり何を言っているんだ、お前は」

「いや、俺の友人が私設・楽器を弾けるようになりたい同好会なんでものをやってるんだけどな、それに感化されたというか、ギターを弾きたいというか」

「勝手にしろ」

仲が良さそうに会話をする一夏と、一人の少女。一夏は少女のことを名前で呼んでおり、とても親しそうだった。それが、少女には面白くない。

「箒もやらないか？ 歌うまいしさ、ボーカルとベースで」

「ボーカルはともかく、ベースはどこから来た？ 私は楽器なんて弾けないぞ」

「いやいや、そんなはずないだろ。絶対にうまいって」

「その根拠はどこから沸く？」

募る苛立ち。冷たい感情が湧き上がり、少女は気づかれないようにその場から去っていく。額には青筋がくつきりと浮かび上がり、怒りのあまりに肩を震わせていた。

「ん？」

「どうした、一夏」

「いや、今、そこに誰がいなかったか？」

「気のせいだろう」

「そうか？」

一夏と少女の再会は、もう少し先のことだった。

＋＋＋

「というわけでっ！ 織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

クラッカーの音が鳴り響く。宙を舞う紙テープを眺め、一夏は心の中で絶叫した。

（ぜんぜんめでたくねえよ！ 何だこのパーティは！？）

現在、夕食後の自由時間。場所は寮の食堂。一年一組のメンバーは全員集合していた。

各自、飲み物を手に持って騒いでおり、そんな中、冷めた表情で一夏は壁にかけられた紙を見る。

そこには、『織斑一夏クラス代表就任パーティ』と書かれていた。代表に決まったのはもうずいぶん前のことだが、どうして今更祝うのだろうとどうでもいいことを考えつつ、一夏はこれからのことを想像して肩を落とす。

とても、とても面倒なことになりそうだった。何度も思うが、こういったことはセシリアに任せた方が適任だと思う。間違っても自分に任せるべきではない。

どうなっても知らないぞと思う一夏だったが、クラスメイトたちはそんな一夏の思考に構わず存分に騒いでいた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

「ちょっと待て！ お前二組だろ！？ というかおかしいだろ、おかしいよな！？ 一組って三十人だろ？ なんにあって、明らかに三十人以上いるんだよ！？」

相槌を打っている少女を始め、一夏は場の混沌さに絶叫を上げる。クラスの集まりだというのに、その人数がクラスメイトの数を超えているという奇妙な状況だった。

「おりむー、そんな些細なこと気にしちゃダメだよ」

のほほんとした少女が一夏を諭す。それと共に笑いが巻き起こり、一夏の疑問はあっさりと吹き飛ばされてしまった。

とても疲れる。現状にため息をつき、一夏はどっかりと椅子に腰を下ろした。

というか、いつの間に『おりむー』なんて愛称が付いたのだろうか？

「人気者だな、一夏」

「……本当にそう思うか？」

「ふん」

筈はなぜか機嫌が悪い。冷たい態度でお茶を飲んでいた。どうしてかわからない一夏からすれば、これも疲れの一因だった。

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました〜！」

新聞部と名乗る少女に更なる盛り上がりを見せるクラス一同。一夏はテンションは留まるところを知らずに下がり続けていた。

「あ、私は二年の黛薫子<sup>まゆずみ かおるこ</sup>。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

「あ、どうもご丁寧に……えっと、坂本美緒さんですか。俺、どっちかって言うと先代の声の方が好きでした」

「本人を前にして言う事！？　ってか、名刺にそんなこと書いてな

いよ！ 薫子だって言ったよね！？ どこから出てきたの、坂本美緒って名前！！」

「眼帯の下に魔眼とか持ってるそうですね。でもそうすると、将来的に眼帯キャラが被るか」

「何の話！？」

「あ、その眼鏡って実は魔眼殺しなんですか？」

「違うよ！ これ、普通の眼鏡だからね」

「薫子さんですか。画数が多いですね。書くの大変じゃありません？」

「なかったことにされた！？ 今までの会話、全部なかったことにされた！！ いや、確かに書くのは少し大変だけど……」

なのでからかうことによつて無理やりテンションを上げる。薫の突っ込みが痛快で、一夏は溢れてくる笑みを噛み殺す。

薫は自身がからかわれていたことに気づき、コホンと咳払いをして気を取り直した。

「いやはや、意外に面白い子だね、君。私が突っ込みに回るとは……これはインタビューも期待できるかも」

そういつて、ボイスレコーダーを一夏に突き出してくる。

「ではでは、ずばり織斑君！ クラス代表になった感想をどうぞ！」

「どうしてこうなったんでしょう？ 俺にはクラス代表になるつもりなんてこれっぽっちもなかったのに……」

「あやや、やる気が微塵も感じられないぞ。頑張つて、織斑君」

「期待に応えられるかはわかりませんが、やれるだけ頑張ります」

「うん、インタビューありがとうね。あとは適当に捏造しておくから」

「オイ！」

ニコニコと笑顔でとんでもないことを言う黛。先ほどもかったことに関しての仕返しなのだろうか？

今度は、一夏のすぐ側で控えていたセシリアに向けて黛はボイスレコーダーを向ける。

「代表候補生、セシリアちゃんにもコメントもらっていいかな？」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

「ならいいや。適当に捏造するから写真だけちょうだい」

「ええっ!？」

なんとというか、黛は自由なお人だった。そして面白い。一夏は彼女とは仲良くやれるのではないかと思い、僅かに頬を緩ませる。

「先輩も十分に面白そうですね」

「あはは、そうかな？ さてと、それじゃ織斑君とセシリアちゃん、並んでもらえるかな？ 写真撮るから」

「はい」

「え？」

カメラを構える黛と、それに素直に頷く一夏。セシリアは意外そんな声を上げていたが、その声はどこか喜色を含んで弾んでいるように聞こえた。

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもらうよ。あ、握手とかしてるといいかもね」

「そ、そうですね……そう、ですわね」

もじもじし、チラチラと一夏に視線を送るセシリア。その真意を一夏が理解することは百パーセントありえず、顎に手を当て、首を捻って考え込むだけだった。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて……」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

「そうだって。そもそも着替える必要ないだろ、写真くらいで。え

つと、握手をすればいいんですよ？」

セシリアの提案を黛と一夏が同時に拒否し、一夏はセシリアの手を取って握手の形に持っていく。

その時、セシリアの顔が赤くなっていた。その理由を一夏が理解することはまずない。

箒が一夏を睨んでいた。その理由も一夏には理解できない。訳の分からぬことだらけで、一夏は反応に困った表情をする。

「浮かない顔だね、織斑君。笑って笑って。撮るよー。35×51÷24は？」

「え？ えつと……2？」

「ぶー、74・375でしたー」

写真が撮られる。はい、チーズや1+1なんてありふれた掛け声ではなく、一風変わった掛け声で撮られたために変な顔になっていか心配になった。

だが、それよりも、一夏は気になったことを口にする。

「なんで全員入ってるんだ！？」

黛がシャッターを押す寸前、一組の生徒は全員一夏とセシリアの周りに終結していた。その機敏な動きには流石の一夏も驚愕する。クラスメイトは全員武術をかじっているのではないかと思うほどに素早い動きだった。

そして、その中には箒もいた。箒は武術をかじってるどころではなく、剣道で女子中学生の頂点に立った人物だが、まさかこんなことをするような性格だとは思わなかった。

第の意外な一面を見たような感じがし、それと同時に何がしたいのだろうと考える。

「あ、あなた達ねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

不満を漏らすセシリアだったが、クラスメイト達はニヤニヤした笑みを浮かべて彼女を丸め込んでいた。  
その様子を他人事のように眺め、一夏は紙コップに注がれたジュースを口にする。

「まあ、これはこれでありかな。仲良しクラスだね」

「そうですか？」

黛はカメラの片づけをしながら、唐突に一夏に話題を振ってきた。

「そうそう、織斑君。これ知ってる？ 最近加わった、IS学園の七不思議」

「七不思議……ですか？」

IS学園。そこはISを専門に教えるとは言ってもやはり学校。ど

この学校にも七不思議というものは存在するらしい。一夏の小学校と中学校にもそういったものは存在していたが、そのどれもが似通ったような内容だった。

13段目の階段だったり、動く二宮金次郎像だったり、美術室のモナリザの絵、または音楽室の肖像画などなど。

「ずいぶん時期外れですね。普通、怪談なら夏とかですよね？」

これが七月や八月なら時期的にはちょうどいいが、現在はまだ四月。こういった話の時期的にはかなり早い。それは黛も理解しているようだ。

「そうなんだけどね。でも、ここ最近結構目撃者がいるのよ。これは放っておけないってことで今度新聞部が張り込むことになったんだけどさ、織斑君も来る？」

「遠慮しておきます」

「ちえっ、残念。でね、その七不思議なんだけど……」

黛は語りだす。目撃者多数の、新たなるIS学園の七不思議を。

「深夜から早朝にかけて……出るんだって。お地蔵さんを担いだ少年が。石でできたお地蔵さんを軽々と担ぎ、IS学園内を徘徊するらしいよ。でさ、その少年に見つかりと食べられちゃうんだって」

「突拍子のない話ですね？」

「そうかな？ あ、食べられるってのは物理的にじゃなくて性的にね」

「女性がそんなこと堂々と言うべきじゃないと思います！　ってか、どんな風に広がったんですか、その七不思議！！」

「案外初心だね、織斑君。でも目撃者の話だと、お地蔵さんを担ぐ少年はかなりの美形らしいよ。だからむしろ食べられたいってことで、夜の校舎を徘徊する人がいるとか」

「そうなんですか……俺には関係ないです」

疲れたようにため息を吐く一夏。箒はそんな一夏の側に歩み寄り、耳元でそつと囁いた。

「おい、一夏。その怪談だが……」

「なんだ箒？　まさか信じたのか？　こんな突拍子もない話」

「いや、こういったうわさには尾ひれがつくし、別に信じたりはしないが……その少年というのはお前じゃないのか？」

「……………あ」

箒に言われて、一夏は気づく。深夜と早朝に現れる、地蔵を担いでIS学園内を徘徊する少年。その正体は織斑一夏だった。

地蔵とは秋雨作のトレーニング機材、投げられ地蔵グレート。これを使用するにあたって、目立たないように深夜と早朝に外に運び出し、そこでトレーニングをするわけだ。筋トレ、投げ技の練習。投げられ地蔵グレートの活用法はさまざまだ。

トレーニングをするたびに地蔵を外に運び、トレーニングを終わるために地蔵を部屋に戻す。つまりはそれが徘徊であり、地蔵を運ぶ

一夏の姿を誰かに見られていたということだ。  
その事実には、呆然し、一夏は頭を抱えた。

「なにになに？ 七不思議について何か知ってるの？」

「何も知りません！ 絶対に、微塵も、これっぽっちも知りません！  
気のせいですのでお気になさらず！！」

「そ、そう？」

黛の問いかけに慌てふためいて否定する一夏。

この話はこれで終わったが、パーティは騒がしく、十時過ぎまで続いた。

テンションを始終継続させる女子達。そのエネルギーに圧倒され、

一夏は疲労を蓄積していった。

その疲労は、翌日まで残るほどだった。

「ふあゝあ……」

「だらしないぞ、一夏」

盛大な欠伸と共に一夏は教室内に入る。それを簞に注意され、僅かに気を引き締めた。

が、それも長続きはせず、一夏は再び欠伸をする。

「はふっ……」

「気が抜けてるな」

「眠いんだから仕方がない」

深夜と早朝はいつもどおりにトレーニングをしていた。欠かしでもしたら秋雨や千冬に何を言われるか分からないからだ。ただ、昨夜のことでもあって地藏を運ぶ時には細心の注意を払った。昨夜はおそらく、誰にも目撃されることはなかっただろう。

「織斑君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

席に着くと、隣の席のクラスメイトに話しかけられた。

入学からの数週間で、今では気兼ねなく女子と会話をすることができる。話し相手が皆無で、一人ぼっちという状況はあまりにもさびしすぎるため、この状況配置夏からすればとても喜ばしいことだった。

「転校生？ 今の時期に？」

今はまだ四月だ。何で入学ではなく、転入なのだろう。

しかも、IS学園に転入するにはかなり条件が厳しかったはずだ。試験はもちろん、国の推薦がなければできないようになっていた。それはつまり、転校生は代表候補生クラスであることを示していた。

「そう、何でも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

案の定、代表候補生だった。それに代表候補生といえばこの一組にも一名存在する。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

セシリア・オルコット。彼女の自信はどこからわいてくるのだろうかと思うが、その自信満々の腰に手を当てるポーズはとても似合っていた。

彼女はイギリスの代表候補生だ。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？ 騒ぐことのほどでもあるまい」

第もこの会話に入ってきた。噂の転校生とは一組に転入するわけではないらしい。入るのは二組だとか。  
だが、それでも多少気になるのは事実。

「どんな奴なんだろうな」

代表候補生というからにはやはり強いのだろう。セシリアと同じくらいだろうか？

とはいえ、セシリアと戦ったことがないので確かな実力は分からない。一夏がISで戦ったことがあるのは千冬のみだが、あれは世界最強なので参考にはならないだろう。転校生が千冬クラスと考えただけで恐ろしくなる。もしそうなれば、次回のブリュンヒルデは間違いなくその転校生だ。

「む……気になるのか？」

「ん？ ああ、少しはな」

「ふん……」

聞かれたことに素直に答えたというのに、何故か筈の機嫌が悪くなった。その理由が一夏にはまったく理解できない。

代表候補生云々も気になるが、転校生の国籍が中国だというのも気になる一因だった。中国といえば馬、そして一夏のサード幼馴染の出身国である。元気でやつてるかと思い、今度手紙を書こうかと考えていた。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！ そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから」

「いや、千冬姉がいるしいいや。これ以上やったら俺、マジで死ぬから」

「そう、ですか……」

見てる方が気の毒なほどに気落ちするセシリア。思わず一夏に、罪悪感が芽生えるほどだった。

だが、一夏の練習相手で千冬ほどに最適な人物はいない。雪片という同等の武器を使う近接戦型同士。しかも世界最強。IS戦のいろはや戦闘の駆け引きなどを教わるにはこれ以上適任の人物はいなかった。

「まあ、やるからには勝つか。それでも俺は織斑千冬の弟で、香坂しぐれの弟子だからな」

「その意気ですわ、一夏さん。わたくしも微力ながらお手伝いいたします」

「男を見せろ、一夏」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

ちなみに、クラス対抗戦とはそのままの意味だ。クラス代表同士によるISのリーグマッチ。

本格的なIS学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。また、クラス単位での交流及びクラス団結のためのイベントだそうだ。

しかも、一位のクラスには優勝商品として学食デザートの半年フリーパスが配られるらしい。甘い物好きの女の子としてはとても魅力的な話だろう。

「織斑君、がんばってねー」

「フリーパスのためにもね!」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

昨夜のパーティにも負けないほど、わいわい騒ぐクラスメイト達。対応に困り、一夏が適当に相槌をうとうとしたところで……

「その情報、古いよ」

とても懐かしく、聞き覚えのある声が響いた。その声を聞いた一夏

はがばつと声の主に対して視線を向ける。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっていた少女。彼女は……

「リン……お前、鏡音リンじゃないか！」

「そうよ。中国の代表候補生……って、そういうネタはやめなさいって何度も言ってるでしょうが……！」

「あ、レンの方だったか」

「それは男でしょうっ……！」

「冗談だ。そんなに怒るなよ。久しぶりだな、鈴」

「まったく、あんたは……」

鳳鈴音。一夏のサード幼馴染であり、中学時代に仲のよかった少女だった。

「で、何しに来たんだ？」

「宣戦布告よ。一組のクラス代表に向けてね」

「そうか。つまり俺に会いに来たんだな。嬉しいぜ、鈴」

「ちょ、なんでそうなるのよ？ あたしは一組のクラス代表に……」

「だから俺が一组のクラス代表だって。察しろよ」

「ええ、そうなの!？」

「そうなんだよ。それにしてもさっきの登場の仕方はなんだ？　か  
つこつけてたのか？　ぜんぜん似合ってたぞ」

「んなっ……!？　なんてこと言うのよ、あんたは!」

怒りをあらわにする鈴に対し、一夏は笑っていた。とても楽しそうな笑みを浮かべている。

久しぶりに会った幼馴染。それだけでも心躍る気分だったが、このやり取りの楽しさに快感のようなものを感じていた。

クラスメイト達とある程度話ができるようになったとはいえ、このように馬鹿騒ぎをする間柄ではない。箒は乗りが悪いし、セシリアに関してもそういったキャラではない。

だから今までの憂さを晴らすかのように、一夏は存分に鈴をからかっていた。

「おい」

「なによ!？」

が、この楽しかった時間も終わりを迎える。鈴の背後から聞こえる声。その声に一夏は表情を引き攣らせた。

鈴が怒り交じりで聞き返すと、頭部に痛烈な出席簿の打撃が叩き込まれた。鬼教官、織斑千冬の登場である。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

すぐさまドアの前から離れる鈴。その態度は明らかに千冬に対して怯えていた。

そういえば、鈴は昔から千冬を苦手としていたことを思い出す。その理由はわからないが、なんとなく理解することはできそうな気がした。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

「いや、なんで俺が逃げるんだよ……」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

もう奪取で二組へと戻っていく鈴。幼馴染が泡っていないようで、一夏は一安心した。

「っていうかあいつ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

「おい、一夏。一体どういうことだ！？ どうしてあの女がここにいる！？」

「い、一夏さん！？ 説明を……」

「お、おい、落ち着け。ちふ、織斑先生を前にそんなことをすると……」

箒とセシリアを始め、クラスメイト達からの質問が一夏へと向く。その様子を見て、一夏は思わず黙祷した。

「席に着け、馬鹿ども」

千冬の出席簿が火を吹く。クラスメイト達は頭を強打され、その場に蹲っていた。あれは痛い、あの痛みをよく知る一夏は思った。鎮静化した教室。千冬が教卓に上がる。今日も一日、ISの訓練と学習が始まるうとしていた。

## BATTLE9 サード幼馴染（後書き）

中の人ネタ大好きですw 今後ともやっていきます。  
ちなみに読者の皆様の好きな中の人って誰ですか？

## BATTLE 10 約束

（何故だ……何故今更にあの女子が、鈴とやらがIS学園に転入してくる！？）

朝の一件が気になり、箒は授業に集中できないでいた。

一組に宣戦布告に来たという少女、凰鈴音。箒は彼女のことを知っていた。髪が少しだけ伸びていたが、あの姿は忘れようがない。一夏の私物である写真に写っていたのがあの少女だった。しかもツーショット。それだけで一夏と鈴は特別な関係だということが伺える。一夏曰くサード幼馴染とのことだが、果たして本当にそれだけだろうか？

なにか隠し事をしていないかと箒は勘繰りを入れる。

（幼馴染は私だろ。お前曰く、ファーストは私だろ！なのに、なのに、サードなどという後から出てきた女子に……）

込み上げてくる怒りをどうにか抑えながら、箒は一夏に視線を向けた。現在、一夏はまじめに授業を受け、ノートを取っている。

（私は授業に集中できないというのに、お前はっ……！）

だが、それは箒からすればさらに怒りを煽る切欠にすぎなかった。

「……………」

それでも落ち着く、冷静になろうとする。明鏡止水のように。考えてみればそれがどうしたというのだろう？なにせ、箒は一夏と同じ部屋だ。故に二人っきりの時間などいつでも作れる。それが

大きなアドバンテージとなり、箒の心に余裕を与えていた。

（考えるだけ馬鹿らしかったな。私は一夏の幼馴染なんだ。余裕を持たなくてどうする）

ふふんと上機嫌で腕を組む。このアドバンテージは決して揺るがないだろう。それは鈴にしてもそうだし、セシリアやクラスメイトにしてもそうだ。

（まあ……あの地蔵はなんとかして欲しいと思うが。たまに動き出しそうで、少しだけ怖い）

投げられ地蔵グレートのことを思い出し、苦笑いを浮かべる箒。それでもその表情は、とても楽しそうなものだった。

「篠ノ之、答えは？」

「は、はいっ!？」

突然名前を呼ばれ、箒は素っ頓狂な声を上げる。

今は授業中。それも最悪なことに、山田先生の授業ではなく千冬が受け持つ授業だった。

「答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

直後、出席簿が箒の頭に叩き込まれた。ばしーん、と小気味のいい打撃音が響き、箒は頭を押さえて机に蹲った。

「……………」

教室の後ろの方の席。そこではセシリアがノートにシャーペンを走らせていた。しかし、まじめにノートを取っているというわけではない。書かれている文字は言葉になっておらず、意味のない線が無意識のうちにひかれていく。

（まずいですわ……今更あの方が何故！？）

直接の面識はないが、セシリアも鈴のことは知っていた。一月ほどだが梁山泊に下宿し、一夏と共に暮らしていたのだ。その時に知った。

セシリアと一夏が出会った時期に中国に帰った幼馴染。彼女は一夏にとって特別な存在だったらしい。

それでも中国にいるということから安心感を抱いていたが、まさかIS学園に転向してくると思わなかった。箒だけでも厄介だというのに、最強の敵の出現。この状況にセシリアは気が気でなかった。

（幼馴染。あの方や箒さんは一夏さんと長い間共に過ごしている。

それに対してわたくしは一月だけ……それはズルですわ！ 正々堂々と勝負なさい！）

なにがズルなのか、自分で考えていてもわからなかった。だが、それほどまでに動揺し、セシリアは取り乱していた。

もしも条件が同じだったら、一夏とセシリアが幼馴染だったら、その時は負けなйдらうと絶対の自信を持っている。だが、そんなも

のを持っていたところでもなにも意味はなかった。そう思ったところで、そう願ったところで、セシリアが一夏の幼馴染になれるわけではないのだから。

幼馴染というアドバンテージは思った以上に大きかった。

（しかも、代表候補生……）

ここ、IS学園には二十数名の代表候補生が存在している。けれど、一年生では四人しかいなかったはずだ。しかも、専用機持ちは一夏を抜かせば二人。

幼馴染の筈にはない、セシリアの大きなアドバンテージだった。なのに……

（専用機持ちって言っていましたわね……）

最悪だった。こちらの有利だった部分が潰され、万策が尽きる。それでもセシリアは策を巡らせ、この状況を何とか打破しようと考える。

（なにか決定打になるようなこと……わたくしがリードするには……）

「オルコット」

声がかけられた。けれど、セシリアはそれに気がつかない。

「……例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効果的な……」

「……………」

直後、千冬の出席簿がセシリアの頭部に叩き込まれた。セシリアは頭を押さえ、痛みに悶絶する。

＋＋＋

「お前の所為だ！」

「あなたの所為ですは！」

「なんでだよ……」

昼休み、箒とセシリアが理不尽な文句を一夏に向けてきた。

この二人は午前中の授業だけで山田先生に注意を五回も受け、千冬には三回も叩かれている。その全てが一夏の所為だというのはあまりにも理不尽過ぎる。

「まあ、話なら飯食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……ま、まあお前がそう言うのならいいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

「そうか、それならいいや。二組に行って鈴を誘ってこよう」

「ちょっと待て一夏！」

「ごめんなさい、わたくしが悪かったですわ」

さっきの意趣返しも含め、一夏はあっさりと引く。そうすると箒は慌てふためき、セシリアは素直に頭を下げてきた。

一夏はニヤニヤとした笑みを浮かべ、結局は箒とセシリアと共に食堂に向かう。券の販売機では日替わりランチを購入した。リーズナブルな価格で毎日違うものが食べられるので、学食ではほとんどこれを注文している。

ちなみに箒はきつねうどんで、セシリアは洋食ランチの券を買っていた。

「待ってたわよ、一夏！」

注文の列に並ぶ。するとそこに鈴がいた。多少髪が伸びたが、昔と変わらない佇まい。

立ちふさがるようにそこにいたので、一夏は軽いため息を吐く。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

鈴が一夏の前からどく。一夏はなんとなく鈴が持っていたお盆、それに乗ってるラーメンを眺めてつぶやいた。

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！ 大体、あんたを待ってたんでしょが！なんで早く来ないのよ！」

「いや、そっちが来るんじゃないのか？ またあとで来るなんて言ってたが、結局来なくってもう昼休みだぞ。なにしてたんだ？」

「う……クラスメイトに捕まってたのよ」

「そうか、代表候補生で専用機持ちだからな。質問攻めにでもなったか？」

「まあね」

転校生というのはただでさえ目立つ。それに代表候補生で専用機持ちという看板が付けば尚更だ。

一夏には鈴の気持ちが痛いほどに理解できた。別に転校生や代表候補生ではないが、世界で唯一ISを動かせる男で専用機持ちだ。注目度は鈴の非ではない。気苦労を労いつつ、一夏は食堂のおばちゃんに券を渡した。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。あんたは……どうせ、しょっちゅう怪我してるんでしょね」

「ああ、梁山泊の修行は容赦ないからな。今じゃ剣術の他に柔術、中国拳法をやってるよ」

「えっ、てことは秋雨さんと馬さんに？ 一夏、あんた今までよく生きてたわね」

「ホントにな……」

一夏は遠い目つきをする。一体、何度死にそうな目に遭ったことか。

「あー。ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！ 一夏さん？ 注文の品、出来てましてよ？」

箒とセシリアが大袈裟に咳き込み、一夏は出されたランチに視線を向ける。

今日は鯖の塩焼き定食だった。この間食べた時に気に入ったので、これは嬉しい。

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

昼時となると混む学食だが、運良く全員が座ることの出来る席を見つけることが出来た。

一夏達はそこに向かい、テーブルにお盆を置いて腰を下ろす。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？ おばさん元気か？ いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。あんたこそ、なにIS使ってるのよ。ニユースで見た時びっくりしたじゃない」

「あゝ、やっぱり中国にもニユースで流れたんだな。日本じゃ毎日のように取り上げられてたし」

一年ぶりということに積もる話が多々あった。やはり、幼馴染の空白期間というのは気になるものだ。箒のときもそうだった。

このまま鈴との会話を続けようとしたところで、その箒とセシリアが間に入ってきた。

「一夏、私達を忘れてないか？」

「そうですね。そろそろ話を進めませんか？」

「ん、ああ、そうだな、悪い。とはいえ知ってるだろ？ 俺のサード幼馴染の凰鈴音だ。もっとも俺は縮めて鈴って呼んでるけどな」

「よろしくね。で、一夏。気になってたんだけどこの人達って誰？」

「ん、ああ。前に話したろ？ こっちが篠ノ之箒。小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘。小四の終わりごろに転校しちゃったんだけどE.S学園で再会したわけだ」

「ふうん、そうなんだ」

鈴はじろじろと箒を見る。箒は負けじとそんな鈴を見つめ返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

（仲良くやれそうだな）

交わされる挨拶。何事も礼儀は大事だ。これならばうまくやれるだろうと、一夏はうんうんと頷いた。

一瞬だけ、二人の間で火花が散った気がしたが、それは気のせいだと信じたかった。

「で、こっちがセシリアだ。鈴も代表候補生なら知ってるよな？」

「よろしくお願いしますわ。中国の代表候補生、凰鈴音さん」

「……誰？」

今度はセシリアの番だ。一般人ならともかく、同じ代表候補生なら知っているかもしれないと思ったが、鈴の反応はともそっけないものだった。

そういえば鈴はこんな性格だったと、一夏は今更ながらに思い出す。

「なっ！？ わ、わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？ まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

怒りで顔を真っ赤にするセシリア。こういう話の振り方はまずかつたかと後悔する一夏だが、既に後の祭りである。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

嫌味などではなく、素で得意気な言い方をする鈴。けれどそれは、セシリアの怒りを煽るには十分すぎる発言だった。

「い、言ってくれますわね……」

セシリアはわなわなと震えながら拳を握り締める。なのに鈴は何食わぬ顔でラーメンをすすっていた。

（さて、この状況をどう宥めるか……）

一夏は頭を悩ませる。

「一夏」

「ん？」

すると、鈴が声をかけてきた。一夏はあっさりとそれに乗る。こういった空気は、話題を変えることに限る。

「言っただじゃない、あんたがクラス代表って」

「おう、成り行きでな」

「ふーん……」

鈴はどんぶりを持ってごくごくとスープを飲む。これも昔からのことであり、一夏は小さくため息を吐いた。

「何度も言ったがレンジ使え」

「女々しいからイヤ」

「女々しいって、お前女だろうが。もったいない、そんなに可愛いのに」

「か、可愛い……」

鈴が顔を赤く染める。やはり女性は容姿を褒められると嬉しいのだろつ。そう一夏が考えていると、箒とセシリアから鋭い視線が突き刺さってきた。一夏にはその理由が理解できず、冷や汗を掻きながら原因を考える。考えるが、いくら考えても一夏が原因を思いつくことはなかった。

「でさ、さっきの話の続きなんだけど……あたしがISの操縦、見てあげてもいいけど？」

鈴は今更ながらにレンゲを使い、ラーメンのスープを飲んでいた。飲みながら一夏に声をかける。

「申し出はありがたいんだが……」

それを、セシリアにもした問答で断ろうとする一夏。が、鈴の申し出を退けたのは一夏ではなく箒とセシリアの二人だった。

「お前には関係ない。これは一組の問題だ！」

「あなたは二組でしょう！？ 敵の施しは受けませんわ」

（顔怖つ……二人とも、そこまでクラス代表戦に燃えてるんだな。俺も頑張らないとな）

机を叩いて立ち上がる二人を見て、一夏は的外れなことを思っていた。

「あたしは一夏に言ってるの。関係ない人は引っ込んでてよ」

「関係ないのはそつちだ！」

「そうですね。一夏さんは一組の代表ですからこれは一組の問題。なにを後から出てきて図々しいことを……」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！ それに、一夏は何度もうちで食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに長い」

白熱する言い争い。だが、箒の言うとおりに一夏は何度も箒のお宅に世話になった。

ある事情で困つてた一夏と千冬に手を差し伸べ、毎日のように夕食に招待してくれたのが篠ノ之家の人だ。箒の父と母には本当に良くしてもらった。

「うちで食事？ それならあたしもそうだけど？」

ちなみに、鈴の家は中華料理屋だった。しかも安くて量が多く、うまいのだから梁山泊の面子とよく食べに行ったものだ。

また、修行後の数少ない癒しでもあり、今でも酢豚と杏仁豆腐の味は忘れられない。

「うまかったなあ……鈴の親父さんが作る酢豚。また食べたいな」

「いつ、一夏！っ！ どういうことだ！？ 聞いてないぞ私は！」

「わたくしもですわ！ 一夏さん、納得のいく説明を要求しますわ！」

「説明も何も……幼馴染で、よく鈴の実家の中華料理屋に行ってた関係だ」

正直に一夏が言つと、余裕の表情を浮かべていた鈴がむすつとした表情をする。

「な、なに？ 店なのか？」

「あら、そうでしたの。お店なら別に不自由なことは何一つありませんわね」

対する筈とセシリアは、安堵の表情を浮かべていた。

「それなら、わたくしが一番一夏さんとの関係は深いですね。なにせ、一つ屋根の下で一緒に暮らしましたもの」

「一夏！？」

鈴の鋭い視線が一夏に向けられる。獰猛で、茨のように刺々しい視線だった。それに表情を引き攣らせ、一夏は必死に弁明する。

「一つ屋根の下つて、離れだろうが。確かに渡り廊下の屋根でつながってはいるが……基本、美羽と同じ部屋だっただろ？」

セシリアは一時期、梁山泊の保護下にいた。その際に梁山泊に一月ほど下宿していたのだが、梁山泊内の建物は母屋と離れ、そして道場と三つの建物で分かれている。

一応渡り廊下でつながってはいるが、一夏の部屋があるのは秋雨達と同じ離れの方であり、セシリアが泊まっていたのは母屋、美羽の

部屋だった。故に一つ屋根の下という言い方には語弊があった。

「なんだ、そういうこと」

「それなら私の方が上だな。なにせ今現在、私と一夏は同じ部屋だからな」

一安心する鈴と、張り合う箒。またも鈴とセシリアの鋭い視線が一夏に向けられ、一夏は疲れたように肩を落とした。

「どういうことよ一夏！」

「その噂は存じてましたが……まさか本当だったとわ。一夏さん、納得のいく説明を求めますわ！」

「いや、俺の入学ってかなり特殊なことだったから、別の部屋を用意できなかったんだと。だから仕方なく、今は箒と同じ部屋でだな……」

「仕方なくだと!? 一夏、お前は仕方なくで私と同じ部屋にいるのか!?!」

「だあつ! なんでそこで箒が怒るんだよ!? 話が進まないから少し黙ってる!」

「そ、それってつまり、今の一夏はこのこと寝食を共にしてるってこと!?!」

「まあ、そうなるか。でも、箒が相手に助かってるっちゃ助かってるんだぜ。これが見ず知らずの相手だったら緊張して寝不足になっ

ちまっからな」

「……………」

「……………」

混沌する場。それでも一夏の言葉に無言となった鈴とセシリアを見て、一夏はやっと納得してくれたのかと安堵する。

筈は先ほどは不機嫌そうな表情をしていたが、今の一夏の言葉にまんざらでもなさそうな表情をしていた。

コロコロと表情を変え、忙しそうな三人だった。

「……ったら、いいわけね……」

「……………く、いきませんわ……」

「うん？ どうした？」

俯き加減の鈴とセシリアがなにかを言ったが、一夏はそれを聞き取ることが出来ず、耳を傾けて問い返す。すると二人は同時に顔を上げ、怒声交じりに叫んだ。

「だから！ 幼馴染ならいいわけね!？」

「納得いかないと云ったんですわ!!!」

「うおっ!？」

思わず仰け反ってしまう一夏。だが、二人はそんな一夏をお構いなしに言葉を続けた。

「というわけだから、部屋代わって」

「そうですわ」

「ふざけるなっ!!」

雰囲気は一気に険悪なものへとなる。まさに三つ巴の状況だった。

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？ 気を使うし、のんびりできないし。その辺、私は平気だから変わってあげようと思っただけ」

「べ、別にイヤとは言っていない。それに一夏も私と同室で助かっていると云っただろう。それに、これは私と一夏の問題だ。部外者に首を突っ込んで欲しくない！」

「部外者じゃありません。むしろ関係者ですわ」

（なんの関係者だ、なんの……）

セシリアの言葉に疑問を感じる一夏だったが、決して口には出さなかった。なぜならとてもめんどくさいことになりそうだったから。今は三人の口論を聞き流し、鯖の身をほぐすことに集中した。

「大丈夫。あたしも幼馴染だから」

「わたくしは、えっと、その……そう、一夏さんとはご友人という間柄で……」

「それはここにいる全員が当てはまるだろ。って、そうじゃなくて、それが同室になるのになんの関係があるというんだ!？」

味噌汁をすする。やっぱり味噌汁は豆腐だと思いながら、次はご飯を食べる。白米を食べ、日本人で良かったと場違いなことを考える。

「このまま言い争っても埒が明かないわね」

「そのようですわね」

「そうだな」

鈴達が互いに頷き合う。険悪な雰囲気が漂い、一夏は居心地の悪さを感じた。

それでも昼食を食べ続ける。食事は体の資本でとても大事だし、何よりこの程度のことです事をいちいち中断しては馬鹿らしかった。

「一夏に決めてもらいましょうか。誰と同室がいいのかって」

「その方が後腐れもなくってよろしいですわね」

「一夏、当然私だな？」

三人の視線が同時に一夏に向いた。ポリポリと漬物を食べながら、一夏は呆れたように言う。

「俺に振るなよ……」

そもそも、三人は部屋のことですこんなにも激しい言い争いをしていくのだろうか？

一夏にはその理由が理解できず、頭に頭痛のような痛みを感じていた。半分が優しさで出来ている錠剤が欲しい。ほぐした鯖の身を口に運ぶ。おいしい。が、なにかが物足りなかった。

「酢豚食べたいなあ」

酢豚が食べたい。鈴が転校してきたからか、あの味をよく思い出す。鈴の父親の酢豚は本当に絶品だった。

「そういえば鈴、親父さんは元気にしてるか？ まあ、あの人は病気とは無縁そうだけどな」

「あ……うん。元気……だと思う」

「？」

言葉の歯切れが悪い。普段の鈴なら話を逸らしたことに激怒しそうだったが、それをせず、俯き加減でそう答えた。その様子に、一夏は違和感を覚えた。

「話を逸らさないでください！」

「そうだぞ一夏！」

鈴は激怒せずとも、筭とセシリアが激怒した。怒りの視線を真っ直ぐに一夏に向けてくる。

「酢豚って言えば一夏、約束覚えてる？」

「約束？」

「おい！」

そこで、鈴が割って入った。大きなアドバンテージを思い出したように、不敵な笑顔を浮かべて問いかけてくる。  
箒とセシリアが睨んでいるが、そんな視線など気にしない。

「鈴、約束って言うのは」

「う、うん。覚えてる……よね？」

チラチラと、上目遣いで一夏を見上げる鈴。心なしか、恥ずかしそうな表情をしていた。

「酢豚で約束というと、えーと、あれか？　鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を……」

「そ、そうっ。それ！」

一度、響に約束の場面を邪魔されたことがあったが、日を改め、別の日にそんな約束を交わした気がした。

「……奢ってくれるってやつか？」

「……………はい？」

「だから、鈴が料理出来るようになったら、俺にメシをご馳走してくれるって約束だろ？」

次の瞬間、鈴の平手が飛んできた。一夏は思わずそれを受け止めてしまう。流石は梁山泊の修行。咄嗟の攻撃に対処する術は万全だった。

「受け止めるな！」

「鈴……？」

だが、これはまずい。今回ばかりはそれが悪い方に作用した。

鈴は体を震わせ、今まで見たことがないほどの形相を一夏に向けていた。それと同時に怒りと相反する感情、悲しみを浮かべている。泣いているのだ、あの鈴が。いつも笑っていて、笑顔がまぶしいと感じるほどの鈴が泣いている。その原因はまがうことなく一夏である。

「最つつつ低！ 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けない奴！ 犬に噛まれて死ね！」

「あ、おい、鈴！」

鈴は一夏の腕を振り払い、食べ終えた食器を片付けすらずに学食を後にした。

そう、ここは学食だ。今までの口論や騒ぎは全て周りの生徒に聞こえており、一夏に向けられる冷やかな視線。それと同じものが、箒とセシリアからも放たれていた。

「一夏さん、一度死んだ方がよろしいのではなくって？」

「そつだな。馬に蹴られて死ね」

二人の冷たい言葉が一夏に突き刺さる。まったくそのとおりだった。理由がわからないが、鈴を泣かせたのは一夏自身。そのことにずきりと胸が痛んだ。

昼休み終了のチャイムが鳴る。一夏は自分の分と鈴の食器を片付け、教室へと戻った。その道中、これからどうするべきなのか頭を悩ませた。

＋＋＋

午後の授業中、ずっと考え続けて一夏の出した結論。それは……

「もしもし、馬さんですか？」

「あいやゝ、いつくんかね？ おいちゃんに電話してくるとは珍しいね。どうね、IS学園の方は？」

他者への相談。放課後に屋上へ赴き、携帯電話を使って馬に電話をする。梁山泊内ではこういった話に一番詳しく、適しているだろう馬を選択した。

馬は長老の隼人を除外すれば、梁山泊の豪傑の中で唯一の既婚者だ。しかも娘もいるらしい。わけあって中国に妻と娘を残してきているらしいが、それ故に人生経験はいろいろと豊富だ。若いころは美形で女性にもモテたらしい。もっとも現在は、頭頂部がとても悲しいことになっているが……

「いろいろ苦勞しています。ところで馬さん、相談があるんですが……」

「なんね、いつくんも人並みに恋のお悩みかね？　おいちゃんに話してみるね」

「はは、そんなんじゃないんですけど……」

一夏は苦笑を浮かべつつ、馬に全てを話した。鈴が転校してきたこと。その後のやり取り。学食での騒動。全てを話し、それを聞き終えた馬からは深いため息が吐かれる。

「いつくん、それ、本気で言ってるね？　もし本気なら、お友達の言うとおり一度死ぬべきね」

受話器越しに馬のため息を聞き、一夏は苦々しい表情をした。やはり悪いのは自分なのだと再度理解し、馬にどうするべきなのか指示を仰ぐ。

「とりあえず、いつくんは自分がどんなことを理解したのか知るべきね。じゃないと鈴ちゃんがかわいそうね」

「ごもつともです……でも、あいにく俺には理由が皆目見当も……」

自分が悪いとは理解している。名の師その理由がわからない。それが一夏クオリティ。

朴念仁、唐変木などと呼ばれる所以だ。

「こういったことは自分で気づくべきであって、おいちゃんが言うべきじゃないけど……いつくんの場合は誰かが教えないと一生理解しないだろうから、この際言うね。いつくんは日本の典型的なプロボーズの台詞に『毎日味噌汁を』は知ってるね？」

「それはもちろん。前にアパチャイと一緒に昼ドラとかで……え？」

「気づいたね？　鈴ちゃんはそのを酢豚でアレンジしただけに過ぎないね」

「えええええええええええええええええつ！？」

馬の言葉に、一夏の絶叫が響き渡る。今更言葉の意味を、鈴の気持ちを理解し、一夏の頭はオーバーヒートするほどに混乱していた。

「ちよ、ちよ……待ってください。約束したのは、確か小学校の時ですよ!？」

「小学生だからそういった約束を気軽にしちゃったりもするね。でもその気持ちは純粹で、とても繊細なものね。いっくんはそれを踏み躪ったね」

「うっ……でもそれって、そういうことなら」

それでも一夏は考える。考えに考えて、極限までに頭脳をフル稼働させた。

その約束が意味をすること。そして何より、鈴の気持ち。

「それって、鈴が俺のことを好きってことじゃ……」

「今更気づいたのかとしか言えないね」

馬の言葉を理解し、一夏は自分で自分の頬をぶん殴る。手加減はせず、本気で殴った。

好きでもない相手にプロポーズのような約束をするわけがない。し

かも、小学校の時にしたそれを今更持ち出すということは、鈴の気持ちは今も変わらないということだ。

それなのに一夏は踏み躪ってしまった、鈴の気持ちを。気づかなかったとか、理解できなかったというのは理由にならない。

「馬鹿だ……俺は」

ズキズキと頬に痛みが走る。それでも、こんなものは鈴の気持ちを考えればまだ足りないだろう。自分で自分を殺したいほどの怒りを、一夏は自分自身に向けていた。

「いつくんは鈴ちゃんのことをどう思うね？」

「嫌いじゃないです。むしろ、その……」

鈴のことは嫌いじゃない。鈴が帰ってきて、IS学園に転校してきたことは本当に嬉しかった。

何気ないやり取りを交わし、鈴が変わってないと理解して思わず笑みがこぼれた。

嫌いではない。鈴が側にいることで、一夏は安らぎのようなものを感じていた。

「でも、好きかって言うかどうかって話になって……正直、戸惑いが隠せないです。それに、俺はまだ高校生ですから……」

鈴は身近な存在だった。けど、身近ゆえに一夏はそういった対象として見ていない。見る事が出来なかった。

鈴とは幼馴染、友達のような感覚で付き合っていたのだ。それをいきなり異性として見ることに、少なからずの違和感を感じてしまう。約束の意味に関しても、プロポーズだとか結婚は高校生の一夏にと

つては早すぎる話だ。

「そこまで重く考えなくてもいいね。恋愛とはもっと気軽に、気楽に考えるものね」

そんな一夏に、馬からは軽い声かけられた。微笑ましそうな笑みが携帯電話から聞こえてくる。

「それにいつくんも鈴ちゃんも若い。これもまた経験ね」

「でも、俺は、鈴を……」

一夏だつて男だ、彼氏、彼女の関係に興味がないかといえは嘘になる。彼女が欲しいと思ったことだつてあるし、性欲も存在する。

それでもまだ、一夏に戸惑いがあるのは事実。鈴を怒らせ、悲しませたことをまだ引きずっていた。

「その点に関してはおいちゃんに策があるね。とっても良い策なんだけど……聞かかね？」

一夏には打開策が思い浮かばない。だから、選択肢は選ぶまでもなかった。

迫るクラス対抗戦。一夏の所属する一組の相手は二組。つまり鈴だった。

## BATTLE 1 クラス対抗戦（前書き）

鈴ルートに入っている展開に作者自身も驚きです。でも、鈴は可愛いですよね、個人的にはISで一番好きなキャラです。  
一夏無双始まります。

## BATTLE 11 クラス対抗戦

「<sup>シェンロン</sup>甲龍ねえ……ウーロンのあの願いを叫びたくなるなあ」

「一夏、あんた馬さんにいろいろと悪影響受けてんじゃないの？」

「まあ、自覚はある。けど、なんだかんだでとても頼りになるんだぜ」

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と鈴。初戦から示し合わせたような組み合わせに一夏は内心で笑みを浮かべる。視線の先では鈴とそのIS、とある大人気漫画に喧嘩を売っている。しかし思えない名前の甲龍が試合開始の時を静かに待っていた。セシリアのブルー・ティアーズ同様、非固定浮遊部位が特徴的だ。肩の横に浮いた棘付き装甲がやたら攻撃的に魅せてくる。

（あれで殴られたら、すげえ痛そうだな……）

内心でつぶやきつつ、一夏は改めて段取りを確認した。馬に与えられた策。それを今一度頭の中で整理する。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、一夏と鈴は空中で向かい合う。その距離は五メートル。正面から向かい合っており、先日のことあつて嫌でも意識してしまう。

（落ち着け……落ち着け、俺。冷静になるんだ……）

柄にもなく、胸が早鐘のように鼓動を打つ。馬に言われるまで気づかなかったが、鈴は一夏に好意を向けている。それを知り、昔から知っているはずの鈴がまったくの別人に見えていた。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げたあげろよ」

鈴が言葉をつむぐ。粗暴で棘のある言葉だったが、形の良い朱色の唇からつむがれた言葉は一夏を変な気分させる。息を呑み、心を落ち着けて一夏は言った。

「なんで俺が？　むしろ謝るのは鈴、お前の方だろ？」

「はあ!？」

まずは責任を鈴に押し付ける。それが馬の与えた策だった。

鈴の眉が吊り上り、怒気を孕んだ鋭い視線が一夏に向けられる。鈴が怒っている理由を理解しているために、一夏には罪悪感が芽生えた。だけど、ここまで来てしまえばもう後戻りは出来ない。

ここからは個人間秘密通信での会話を忘れない。もし、この話を赤の他人に聞かれたら悶絶ものだ。一夏は通信関連の操作は苦手だったが、このために千冬との訓練の合間に練習し、習得した。

『そもそも、普通あんなところで言うか？　学食で言われても、正直返答に困る』

学食にはセシリアと筈の他にも、そこを利用している他者の視線があった。そんなところで、そんな気恥ずかしいことを言えるかというのが一夏の弁だ。

『あう……それはそうかもしれないけど……って、一夏。約束の意味ちゃんと理解してるの!?!』

『まあな』

内心で謝る。『ごめん、嘘』と。何度も言うが、馬に言われるまで鈴の好意には気づかなかった。約束の意味なんて理解しているわけがない。ただここはあえて、気づいていたように振舞う。

『約束はちゃんと覚えてるぜ。そして鈴の気持ちもちゃんと理解している。その……正直、すごい嬉しいよ』

『あ、あうあ……』

ポリポリと、頬を掻く動作をしながら言う一夏。これ以上ないほどに気恥ずかしい。

だが、鈴は一夏以上のようで、顔を真っ赤にしながら意味を成さない言葉を呻いている。

『でもな、俺も鈴もまだ十五歳で高校生なんだ。その話は早いつて言うか、重いつて言うか……戸惑いが隠せない。鈴は幼馴染で、今までそういった対象としてみていなかったのも理由かもしれない』

『……………』

けれど、続けられた一夏の言葉に鈴の表情がとても悲しそうなものに変化した。表情が沈んでいく。もっともそれは、一夏の次の言葉を聞くまでのことだったが。

『だからそんなに重く考えないで、もっと気楽に付き合ってみるの』

はどうかって思っんだ』

『え?』

鈴の顔ががばつと上がる。呆けたような表情で一夏を見つめていた。その顔が思った以上に面白い。

『それでは両者、試合を開始してください』

アナウンスが試合の開始を告げる。ビーツと鳴り響くブザーの音。だけど一夏と鈴は動かない、空中で見詰め合ったまま、プライベート・チャンネルでの会話を続けていた。

『ちゃんと手順を踏むべきと言うか、物事には順序があると言うか……それに、こういったことは男から言うべきだろ?』

一夏ははにかんだ笑みを浮かべ、自分の気持ちを真っ直ぐ鈴に伝える。

『だから、俺がこの試合で勝ったら、毎日昼飯に弁当を作ってくれないか?』

『え、ええっ!?!』

『言い換えるなら、俺の彼女になってくれてことだ』

「ええええええええっ!!」

鈴が叫びを上げる。思わずプライベート・チャンネルを切ってしまうほどに衝撃的だったのだろう。

一夏はにやりと笑い、馬の策がうまく言ったことを確信し、プライベート・チャンネルを切る。

「俺が勝つたらの話だ。もう試合は始まって。いくぜ、鈴！」

あとはこの試合に勝つだけ。一夏は雪片二型を構え、未だに呆然としている鈴に肉薄した。

＋＋＋

「あら、散々言ってた割には鈴さんの動きはたいしたことありませんわね」

「あれは……動揺しているのか？」

ピットからリアルモニターを見ていたセシリアと箒がそれぞれの感想を漏らす。

一夏の雪片式型と鈴の武器、青竜刀が激しい打ち合いをしている。一見すると互角に見えるが、鈴の動きはどこか繊細さを欠いているように見えた。それは代表候補生というにはあまりにもお粗末な動きだ。

「動揺？　そういえば一夏さんと鈴さんは試合前に何かを話していましたが、それが関係しているのかしら？」

「だろうな。だが、一夏と鈴は一体なんの話をしたんだ？」

セシリアと箒は同時に首を傾げる。もしもこの二人が、一夏と鈴の

会話を聞いていたら果たしてどのような反応をするだろうか？

「なににせよ、このまま押し切ってしまえば一夏さんの勝利は間違いないですねわ」

「ああ、そのまま叩き込め、一夏」

一夏の応援をする二人。彼女達が会話を聞いていたら、このように一夏の勝利を願うこともなかっただろう。

十十十

「このつ、なんで……」

鈴は冷静さを欠いていた。最初こそ激しい打ち合いを演じていたが、自体は徐々に悪い方向へと傾いていった。

一夏の修めている香坂流とは日本刀から手裏剣、槍からトンファーまで様々な武器に精通している流派。その中でも一夏は剣術を得意としている。そんな一夏と真正面から打ち合うのは、如何に鈴が代表候補生とはいえ分が悪い。

更に鈴が苦戦している理由は、一夏が激しい打ち合いから一撃離脱戦法に切り替えたこと。冷静さを欠いているために鈴の攻撃は次第に大振りとなり、避けるのを容易にしていた。その隙を突き、一夏は確実に鈴に攻撃を当てる。そうやって、確実に鈴のシールドエネルギーは削られていった。

「どうした、鈴。動きが鈍いぞ」

「うつさいわね……そんなこと、言われなくても分かってるわよ！」  
思ったように動けない。そのことに対する苛立ちが募り、一夏の問いかけに対し乱暴な口調で返してしまう。

後悔の念を抱き、それを振り払うように青竜刀を振るう。バトンでも扱うかのように回転させ、一夏に突っ込んだ。だが、一夏はそれさえも避ける。青竜刀をやり過ごし、隙について逆に鈴の胸元に突っ込む。

あまりにも決定的な隙。やられる、そう思い、鈴の動きが鈍った。それに対して一夏の取った行動、彼の攻撃は……

「あだっ!？」

デコピンだった。雪片式型を使わず、デコピンを鈴に叩き込む。しかもどういった原理かシールドバリアーを衝撃が抜け、直接鈴に痛みが走る。

絶対防御は攻撃が通っても操縦者の生命に別状ない場合は作動しない。デコピンで人が死ぬことはないだろうが、それでもかなり痛かった。

「一夏！ あんたふざけてんの!？」

鈴は額を押さえ、涙目になりつつ一夏を睨む。

「まさか。大真面目だ。少なくとも鈴よりはな」

当の一夏はそんな視線をものともせず、平然と言い切った。そして、そのまま言葉を続ける。

「まさか、中国の代表候補ってのはその程度なのか？」

「そ、そんなわけないじゃない！」

「だよな。なら本気を出せよ。じゃないと、あっさり落としちゃうぜ」

「あんたはあ……」

ブルブルと鈴の肩が震えていた。あまりにも軽い一夏の物言いに、理不尽ながらも怒りが爆発してしまった。

「なんでそんなに平然としてんのよ！？ あたしがどんな気持ちなのかも知らずに……この馬鹿一夏！」

「馬鹿はないだろ、馬鹿は。それでも結構頭を悩ませたんだぜ。ひよつとして、さっきの約束が嫌だったのか？」

「へ……？」

激情に任せて怒鳴る鈴だったが、予想だになかった一夏の切り返しに啞然としてしまう。

「そうか……そうだよな。あまりにも一方的だったからな。嫌なら仕方がない。鈴、さっきのことは忘れてくれ」

「ちょ、まっ……別に嫌だなんて言っていないでしょ！」

「そうなのか？」

「そうよ。いいじゃない、乗ってやるわよその話！ あたしが負け

たらあんたの彼女になつてやるわよ！！ 絶対にあたしが勝つけどね！」

慌てて言葉を発した鈴は、もはや自分がなにを言ってるのかさえ理解できなかった。カッとなり、感情の赴くままに叫んでしまった。

「そうか。なら、こつちも本気で行くからな」

「当たり前じゃない。こつちも、ここからは本気で行くわよ！」

もはや後戻りは出来ない。鈴は自棄になりつつ、それでも先ほどとは打って変わった動きを披露する。おそらくは吹っ切れたのだろう。

「はあああ！」

青竜刀一閃。それを僅かに後退してかわす一夏。本当に僅かな距離だが、距離が開いた。それは鈴の欲しかった距離。この距離では鈴自身も巻き込まれるかもしれないが、それでもこの好機を逃すつもりはない。

「ぐはっ！？」

鈴のISの肩のアーマーがスライドして開く。中心の球体が光った瞬間、一夏は見えない衝撃に吹き飛ばされた。

鈴もその衝撃に巻き込まれるが、一夏と比べるとその被害は軽微。そして更に開いた距離。これでこちら側が被害を受けることはもうないだろう。

そして一夏は雪片式型以外の装備を有していない。この距離は鈴を有利にさせる。

「これからたつぷり、龍咆<sup>りゆうほう</sup>をお見舞いしてあげるわよ！」

龍咆。それは一般的に衝撃砲と呼ばれる代物。空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、余剰で生じる衝撃を砲弾化して撃ち出す。その上、龍咆は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴だ。

セシリアのブルー・ティアーズと同様の第三世代型の兵器だ。それを鈴は連射する。

「うおっ、あぶねえ!？」

一夏は回避する。砲身も砲弾も見えないというのに、龍咆の連射を避けていた。

そもそも、最初に当たったのが出会い頭であり、鈴が自身を巻き込んでまでも砲撃を撃つてくるとは思わなかったからだ。来ると分かっていたればそれなりの対応を取ることが出来る。

声こそ慌てているように聞こえるが、二発目から一夏は余裕で回避していた。

「なんで避けられるの!？」

「いや、確かに砲身と砲弾は見えないけど、射線はあくまで真っ直ぐだし。ハイパーセンサーが空間の歪みと大気の流れを探ってくれるから、あとはそれに合わせて避けるだけだ」

「なんてデタラメなのよあんたは!？ ハイパーセンサーがあるからって、それでも撃たれてから分かっているようなものでしょう？ なのに回避するなんてどんな反射神経よ!？」

「これくらい出来ないと、俺は何度死んだことか……」

一夏は梁山泊での地獄の修行を思い出す。銃弾よりも恐ろしいしぐれの手裏剣。視認不可能なほどに速いアパチャイの拳。秋雨の怪しい発明。死にかけた時は馬の怪しげな漢方によつての復活。そして何より、ここ最近の世界最強の姉によつて特訓をさせられていたのだ。

この程度のが出来るのは当然であり、出来なければその時点で一夏は死んでいたことだろう。

「デタラメなのはあんたじゃなくて、あの人達なのね……」

「ははは……」

鈴の言葉に一夏は苦笑をもらす。その間も龍砲は放たれ続け、一夏はそれを回避していた。だが、このまま回避し続けても埒が明かない。一夏の武装は雪片式型のみ。他にも中国拳法と柔術を修めているが、接近しなければ話にならない。

一夏が勝利するためには、こちらから仕掛ける必要がある。

「いくぜ鈴！」

「なっ……」

そして、一夏が仕掛けた。鈴への特攻。それは愚策としか思えなかった。真っ直ぐ突っ込むのはいい的であり、代表候補生の鈴がそんな好機を逃すはずがない。突っ込んでくる一夏に向け、龍砲を放つ。直撃。龍砲は確かに一夏に命中した。命中したのだが……

「捕まえた」

龍砲の直撃を受けつつ、一夏は鈴の元に接近した。シールドエネルギー

ギーが大幅に削られ、絶対防御が作動したがそれでも一夏は怯まない。鈴の手首をつかみ、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「流石に直撃は結構痛かったけどな」

「訂正するわ……あんたも十分にデタラメよ」

鈴の表情が引き攣る。つかんだこの手は絶対に放さない。一夏はそのまま、柔術の技に移行しようとしたところで……

「!？」

轟音がアリーナ全体に響き渡った。隕石でも落下してきたかのような轟音。落ちた場所はステージの中央。もくもくと煙が上がっており、その姿を確認することは出来ない。どうやらそれは、アリーナの遮断シールドを突き破って入ってきたらしい。

「なんなんだ、一体……」

状況が理解できず、混乱する一夏。そんな彼に鈴の声が飛んできた。

「一夏、試合は中止よ！　すぐにピットに戻って！」

いきなりなにを言い出すのか。そう思った瞬間に一夏の背筋に嫌なものが走った。ついで、ISのハイパーセンサーが緊急通告を行ってくる。

<ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています>

「なっ……」

乱入してきたものはISだった。しかもアリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている。それを貫通するだけの攻撃力を持った機体が乱入し、こちらをロックしている。そんなものが直撃すればただではすまないだろう。つまり、ピンチだった。

「一夏、早く！」

「鈴、お前はどうするんだよ!？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「アホか。そんなことできるわけないだろ！」

「アホってなによ、アホって！ あんたはまだISの素人でしょうが！」

「さっきまでお前は誰と戦っていた!？ その素人に追い詰められてたのはどこのどいつだ!？」

「う、それは……」

一夏と鈴は口論を始める。敵を前にして、それはあまりにも愚かなことだった。

乱入した機体は狙いを鈴に定める。一夏同様、彼女もロックされていたのだ。

「あぶねえっ!!」

鈴の体を抱きかかえ、間一髪で回避する。先ほどまでいた空間は、熱線で焼き払われていた。

「ビーム兵器かよ……セシリアのISより出力が上だ」

一夏はハイパーセンサーの簡易解析でその熱量を知る。それは前に訓練で見たセシリアのビーム兵器の出力を優に超えていた。

「ちよつ、ちよつと、馬鹿！ 離しなさいよ！」

「お、おい、暴れるな。……つて、馬鹿！ 殴るな！」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！」

一夏に抱きかかえられ、いわゆるお姫様抱っこをされている鈴は気恥ずかしさのあまり一夏の腕の中で暴れていた。

「だ、大体、どこ触って……」

「あゝ、うん。鈴ってスレンダーだけど、ちゃんと女らしい体つきしてるんだな」

「死ねえええ！」

「ぐふっ……つて、あ、来るぞ！」

もう一発鈴の拳を喰らいつつ、一夏は再び飛んできたビームを回避する。

今のビームによって煙が払われ、ISがふわりと浮き上がってくる。

「なんなんだ、こいつ……」

姿からして異形だった。深い灰色をしたISはその手が異様に長く、爪先よりも下まで伸びている。しかも首がない。肩と頭が一体化しているような形状をしていた。

そして、何より特異なのが『全身装甲』<sup>フル・スキン</sup>ということだろう。

通常、ISは部分的にしか装甲を形成しない。それは何故か。必要ないからだ。

防御はほとんどがシールドエネルギーによって行われている。だから、見た目の装甲というのはあまり意味を成さない。もちろん防御特化型ISで物理シールドを搭載しているものもあり、一夏の師であるしぐれも強固な装甲を纏っているが、それにしだって肌が一ミリも露出していないISなんて聞いたことがない。

そしてその巨体も、普通のISではないことを物語っていた。腕を入れると優に二メートルを超えている。かなりの重量がありそうで、姿勢を維持するために全身にスラスターク口が存在した。

頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には先ほどのビーム砲口が左右に合計四つあった。

「お前、何者だよ」

「……………」

当然といえば当然だ。なぞの乱入者は一夏の呼びかけには答えない。

『織斑君！ 鳳さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！

すぐに先生達がISで制圧に行きます！』

その代わり、山田先生からの通信が割り込んでくる。普段の頼りな

さそうな声とは打って変わり、その言葉には威厳があつた。

「えっと……山田先生。試合の方はどうなるんですかね？」

けど、一夏には納得がいかない。

『中止に決まつてるじゃないですか！ 織斑君、鳳さん、早く！』

「そうですか……」

鈴が試合は中止だと言っていたが、山田先生が正式に試合の中止を一夏に告げる。当然だろう、このような状況で試合を続行できるわけがない。

わかつていた。わかつていたことだが……

「千冬姉……アレ、落としていいかな？」

とても納得できそうになかった。怒りがふつつと沸いてくる。

『織斑君！？』

「一夏！？」

山田先生と鈴の驚きの声が同時に上がる。避難しろとのことだが、あのISは遮断シールドを貫通する攻撃力を有している。つまり、今ここで誰かが相手をしなければ、観客席にいる生徒に被害が及ぶ可能性があるということだ。

だが、一夏は言った。時間稼ぎではなく落とすと。

『織斑先生だ。いい加減にしろ』

「はいはい、織斑先生。アレ、落としますよ」

『はいは一回だ。ふん、それにしても大口を叩く。いいだろう、やつてみせる』

「ありがとうございます」

千冬の許可をもらい、一夏の表情に笑みが宿る。ニヤリとした不敵な笑みだ。

「一夏、いい加減に離しなさいよ！ 動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

未だに鈴を抱えたままだった。一夏が鈴を離すと、その瞬間に再びビームが飛んでくる。それを回避する。

「危なかった」

『織斑先生！？ 織斑君もダメですよ！ 生徒さんにもしものことがあったら……』

山田先生の心配そうな声が聞こえるが、それ以上聞く余裕はなかった。敵のISが体を傾けて突進してくる。それに対して、一夏も突進で応戦した。

靠撃。<sup>はいげき</sup>『うづげき』とも読む。

肩や背面部で突進する中国拳法の技。一夏はそれで、ニメートルを

越える敵のISを逆に弾き飛ばした。

「鈴、手は出すなよ。これは俺の獲物だ」

「一夏、無茶は……」

鈴が忠告するが、それは一夏には聞こえなかった。目の前の戦闘に集中する。心を高ぶらせ、臨戦態勢をとる。

＋＋＋

「もしもし！？ 織斑君聞いてます！？ 凰さんも！ 聞いてますー！？」

ISのプライベート・チャンネルは声を出さずとも相手に言葉を伝えることが出来る。だが、そのことを失念するくらいに山田先生は焦っていた。

「本人がやると言ってるんだ。やらせてみてもいいだろう」

「お、織斑先生！ さっきから何のんきなことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

千冬は平然を振る舞い、コーヒーにたっぷり白い粉を入れる。だが、この白い粉は砂糖ではなかった。

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「……………」

白い粉の入っていた容器を確認し、千冬の手が止まる。そしてポツリと疑問をもらした。

「何故塩があるんだ」

「さ、さあ……？ でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど」

「……………」

山田先生の言うとおり、塩の入っていた容器には確かに大きく『塩』と書かれていた。

「あつ！ やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？ だからそんなミスを……」

「……………」

イヤな沈黙が訪れる。山田先生はまずいと思い、話を逸らそうと試みた。

「あ、あのですねっ……………」

「山田先生。コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

が、その試みは失敗してしまう。千冬は先ほどのコーヒーを山田先生に差し出し、圧力をかけてくる。

「い、いただきます……」

ずずいと差し出されてくるコーヒー。塩がたっぷり入っているそれを、山田先生は涙目で受け取った。

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔だ。千冬の言葉に、山田先生は本気で泣いてしまいそうになる。

「千冬ちゃん、後輩をいじめるもんじゃないね」

「えっ……誰ですか？」

そんな山田先生をフォローする声がかけられる。だが、山田先生はその声に首を捻った。

聞いたことのない声だ。しかも、女性の声ではなく男性の声のように聞こえた。

さらに千冬のことをちゃん付けで呼ぶのはどんな人物だろうと山田先生が視線を巡らせると、いつの間にか帽子を被った中年男性がいる。千冬の背後。そこでキリツと真面目な視線をモニターに向けているが、その手はじりじりと千冬の臀部に伸びている。とてもいやらしい手つきで、わきわきと指が動いていた。

中年男性の手がもう少しで千冬の臀部に触れ、揉みしだこうとした

ところで千冬が振り返る。その手にはいつの間にか出席簿が握られており、それを中年男性に向けて思いっきり振り下ろした。

「久しぶりですね、馬さん」

「うん、久しぶりね。相変わらず元気そうね」

「あなたも相変わらずのようですね」

ビュンツ、と出席簿が空を切る。馬と呼ばれた中年男性はひよいひよいと千冬の出席簿をかわし、普通に会話を続けていた。

普段、教室などで振るわれる手加減された一撃ではなく、千冬本気の攻撃をかわし続ける馬。そのことがこの人物がただ者ではないということを証明している。千冬と親しそうに話していることから怪しい人物ではないだろうが、それでも山田先生は警戒して馬に問いかけた。

「あなたは誰なんですか？ どうしてここに？ そもそも学園にはセキュリティーが……」

「落ち着け、山田君。この人を前にそんなものは何の役にも立たない」

「って、ああつ！ おいちゃんの帽子が……」

千冬が更に鋭く、出席簿を一閃させる。それを身を屈めることで回避する馬だったが、出席簿は馬の帽子を切り裂いた。

ホントにアレは出席簿なのかと目を見張る山田先生。箒は一夏の弁ではしゃもじで斬鉄をする人物がいるらしいので、千冬なら出席簿で帽子程度は切りそうだとある意味納得していた。だが、この人物

が誰なのかは気になる。

「あの、織斑先生。この人は？」

山田先生と同等の疑問を千冬に向ける。千冬はコホンと咳払いをし、馬を紹介する。

「この人の名は馬剣星。中国拳法の達人だ。そして、一夏の師でもある」

「どうもね」

帽子がなくなり、見事な禿頭を晒す馬。彼はニカツと笑い、手を振って答えた。

## BATTLE12 決着！！

「で、なんで馬さんがここにいるんですか？」

「いつくんが試合だつて言うから見に来たね。弟子の成長は師としてやはり気になるものね」

「そうですか」

千冬の問いかけに馬は平然と答えるが、千冬にはそれだけとは思えなかった。鋭い視線を馬に向ける。

「なら、そのカメラはなんですか？」

「えっ、これかね？ こ、これは……そう、いつくんの勇姿を撮ろうと思つてね」

「そうですか。なら、写真を確認をしても構いませんね？ まさか、更衣室とかが写ったりしていませんよね？」

千冬の指摘に馬から冷や汗が流れる。試合は中止となったものの。今日はクラス対抗戦が行われていたために更衣室では数多くの女子が着替えをしていた。それは馬にとって格好の獲物だった。最新式のカメラ片手にさぞ激写をしていたことだろう。

「いやあ……千冬ちゃんは疑り深いね。そ、そんなわけないね……」

「なら、見せられないわけはありませんよね？ もし提出を拒むと  
いうのなら、そのカメラを破壊します」

千冬の言葉を最後まで聞かず、馬は駆け出した。カメラを守るようにしてこの場からの離脱を試みる。せつかく撮ったお宝だ。それを失いたくはないのだろう。馬は逃げる。だが、それを千冬は許さない。

「どこに行くんですか？」

馬の正面に回りこみ、退路を塞いだ。その手には凶器（出席簿）が握られている。

「後生ね、千冬ちゃん」

「そういうわけにもいかないんですよ。私はここの教員ですから」

馬からカメラを取り上げ、それを破壊する。カメラを破壊されたことにより、馬はがつくりと膝を突いた。その光景を見て、セシリアは冷ややかな視線を馬に向けた。

「剣星さんは相変わらずのようですね」

「久しぶりね、セシリアちゃん。そもそも、おいちゃんからエロを取ったら何が残るね？」

「ただ、駄目人間だという事実が残りますわ」

「トホホね……」

セシリアの言いように肩を落とす馬。もっとも問題は馬にあるわけで、言い返すことすら出来ない。

梁山泊関係者には女性の敵と見られ、冷やかな視線を向けられていた。

「織斑先生！ 暢気に談笑をしている場合じゃありませんよ！ 早くなんとかしないと……」

「さっきも言ったが、落ち着け。教師が取り乱してどうする？」

一夏と鈴の心配をし、あわあわと気が気でない様子の山田先生。彼女を落ち着けようとする千冬だったが、その千冬自身もどこか落ち着きがなく、そわそわしていた。

「先生！ わたくしにIS使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが……これを見る」

セシリアの申し出に対し、千冬はブック型端末を操作してある情報を見せる。それは数値化された情報で、この第二アリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル4に設定……？ しかも、扉が全てロックされて……あのISの仕業ですの！？」

「そのようだ。これでは避難することも、救助に向かうことも出来ないな」

ハッキングをかけられ、現在一夏と鈴は孤立していた。遮断シールドにさえぎられて助けに行くことが出来ない。

また、アリーナの観客席にいる生徒達も扉がロックされているために避難できず、閉じ込められている状況だ。これでは避難すること

が出来ず、被害が及ばないようにするにはロックが解除されるために誰かが時間を稼ぐ必要があった。その点に関しては、一夏の選択は正しいだろう。

だが、千冬は苛立ちと戸惑いを隠せず、ブック型端末の画面を指で何度も叩いていた。

「で、でしたら！ 緊急事態として政府に助勢を……」

「やっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」

言葉が続けながら、ますます募る苛立ちに千冬の眉がぴくりと動く。これ以上は危険だと判断し、セシリアは頭を押さえてベンチに座った。

「はああ……結局、待っていることしか出来ないのですね……」

「なに、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって!？」

千冬が何気ないことというその言葉に、セシリアは過敏に反応した。

「お前のISの装備は一对多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

「そんなことはありませんわ！ このわたくしが邪魔だなどと……」

「では連携訓練はしたか？ その時のお前の役割は？ ビットをどいう風を使う？ 味方の構成は？ 敵はどのレベルを想定してある？ 連続稼働時間……」

千冬の意見を否定しようとする。だが、更に続けられた言葉には流石のセシリアもぐうの音しか出なかった。

「わ、わかりました！ もう結構です！」

「ふん。わかればいい」

放っておいたら一時間は続きそうな千冬の指導を、セシリアは両手を挙げて止める。降参のポーズだ。げんなりし、深いため息を吐いた。

「はぁ……言い返せない自分が悔しいですわ……」

「元気を出すね、セシリアちゃん。千冬ちゃんはいつくくんが心配で言葉がきつくなってるだけね。まったく、少しは弟離れをすべきね」

「馬さん」

セシリアにフォローを入れる馬だったが、千冬にじろりと睨まれて肩をすくめる。

「それにいつくんは仮にもおいちゃん達の弟子ね。あの程度の相手に不覚を取らないように鍛えてあるし、ひとつ技を授けているね。そもそも、IS学園（いす）に入学してから千冬ちゃんがいつくくんの修行を見てるから、実力は把握しているはずね」

「……………」

今度はキリツと馬の表情が引き締まる。真剣な目付きでモニターを

眺め、一夏と敵ISの戦闘を見ていた。  
先ほどのやり取りが嘘のような真剣味に千冬も押し黙り、モニターに視線を向ける。そこでは敵ISを圧倒する一夏の姿があった。

――

「うおらああああっ！」

デタラメに長い腕を取り、力任せにぶん投げる。敵ISは全身のスラスターを用いて空中で体勢を立て直した。

このスラスターは出力が尋常ではなかった。そのためにあの巨体だというのに高い機動力を持っている。でかく、速く、一撃必殺の攻撃手段を持つ厄介な相手。だというのに一夏は一步も退かなかった。

「ふっ！」

攻める。攻めて攻めて攻めまくる。八卦掌における型のひとつ、托たく槍掌そうじょう。

顔を守るように片方の手を配置し、もう片方の手を仰向けにして相手の喉元へ突き出すような構え。

この構えは逆の構えに変えることで攻撃と防御を同時にこなすお得な技だ。更に、流れるような連続技を得意とする。

喉を掻くように擦り、続いて金的、後ろに回りこんでの後頭部に手刀、脇腹に肘を入れる。戦場が地上ならば最後に膝の裏を蹴って体制を崩し、そのまま決めるのだがここは空中。IS戦においてそのような手は使えない。一通りの技を叩き込んだ一夏は離脱し、敵ISの様子を見た。

「まったく効いてねえ……八卦掌って流れる攻撃な分、一発の威力は弱いけど、それでも急所に食らってノーダメージとかありえないだろ」

IS操縦者は女性だから金的は効かないだろうが、それでも喉、後頭部、脇腹と急所に連続で攻撃を入れたのだ。絶対防御が発動していたとしても、人である以上少なからず怯むものである。だというのに敵ISは、まったく怯む様子を見せなかった。

（もしかして……）

そのことから一夏は、ひとつの仮説を導き出す。他にも違和感を感じていた。動き、そして攻撃した時の手ごたえ。そのひとつひとつが一夏に疑問を生じさせる。

あのISはもしかしたら……

「……なあ、鈴。あいつの動きって何かに似てないか？」

「え……え、何かって何よ？ まさかコマとか言うんじゃないでしょうね？」

敵ISを圧倒する一夏の姿に唖然とし、固まっていた鈴だが急に話を振られて我に戻る。

一夏の問いかけに、鈴自身が感じていたことを素直に言った。

「それは見たまんまだろうが」

敵ISの攻撃方法は、あのデタラメに長い腕をぶんぶんと振り回して接近してくる、まるでコマのような動きだった。その高速回転の最中にビームまで撃ってくるのだから厄介だ。

それでも一夏はビームを避け、高速回転する腕を取ってぶん投げた。決して対処できぬ動きではない。だが、その動きを見れば見るほど疑問が湧き上がってくる。

「あー、なんていうかな、昔自動車メーカーが作った人型ロボットいたろ？」

確か、アシななんとかという名前だった。

「いたつけ？ あたしはどっちゃかっていうとロボット兵を思い浮かべるんだけど」

「あゝ、ジリいいよな、面白いよな。ラピタは名作だ。今度DVDレンタルしてくるから一緒に視ようぜ」

「いいわね……って、今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ！！」

「まあ、冗談はさておき、なんつか、あれ……機械じみてないか？」

「ISは機械よ」

「そう言うんじゃないでな。えーと……あれって本当に人が乗ってんのか？」

「は？ 人が乗らなきゃISは動かな……」

鈴は一夏の言葉を否定しようとする。だが、何か思うところがあったあのか、その言葉を止めた。

「……そういえばアレ、さっきからあたし達が会話してる時ってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いているよな……」

思い返すように鈴が今までの戦闘を振り返る。その顔はいつになく真剣だ。

そして、鈴の言葉を証明するように、現状、敵のISは攻撃を仕掛けてこない。本当に会話に興味があり、聞いているような反応だった。

「うっん、でも無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

鈴の言っていることは本当だ。教科書に書いてあり、一夏もそれを読んだ覚えがある。だが、どこかの誰かが言った。教科書に書いてあることが全てではないと。

もし、現在の技術力で無人機が可能だとしたら？ そのことを極秘としていたら、一般的に知られることはまずないだろう。

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「やけに無人機に拘るわね……何か策があるの？」

「ああ。人が乗っていないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

人が乗っていないというのなら手加減する必要はない。雪片式型には奥の手があり、また馬や秋雨にもいざという時のための技を習っている。

八卦掌の連続攻撃が効かないというのなら、一撃必殺の技を叩き込めばいいだけだ。

「いいわ、そんなこと絶対にありえないけど、アレが無人機だと仮定するわよ。それで、手伝いは？」

「要らない。言っただろう、アレは俺の獲物だ」

「そう、わかったわ。そこまで言うんだから、失敗したら駅前のクレープを奢らせるわよ」

「了解。あ、それと鈴」

「何よ？」

「俺、これが終わったら店を開こうと思うんだ」

「フラグが建った!？」

唐突な一夏の発言に、鈴の鋭い突っ込みが入る。

「ちょ、一夏！今の会話のどこにそんな要素が……そもそもなんのお店なのよ!？」

「じゃ、いつてくる」

「ちょっとおおおっ!！」

追求をさらりと受け流し、一夏は飛び出す。それを狙い撃ち、敵I Sからはビームが飛んできた。回避。急加速。

イクニッション・フースト

瞬間加速と呼ばれる技能だ。後部スラスタの翼部分からエネルギーを放出、それを内部に取り込み、圧縮して再び放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。弱点として直線的な動きしか出来なくなるが、使いどころさえ間違えなければ大きな武器となる。雪片と瞬間加速。この二つで千冬は世界一に輝いたのだから。

一瞬で敵ISとの距離を詰め、一夏は投げの動作に入る。秋雨に教わった一撃で相手を戦闘不能にする技。

「悶<sup>もんぎゃく</sup>虐<sup>じゅん</sup>陣<sup>じん</sup>破壊<sup>はいかい</sup>地獄<sup>じごく</sup>！」

次の瞬間、敵ISは頭部から地面に叩きつけられた。

投げ、当て身、関節技の三つを同時に仕掛けるのがこの技の特徴だ。ISには絶対防御があるとはいえ、所詮は人型の兵器だ。関節技はとても有効だと言える。その証拠に敵ISの左手と右足の間接部分は完全に破壊されていた。

「この技のいいところは、ここまでやっても受け手が死なないということだよな」

「うわっ……」

鈴の表情が引き攣る。一夏の発言にしてもそうだが、あまりにも容赦のない投げ技に思わず敵ISを心配してしまうほどだった。

だが、敵ISは立ち上がる。手足の関節が破壊されているというのに平然と、まるで痛覚を感じていないかのように体勢を立て直す。その様子には一夏の言うとおり機械じみたものを感じた。

「やっぱり、人が乗ってないみたいだな。なら、このまま一気に叩く」

敵ISが完全に体勢を直す前に、再度接近した一夏が次の技の動作に入る。掌を一旦敵ISに当て、一瞬引き、そしてもう一度押し付けるように当てる。その瞬間敵ISが吹き飛んだ。

「浸透水鏡掌」  
しんとすいきようしょう

馬の絶招であり、表面を破壊する打撃と、内部を破壊する打撃を同時に発する。これを前にISのシールドバリアなんてものは何の役にも立たない。衝撃が突き抜け、今度は容易に立て直せないほどに敵ISの体勢が崩れる。

「終わりだ」

雪片式型を展開。日本刀の形状だったそれが変形し、エネルギー状の刃が出現した。それを上段に振り上げる。

零落白夜発動。バリアー無効化攻撃が雪片の特殊能力であり、相手のバリアー残量に関係なくそれを切り裂いて、本体に直接ダメージを与えることが出来る。大幅にシールドエネルギーをそぐことが出来るため、雪片は全ISの中でもトップクラスの攻撃力を誇っている。

ただ、この技、雪片の特殊能力である零落白夜を発動させるためには自身のシールドエネルギーを消費する必要があるため、まさに諸刃の剣と言えた。だが、千冬はこれを使って世界一に輝いたのだ。そして一夏は彼女の弟であり、弟子でもある。使えない道理などない。そんなものがあれば、それを叩き切っても前に突き進む。

「せええええいつ!!」

一刀両断。敵ISの胴体を横一閃に切り裂く。上半身と下半身がず

れ、支えを失った上半身は地にのめり込むように落ちた。

「完全勝利！ どうだ、鈴。フラグなんて叩き折ってやったぜ」

「もう一度言うわ…… やっぱりあんたはデタラメよ」

勝利の余韻に浸る一夏。それをどこか冷めた表情で見詰め、呆れたように言う鈴。

なんにせよこれで一件落着、一安心だと一夏の気は緩んでいた。

『この馬鹿者が！ まだ終わってないぞ！！』

プライベート・チャンネルから千冬の怒鳴り声が飛んでくる。それとほぼ同時に、白式が警告音を発した。

『敵ISの再起動を確認！ 警告！ ロックされています！』

下半身を失って尚も、上半身だけで這いずるように敵ISは動いていた。無事な左腕で狙いをつけ、最大出力形態でビームを放とうとバースト・モードしていた。

（やばっ……）

避けようとするが今更間に合わない。だが、だからといってこのままやられるつもりはさらさらない。

思考を巡らせるよりも先に体が反応し、投擲の動作を取る。投げるのは雪片式型。

雪片式型は敵ISの頭部を貫き、今度こそ完全に活動を止めた。けど、活動が止まりきる前に放たれたビームはもうどうすることも出来ない。それが一夏に迫る。

視界が真っ白な光で染まり、そこで一夏の意識は闇へと落ちていった。

＋＋＋

「ぶふあっ!？」

闇へと落ちた一夏の意識。それは口内に入ってきた異物によって強制的に目覚めさせられてしまった。

「死人すら目覚める、超高価な秘伝薬ね」

「凄い効果ですね」

馬と千冬の声が聞こえる。だが、一夏はそれを冷静に聞くことが出来なかった。

辛い、苦い、痛い。舌に走る激痛。怪しげな薬を飲まされたことにより悶え苦しみ、じたばたとベットの上を転がり回る。

「あいたっ!？」

「お前は何をしている？」

ベットの上で暴れていたために一夏はベットから落ち、足元に転がる一夏を見下ろして千冬は呆れたように言った。

「いたた……ここは？」

「保健室だ」

床から千冬達を見上げ、一夏は問う。その問いに短く簡潔に、千冬が答えた。

「何があつたか覚えているか？」

「確か敵の攻撃を受けて……ああ、俺はあのまま気を失ったのか」

「そうだ。正面から敵のビームを受けたんだぞ。その上、お前はISの絶対防御をカットしていたな？ よく死ななかったものだ」

（あれ？ 絶対防御ってカットできないシステム根茎じゃなかったっけ？）

そう思う一夏だったが、自分の記憶違いかと自己完結する。何せ、一夏にはISの知識が圧倒的に不足していた。だから勘違いだと思ひ、このことに関してはこれ以上深く触れなかった。

「油断大敵ね。やったと思った時が一番気を引き締めなければならぬ時ね。いっくんはそのところがまだまだ未熟ね」

「まったくです。これは普段の修行をもう少し厳しくする必要がありますね」

「うえっ……」

自身の失態を指摘され、修行が増えるという言葉に一夏は嫌そうな顔をする。現状でもかなりきついのにこれ以上増えたら死なないかとしやれにならないことを思いつつ、今更ながらに思ったことを口

に出した。」

「そういえば……なんで馬さんがここにいるんですか？」

「それは、いつくんの成長を見るために……」

「馬さんのいつもの悪い癖だ。既にカメラは破壊した」

「ああ、なるほど」

馬にかぶせていう千冬の言葉に、一夏は納得した。それと共に軽蔑したような視線を馬に向ける。

「ちなみに千冬姉、携帯は確認した？ 最近の携帯は高性能だからさ、おそらくそれにも馬さんは……」

「これ、いつくん！」

指摘されて慌てるあたり、どうやら凶星らしい。

「それなら心配する必要はない」

「ちょ、千冬ちゃん！ それ、おいちゃんのけいた……」

「確認するまでもなく、破壊する」

「ああっ！」

千冬の手にはいつの間にか馬の携帯が握られており、そのまま握力によって握りつぶされてしまった。

ガラクタへと成り下がる携帯。それを見て、馬が悲痛な叫びを上げる。

「う、うおお～～～!!」

「まあ、なににせよ無事でよかった。家族に死なれては寝覚めが悪い」

そんな馬をスルーし、千冬は柔らかな表情を一夏に向ける。とても優しい、実の弟である一夏にしか見せない顔だった。

「千冬姉」

「うん？　なんだ？」

「いや、その……心配かけて、ごめん」

千冬は一夏の言葉にきょとんとした後、小さく笑った。

「心配などしていないさ。お前はそう簡単には死なない。なにせ、私の弟だからな」

変な信頼の置かれ方だと一夏は思う。けれど、これは千冬の照れ隠しの一種なので気にはならなかった。むしろ信頼してくれることが嬉しく、一夏も釣られて小さく笑った。

「千冬姉」

「今度はなんだ？」

「俺さ、白もいいけど千冬姉には黒が似合うと思うんだけど」

「は？」

一夏の言葉に、千冬の目が点になる。

現在、一夏は未だに床に倒れていた。そこから千冬を見上げるように見ている。そう、千冬の足元から千冬を見上げているわけであり、スカートの中身がバツチリと見えていた。

黒のパンストから透けて見える実の姉の純白の下着は、なんともいえないエロさを醸し出していた。

「っ！？」

「へぶっ！！」

千冬は真っ赤な表情で一夏の顔を踏みつける。一夏は珍妙な呻きを上げて再び意識を手放した。

千冬は荒い息を吐き、キツ、と馬を睨みつける。

「馬さん！ あなたの所為で一夏が悪影響を受けているんですが！？」

「いい傾向ね。エッチなのは生命力の証。きっといっくんはどんな状況でも生き残るね」

「そんな証は要りません！」

激情のままに怒鳴る千冬。心の底から馬を軽蔑し、どうしようもない怒りを向けていた。

当の一夏は未だに床の上で、とても満たされた表情で気絶していた。

＋＋＋

「一夏……」

人の気配を感じた。一夏はいつの間にかベットで寝ていた。既にここには千冬と馬がないので、そのどちらかが一夏をベットに戻したのだろう。そのことに感謝しつつ、一夏は目を開ける。

「鈴」

「っ！？」

一夏の目先には鈴の顔があった。しかも鼻先三センチの距離だ。

「……何してんの、お前」

「おっ、おっ、おっ、起きてたの！？」

「気配を感じてな。それと鈴の声が聞こえたから。で、どうした？何をそんなに焦ってるんだ？」

「あ、焦ってなんかないわよ！ 勝手なこと言わないでよ、馬鹿！」

「馬鹿はないだろ、馬鹿は。そもそも馬鹿馬鹿言い過ぎだ。口癖か？」

「あんたが馬鹿なんだから仕方ないでしょう！」

真つ赤な表情で一夏と言い争いながら、鈴はベット脇の椅子に腰掛ける。そんな鈴の顔を見て、一夏はあることを思い出した。

「あ、そういえば試合は中止なんだよな？」

「あんなことがあったんだし、当然じゃない」

「再試合とかないのか？」

「今のところ決まってるみたいよ」

「マジかよ……」

正直、試合のことなどどうでもよかった。クラスの女子は学食でデザートの半年フリーパスが手に入らなくて残念だろうと肩を落とすだろうが、一夏にはそれよりも重要な問題があった。

「なら、試合前の約束はどうなるんだ？ あのまま続けてたら、絶対俺が勝ってたよな？」

「そ、そんなわけないじゃない！ 私は仮にも代表候補生よ！ まだまだ奥の手を隠し持ってたんだからねっ！」

一夏が勝てば、毎日一夏に弁当を作るという約束。つまりは鈴が一夏の彼女になるということだ。

そして、あのまま試合を続けていたら勝ったのは自分だと述べる一夏に、鈴は更に顔を赤くして否定した。

「まあ、俺は試合の勝敗はどうでもいいんだけどな。それにしても

腹減った……そういえば鈴、こつちに帰ってきたってことはまたお店やるのか？　鈴の親父さんの料理、うまいもんな。また食べたいぜ」

「あ……その、お店は……しないんだ」

「え？　なんで？」

一夏の言葉に急に鈴の表情が暗くなる。

「あたしの両親、離婚しちゃったから……」

その言葉が一瞬、一夏には信じられなかった。なにせ、あんなに仲の良さそうな夫婦だったのだから。

けれど、鈴が冗談や嘘を言っているのではないということは雰囲気  
で分かる。

「あたしが国に帰ることになったのも、その所為なんだよね……」

「そうだったのか……」

今にして思えば、あのころの鈴は酷く不安定だった。何かを隠すように明るく振舞うことが多く、一夏にはそれが妙に気になっていたけれど、当時の一夏は鈴の力になることが出来なかった。過去に戻る事が出来れば、自分で自分を殴りたい衝動に駆られる。

「一応、母さんの方の親権なのよ。ほら、今ってどこでも女の方が立場が上だし、待遇もいいしね。だから……」

ぱっと明るく振舞おうとした鈴だが、その声がまたすぐに沈む。

「父さんとは一年会ってないの。たぶん、元気だとは思っけど」

一夏には、鈴にどんな声をかければいいのか分からなかった。鈴の両親が離婚したという事実は、一夏の心にも少なからずの影を落とす。

家族がバラバラになる。それは絶対にいいことじゃない。だが、そうせざるを得ない状況になったのだろう。

気前のいい、鈴の父親のことを思い出す。鈴にそっくりで、活動的な母親を思い出す。

どうしてだろう？ どうして、あの夫婦が離婚してしまったのだろう？ そのことについては間違っても鈴に聞けることではない。何せ、一番辛いのは鈴自身なのだから。

「家族って、難しいよね」

鈴の言葉に、一夏は実感が湧かなかった。千冬だけが一夏にとって、血のつながった家族。両親の顔は知らず、梁山泊の者達を本当の家族のように思っているが、そんな難しさなど今まで感じたことがない。

それでも、今の鈴を放っておくことは一夏には出来なかった。

「鈴」

「ん、なに？」

鈴が無理に明るく振舞おうとして、苦しげな笑みを浮かべる。それ以上は見てられず、一夏はベットから起き上がって鈴を抱きしめた。

「へ、ええっ！？　ちょ、一夏！？」

鈴の顔は見えないが、おそらくまたも真っ赤に染まっているのだろう。荒い息遣いが聞こえる。

一夏は鈴の耳元で囁くように小さく、けれどハッキリと言った。

「俺が鈴を幸せにするから」

鈴が中国に帰る時、意味すら分からずに言ったあの言葉とは違う。今度はちゃんと意味を理解し、真っ直ぐ鈴に向けて続ける。

「その、さ……まだ高校生だから将来のことについては未定だけど、それでも俺は鈴のことを大事にするから。何か困っていることがあれば力になるから。だから……」

「いち、か……」

熱い。照れ臭さで焼き切れてしまいそうなほどの熱を感じる。心臓が早鐘の如く脈を打ち、一夏の息も荒くなっていた。

「試合の決着は付かなかったけど、俺の彼女になってくれないか？」

「一夏」

鈴の声は震えていた。とてもか細く、縋るように一夏に問いかけてくる。

「あたしなんかで……いいの？」

「鈴だからこそいいんだ。俺は鈴のことが好きだ」

「あたしも……あたしも一夏のことが前からずっと好きだった」

「うん……ごめんな、今まで気づいてやれなくて」

「……あれ？　一夏、約束の意味って理解してたんじゃないの？」

「やばっ……ごめん、あれ嘘。本当は馬さんに相談するまでぜんぜん気づかなかった」

「なによそれ……」

「本当にごめん」

「もういいわよ……結局、一夏があたしの気持ちに伝えてくれたから」

カミングアウトされた事実には呆れつつ、鈴は小さく笑っていた。

一夏は鈴を抱きしめる力を緩め、正面から顔を見詰める。彼女となつた幼馴染を見て、意地が悪そうに笑っていた。

「それはそうと鈴。やっぱこういうのって男の方からするべきだと思っただよ」

「へ？」

呆ける鈴に反応する間を与えない。一夏はそう言って、即座に行動した。顔を近づけ、そのまま唇を奪う。鈴の瞳が大きく見開かれていた。思わずじたばたと暴れるが、一夏によって抱きしめられているためにうまく動けない。それでも鈴は抵抗しようとする。

「いてっ」

「あ、ごめん……じゃなくて！」

鈴のチャームポイントともいえる八重歯が一夏の唇に引っかかり、口元からは血が滲み出していた。それでも一夏は満たされたような表情をして、ニヤニヤと笑みを浮かべている。

「い、一夏！ あんた、さっきは起きて……」

「ああ、起きてたぞ。狸寝入りだ。だから鈴が何をしようとしていたのかバッチリ見てた」

「っ……この、馬鹿馬鹿馬鹿！」

「実を言うと俺、かなりエロいんだよね。鈴みたいな可愛い彼女が出来たし、色々とやってみたいことがあるんだ」

「ひゃうっ！？ い、一夏、どこ触ってんのよ！？」

「ん、お尻」

「変態変態変態！」

いつの間にか一夏の手は鈴の臀部に伸びており、存分に揉みしだいていた。鈴も一夏を罵倒こそしているが、大した抵抗をしない辺りは悪い気はしないのだろう。

一夏は笑う。鈴は恥ずかしがる。甘く、桃色な雰囲気。そんな中、この雰囲気完膚なきまでに破壊する乱入者が現れた。

「な、なんだ!？」

「え、なに? どうしたの!？」

耳を劈く破砕音。その音は保健室のドアの方から聞こえてきた。一夏と鈴はドアへと視線を向けるが、そこには既にドアなんてものは存在しなかった。完全に破壊され、破片となって辺りに飛び散っている。

そして、ドアの代わりに鎮座する阿修羅のような存在。阿修羅は鈴にギンと鋭い視線を向け、底冷えしそうな声で鈴に宣言した。

「よろしい、ならば戦争だ。鳳鈴音!」

阿修羅の正体は千冬。最強無敵の一夏の姉だった。

「魔王ノブナガ!？」

「そういうネタはやめると何度も……まあ、それはいい。今は関係ない。一夏、私は言ったな? お前の嫁になる者は私を倒すことが条件だと」

「だから、それ無理ゲー過ぎるだろ千冬姉! そもそも嫁じゃなくて彼女だから。俺高校生だし、その話はまだ早い!」

「そんな屁理屈が通ると思うか？」

「屁理屈じゃないから! 事実だから!!」

「うるさい! お前は私のだ。鳳、貴様が欲しいというのなら奪い取ってみろ!」

「何たる暴君……」

一夏と千冬の言い争いを、鈴はただ呆然として聞いていた。いきなりすぎる乱入者。その正体が千冬であり、ブラコン全開の発言をしたことが信じられないのだろう。普段の千冬を知るものなら誰もが啞然、騒然とする光景だった。

「ちっ、鈴！ 逃げる！！」

「えっ！？」

だから次の瞬間、何が起きたかも理解することが出来なかった。中国の代表候補生である鈴が、状況を理解することが出来ない。それほど攻防が一瞬の内に行われていた。

「ここは俺が食い止める！ だから、少しでも遠くに……」

「ええい、一夏！ 何故私の邪魔をする！？ 私はただ、あいつを始末しよう……」

「姉の凶行を止めるのが弟の役目だ！ 千冬姉、正気に戻ってくれ！」

「私は正気だ！」

「そんなわけあるかつ！！ 俺の知る千冬姉はこんなことをしない！」

振るわれる凶器（出席簿）。それを避け、受け流し、払う一夏。常

識を超えた、超人レベルの戦闘。その光景に呆気にとられ、鈴は固まっていた。

「お前が私に勝てると思うのか!？」

「達人級に勝てると思うほど思い上がっちゃいないさ。だから……」

いつまでたつても逃げ出さない鈴に痺れを切らし、一夏は鈴の元に駆け出す。そもそも達人級の千冬とやりあうこと自体が無謀なのだ。ならばすることはひとつだけ。

「あ……」

「戦略的撤退イイ!」

鈴を抱き上げ、一目散に逃げ出す。戦うことが無謀なら逃走すればいいのだ。如何に千冬が達人級の実力者とはいえ、ここはIS学園で、千冬は教師であり、専用機を有していない。いくらなんでも、空を飛ぶ存在を追うことは出来ない。

「来い、白式!」

一夏は窓から飛び出し、白式を展開して空へと逃げ出した。未だに状況を理解し切れていない鈴は、現実味を帯びない声でポツリとつぶやく。

「なんだったのよ、一体……」

「悪夢……かな?」

姉の豹変に一夏も戸惑いを隠せず、力のない言葉を吐く。  
なにやら千冬は、一夏に彼女が出来たことによって覚醒したようだった。

今、IS学園に騒動の種が生まれた。

## BATTLE12 決着！！（後書き）

『おまけ』

「ちーちゃん、おつまませー！」

「束か……よく来たな」

「そりや愛しのちーちゃんのせつかくの呼び出しだもん。地球の裏側からでも駆けつけるよ」

「そうか……」

夜、どこかのおでんの屋台。そこで千冬は酒を飲み、久しく友人と再会していた。その友人の名は篠ノ之束。千冬の教え子である篤の実の姉であり、天才（天災）と称される科学者。

「ちーちゃんがご飯を奢ってくれるってのも珍しいしね。あ、おじちゃん、私はんぺんね」

「あいよー」

束は屋台の親父に注文を述べ、出されたはんぺんをはむはむと食べる。

「今日呼び出した訳なんだが……実はお前に頼みがあつてな」

「なにになに？　ちーちゃんのお願いだったらなんだって聞いちゃうよ」

「実は……専用機を一機、用意して欲しい」

そんな中、何気なく言われた千冬の注文。その言葉に束の瞳が怪しく光り、興味深そうに千冬を見詰めた。

「へえ……一度は引退したちーちゃんが専用機を欲しがるなんてどんな心境の変化なのかな？」

「実はな……一夏に彼女が出来た」

「へ？」

あまりにも唐突過ぎる話題の変換。普通ならそれがどうしたって話になるだろうが、その言葉に束は鋭く食いつく。

「えっ、いつくに彼女が？ え、それってお相手はまさか箒ちゃん？」

「違う……中国の代表候補生、凰鈴音だ」

「へ……凰鈴音って言うんだ。へ……その名前、束さんの抹殺リストもとい、興味対象上位にランクインだよ」

「殺すなよ」

「あっはっは、わかってるよ、ちーちゃん。で、つまりはその凰鈴音って子に対抗するために専用機が欲しいんだね？」

「話が早くて助かる。まあ、実際凰ならどうとでもなるのだが、一

夏が問題だ。あいつは凰のことを気に入っているからな。その上、かなりの実力を付けてきた」

「流石いっくん。もつとも、あそこにいたのなら当然なのかな？ それはそうとしーちゃんは元気でやってる？」

「しぐれさんか？ この間会ったが、あの人は相変わらずだった」

「へー、そうなんだ」

楽しそうに騒ぐ千冬と束。一夏のサード幼馴染、鈴は何気到大ピンチを迎えていた。

BATTLE 13 梁山泊

『俺が鈴を幸せにするから』

画面から聞こえたその音声に、一夏の頭の中は真っ白になった。

『その、さ……まだ高校生だから将来のことについては未定だけど、それでも俺は鈴のことを大事にするから。何か困っていることがあれば力になるから。だから……』

『いち、か……』

画面に映る一夏と鈴は抱き合っており、背後では逆鬼が冷やかすように口笛を吹く。その音が一夏の耳を打ち、無性に腹が立った。

『試合の決着は付かなかったけど、俺の彼女になってくれないか？』

『一夏』

『いやー、よく撮れたね』

元凶、馬にはもはや殺意すら抱いていた。帽子で目元が隠れていているが、顔がにやけているのは十分に分かる。

『あたしなんかで……いいの？』

『鈴だからこそいいんだ。俺は鈴のことが好きだ』

『あたしも……あたしも一夏のことが前からずっと好きだった』

『うん……ごめんな、今まで気づいてやれなくて』

『……あれ？ 一夏、約束の意味って理解してたんじゃないの？』

『やばっ……ごめん、あれ嘘。本当は馬さんに相談するまでぜんぜん気づかなかった』

『なによそれ……』

『本当にごめん』

『もういいわよ……結局、一夏があたしの気持ちに伝えてくれたから』

「ちょ、そこまでっ！ ストープー！」

暫し呆然としていた一夏だが、ふと我に返ってテレビの電源を切る。映像が消え去り、画面が黒く染まった。

「なにをするね。ここからがいいとこだというのに」

「黙れ盗撮魔！ 人のプライバシーをなんだと思ってるんですか！？」

一夏の絶叫が梁山泊内に響き渡る。

もう五月も終わりがごろの日曜日。IS学園での生活も落ち着きを見せ、一夏は久しぶりに梁山泊へと顔を出す。そこでは馬が撮影した映像の上映会が行われていた。

「迂闊だった。まさかカメラや携帯の他にもビデオカメラを隠し持っていたなんて……」

「いっくんに千冬ちゃんもまだまだ甘いね。ビデオカメラの件にしてもそうだけど、おいちゃんが撮影していたことにまったく気づかなかったのだから」

「達人が完全に気配を消してて、俺が気づけるわけないじゃないですか。それに千冬姉はなんか冷静じゃなかったし……」

「あれにはおいちゃんも驚いたね。それほどいっくんに彼女が出来たことが衝撃的だったのだろうね」

「あんな千冬姉は初めて見ました。ってか馬さん！あの現場にいたなら撮影なんかよりも千冬姉を止めてくださいよ！！」

「自分で蒔いた種は自分で刈り取るべきね」

「一体、俺がなにをしたって言うんですか？」

「どうやらいっくんに彼女は出来ても、根本的な部分が変わっていないよね」

千冬の暴走を思い出し、馬に文句を言う一夏。けれど馬はため息を吐いて肩をすくめ、呆れたように言い返す。

「気になる言い方ですね……そういえば、しぐれさんとアパチャイを見ませんね。それに秋雨さんも」

一夏もため息を吐き、それと同時に疑問を吐き出す。他にも梁山泊

の主である長老、隼人も姿を見せないが、彼はふらつと放浪の旅をする癖があるために機にしない。隼人の心配などするだけ無駄だった。

「アパチャイは鳩の餌やりに行ったね。しぐれどんは『いつものね』」

「ああ、『いつもの』ですか」

しぐれもしぐれで、長老のように唐突に姿を見せなくなることがあった。とはいえ、二、三日もすれば平然と帰ってくるから梁山泊の者は何も気にしていない。一夏も同様で、納得と頷いた。

「一夏さん、お茶ですわ」

「ありがとう、美羽。でも困ったな。しぐれさんに稽古をつけてもらおうと思ったのに」

にこにこ微笑みながら、美羽が一夏にお茶の入った湯飲みを差し出す。一夏はそれを一礼して受け取った。

「それで、秋雨さんは？」

「秋雨さんなら兼一けんいちさんと一緒に走り込みに行ってますわ。ですの  
で、もう少ししたら帰ってくるかと」

「兼一？」

聞き覚えのない名だ。首を傾げる一夏に対し、美羽はとても楽しそうに説明してくれた。

「そういえば、一夏さんにはまだ紹介していませんでしたわね。実は、最近うちに入門した方なんです。私のクラスメイトで、一夏さんや弾さんの手を借りずに初めて出来たお友達でもあるんです」

「そうなんだ。おめでとう、美羽。で、その友達が入門したって？  
梁山泊（じやうさんぱく）に？」

「はい」

美羽は楽しそうで、とても嬉しそうだった。それは一夏からしても大変喜ばしいことだが、それよりも非常に気になる単語が聞こえた気がした。

「美羽……お前は友達を死地に追いやるつもりなのか？」

「そ、そんなつもりはまったく。ただ、兼一さんにも事情がありまして、うちに入らざるをえない状況に陥ったといえますか……」

「どんな状況だよ、それ。それにしても秋雨さんと走り込みか……無事に帰ってくるといいな」

「そんな心配をしなくてもちゃんと帰ってきますわよ。ただの走り込みなんですから怪我をするなんてありえせんわ」

「まあ、ただの走り込みかどうかはさておき、それもそうか」

案じるのは、兼一という美羽の友人の身。梁山泊の豪傑の中では比較的常識を持つ秋雨だが、彼の扱きが尋常ではないことを一夏は知っている。

走り込みで負傷を負うことはないだろうが、それでも未だ会わぬ兼一という人物を心配せずにはいらなかった。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい、秋雨さん」

「おや、一夏君。来ていたんだね」

そんなことを考えていると、当の秋雨が帰ってきた。ということは兼一と言う人物も帰ってきたはずであり、一夏はキョロキョロと辺りを見渡す。

「秋雨さん。兼一って人はどこなんですか？」

「ああ、美羽にでも聞いたのかな？ 兼一君なら今は、中庭で基礎トレーニングをしているよ」

「走り込みの後に基礎トレーニングですか？ 相変わらずみっちりやりますね」

「何事も基礎が大事だからねえ」

一夏も秋雨達の手により、基礎をしつかりと叩き込まれていた。それはまさに鬼のような扱きだった。それを思い出し、背筋がぶるりと震える。

だから、一夏が兼一のことを気にするのは当然だった。

「中庭ですね。さて、どんな基礎トレーニングを……」

中庭に足を進める。先からは少年の悲鳴のような叫びが聞こえてきた。

「うがあああああああつ!!」

おそらくは彼が兼一なのだろう。黒髪と黒い瞳、如何にも日本人といった風貌をした少年。左目の目元にある絆創膏が特徴的だった。彼は半裸で中腰となり、足をロープなどで縛られていた。膝の上にはご飯が盛られた茶碗が載っており、頭の上には沸騰したお湯の入ったお椀が置かれている。お椀には『忍耐』とかかれていた。

更には『努力』、『根性』と書かれた大きな壺。それを指の力だけでつかみ、握力を強化させるのだろう。壺の中には水も入っているためにかなり重い。股の下には『精神力』と書かれた線香立てが置かれており、火の点いた線香が差されているので腰を下げることは許されない。

腕にはバンドが巻かれており、そのバンドには棘が付いていた。腕が下がると脇に刺さるという仕掛けで、常に腕を上げていなければならない。

中腰で腕を広げ、指の力だけで壺を持ち上げる。下手に動けば火傷を負うというこの状況。それを見て、一夏はポツリとつぶやく。

「なんだ、思ったより軽めの基礎トレーニングだな。うん、兼一って奴もがんばってるし、邪魔しちゃ悪いな」

梁山泊の想像を絶する扱きにより、一夏の感覚は完全に麻痺していた。梁山泊の修行がとんでもないことに変わりはないが、あの程度なら準備運動にも入らないという認識だ。

「指が、指がちぎれるううう!!」

「美羽に組み手の相手でもしてもらうかな？ 美羽」

せつかく梁山泊に戻ったのだから、自らも鍛えようと美羽に声をかける。

一夏は兼一に背を向け、中庭から去った。

十十十

「そういえば美羽、転校したんだってな。せつかく名門の松竹林しょうちくりん高校に受かったってのに」

「ご存知でしたか。まあ、隠せることでもありませんわよね」

道義に袖を通し、一夏と美羽は対峙する。千冬以外の者とは久しぶりにやる組み手だ。

「そのとおり。馬さんに聞いたよ。しかも、いじめられてたんだって？」

「べ、別にそんなことは……ただ、わたくしが目立ちすぎた所為で……」

蹴りを主体とした美羽と、手数を重視した一夏の攻防。

かわし、受け、流す。その際に一瞬だけ、美羽に隙が出来たことを一夏は見逃さなかった。

「隙あり」

「あ、ずるいですわ！」

ぴたりと、美羽の顔の数センチ前で一夏の拳が止まる。会話の最中に隙を突かれたことで、美羽は不満そうに頬を膨らませた。

「油断する方が悪い。そうか……いじめか。なんで俺に相談してくれなかったんだ？」

「穏便に済ませたかったといいますが……一夏さんに相談したら相手のところに殴り込みに行きそうでしたから。あの時もアパチャイさんを宥めるのが大変だったんですよ」

なんだかんだで一夏は手が早い。小学校の時、クラスに溶け込むことが苦手だった篤をいじめていた男子と殴り合いの喧嘩をし、転校してきたばかりでいじめの標的となった鈴を庇うために大立ち回りを演じたりしていた。

「それは否定しない。でも、まあ……それは別にしても美羽は友達を作るのが苦手だったからなあ」

「うう、そうなんですよ。だから兼一さんがお友達になった時は本当に嬉しかったんです」

新たな組み手を始める。その際に会話も継続し、一夏と美羽は拳と蹴りによる攻防を始めた。

「確かに美羽は弾や鈴、響に祐馬も俺の経由で知り合ったからなあ。セシリアは旅行の時に成り行きで。だから、自分の力で作った友達は初めてなわけか」

「はい！」

嬉しそうに美羽が笑う。 またも出来た隙を突き、一夏は足払いを仕掛けた。

「おっと」

それを美羽は、跳んでかわす。

「お、かわしたか」

「同じ手は喰らいませんわ」

着地し、今度は美羽が鋭い蹴りを上段に放ってきた。

「なんだかんだで今を楽しくやってるならいいけど、転校するならIS学園って選択肢はなかったのか？ 美羽の成績なら転入試験も楽勝だろ」

「大変魅力的な話ですが、IS学園の転入には試験結果だけではなく、国の推薦がなければ入れませんわよ」

「そこは千冬姉のコネを使っただな。それに美羽はISの適正って、確かAだっただろ？ 俺より才能あるんじゃないか？」

女性しか動かせない兵器、ISだが、それには才能や素質なども関係する。ISとの適正を調べ、それをランクとして表すのだ。政府はIS操縦者を募集する一環で、希望者はタダでその適正試験を受けられる。

Aランクは代表候補生クラス。美羽の他にセシリアや鈴もこのラン

くだ。

ちなみに第はCで、一夏はBランク。もっともこれは、訓練機で出した最初の格付けなのであまり意味はない。

「冗談はさておき、一夏さん、鈴ちゃんとはどんな感じなんですか？」

「別に冗談じゃないんだけどなあ。知り合いが少ないし、美羽が転入してくれたらいろいろと助かるんだけど」

互いに小さく笑い合う。その際に一夏の腕と美羽の腕が交錯し、互いに弾けたように腕を引いた。

「美羽も腕を上げたな」

「一夏さんこそ。それで、鈴ちゃんとはどうなんですか？」

「そんなに気になるのか？」

「はい」

美羽の笑顔が一段と輝く。やはり美羽も年頃の少女なのか、恋愛ごとには人一倍の興味を持っていた。

もっともそれは他人の色恋沙汰についてであり、自身の色恋に関してはかなり鈍い。なにせ、弾が好意を抱いていて露骨なアピールを繰り返したというのに、それに気づかないほどなのだ。

前にそのことを遠回しに指摘したら、一夏だけには言われたくはないと返されてしまった。

「その、なんていうか……鈴って可愛いよな」

「元から鈴ちゃんは可愛いですわよ。一夏さんは果報者ですわよ」

「それはまあ……確かに」

「鈴ちゃんもきつと、幸せでしょう。けど、そうすると今度はセシリアちゃんが可愛そうですわ」

「なんでそこでセシリアの名前が出るんだ？」

「……一夏さんって、彼女が出来ても根本的な部分は変わりませんわね」

「さつき、馬さんにも言われたよ、それ」

美羽が呆れたように息を吐いた。またも隙が出来たので、今度は手を放つ。美羽は再び跳んでかわした。けれど、それだけでは終わらない。羽のように宙を舞い、空中から針のように鋭い蹴り技を放つ。

一夏は自ら地面に倒れ、転がりながら回避した。

「今のは危なかった」

そして、すぐさま立ち上がる。

「惜しかったですわ」

「本当に腕が上がったな、美羽。もう少しこの組み手を続けたいけど、午後からは鈴とデートだからそろそろ終わらせないと」

「ま、そうなんですの？ デートですか、よろしいですね〜」

その会話を最後に、互いににやけていた表情が引き締まる。この組み手の決着がつこうとしていた。

「だ、誰だよあの人……」

一夏と美羽の最後の打ち込みが行われる少し前、道場のふすまを少しだけ開け、中の様子を伺う少年の姿があった。彼は先ほどまで基礎トレーニングをしていた人物、兼一。

道場の方から物音が聞こえ、基礎トレーニングが終わったので様子を見に来て見れば、そこでは美羽が見覚えのない少年と組み手をしていた。

美形だと兼一は思う。非の打ち所がない、理想的なイケメン。兼一の妹であるほのかならジャニーズ系と褒め称えることだろう。

しかも美羽となにやら会話を交わしており、内容は聞こえないがとても楽しそうだった。その光景が兼一を存分に焦らせる。

「うが〜！！ 誰なんだよあれ！？ まさか彼氏？ そ、そんなわけ……うわあ〜んっ！！」

兼一は美羽のことが好きだ。一目惚れであり、彼女のあり方に一瞬で心奪われてしまった。

強く、心優しく、真っ直ぐな美羽。そんな彼女に惹かれ、いつか守ってあげられるくらいに強くなりたいという目標を持つ。だから兼一は強くなろうと決意し、梁山泊の激しい修行にも耐え抜いているのだ。もっとも強くならなければ自分の身が危ないということから、

修行をやめるにやめられない状況なのだが。  
それでも兼一が梁山泊に居続けているのは、美羽の存在が大きいだろう。

「なんだよあれ、なんなんだよあれ！ 反則だよ。かつこいいし、美羽さんと互角にやり合えるほど強いし。誰なの？ あの人誰なのぉー！」

「織斑一夏。少し前にニュースで大々的に取り上げられたから、兼ちゃんも名前は知っているはずね」

「うわっ、びつくりした！？」

取り乱す兼一に、背後から掛けられる声。その声の主は馬であり、いつの間にか後ろに回っていた馬の存在に兼一は肩をびくりと震わせる。

「え……織斑一夏？ あ、それって世界で唯一ISを動かした男って有名なあの人！？」

「そうね。織斑一夏こといつくん。彼は元々、この梁山泊に住み込みで修行をしていたね。今は全寮制のIS学園に通っているから、兼ちゃんが会うのは初めてね。ちなみにIS学園は女の子ばかりでとても良いところね……羨ましい」

「はぁ……」

今の時代、ISを知らない者はいない。流石に専門的な知識は持ち合わせていない兼一だが、それでも織斑一夏という名前は知っている。

そして少しだけ思う。一夏のことが羨ましいと。なんだかんだで兼一も男だった。

「まあ、安心するといいね。美羽といっくんは互いのことを家族として認識しているし、なによりいっくんは彼女持ち。美羽はフリーだから希望はあるね」

「そうなんですか！？ よかったあ……あの人が美羽さんの彼氏だったらどうしようと思いましたよ」

「そうだったら万が一にも兼ちゃんに勝ち目はないね」

「うっ……」

ぐさりと兼一の胸に言葉の刃が突き刺さった。ルックスだけでも既にかかなりの大差がついている。

「なに、男は顔じゃないね。とはいえ、兼ちゃんがいっくんに勝っているものがあるかどうか……武術の才能にしたって、兼ちゃんの遙か上に行くからね」

「ぐふっ……」

さらに追撃の刃が突き刺さる。兼一はその場に跪き、プルプルと震えながら無力感に叩きのめされていた。

「それはそうと基礎が終わったのなら修行ね。少しでも強くなるために、おいちゃんが手解きしてあげるね」

「うっ……」

泣きそうな兼一を引き連れ、馬の修行が始まる。その少し後に一夏と美羽の組み手の決着がつき、一夏の勝利で幕を閉じた。

――

「やあ、俺は織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ」

「あ、どうも。僕は白浜兼一」

「そうか。なあ、軍曹って呼んでいいか？」

「どうしてそうなるの!？」

「いや、その声を聞くとどうもな……もしくは王様とか」

「あだ名を付けるのは構わないけど、そんな変なのはやめてよ。ってか、どこから出てきたの、その単語」

「まあ、冗談はさておき、兼一と呼ばせてもらっていいか？」

「別にいいけど……それじゃ、僕は一夏さんで」

「同年だし、同性だからさん付けはやめてくれ。なんかむず痒い。呼び捨てでいいよ」

「えっと……じゃあ、一夏君？」

「君付けかぁ……まあ、別にいいか。よろしくな、兼一」

「うん、一夏君」

改めて一夏は兼一と対面する。まずは自己紹介。互いに名を名乗り、呼び名を決めた。

「それにしても、まさか梁山泊<sup>こく</sup>に入門するとはな。勇気があるというか、無謀というか……」

「うう……僕もまさか、ここまで無茶苦茶な道場とは思わなかったよ」

「兼一はなにを習ってるんだ？ 俺は剣術と柔術と中国拳法」

「あ、僕は空手と柔術、中国拳法にムエタイを」

「ムエタイ！！ ムエタイってアパチャイにか！？ ちょ、それはまずい。死ぬぞー！」

「ぼ、僕だって……僕だって本当はやりたくなかった。けど、生き残るためには仕方ないんだ」

「事情はわかんないけど、アパチャイに師事する方が遥かにデンジャラスで死ぬるぞ。悪いことは言わない、やめておけ」

「う、うう……」

二人は初対面だが、どこか通じるものがあつたのだろう。互いの気苦労を吐露し、極めて良好な関係を築こうとしていた。

「アパ、来てたのかよ一夏。今戻ったよ」

そんな中、話題のムエタイ使い、アパチャイの帰宅。彼はニコニコと人の良さそうな笑みを浮かべていた。

「ゆっくり話したいけど、その前に兼一の修行があるよ。その後で遊ぼうよ」

「いや、俺は昼から用事があるのでそろそろ失礼しようかと……」

「アパ……それは残念よ」

「すみません」

残念そうな顔を浮かべるアパチャイに罪悪感を抱きながら、一夏はそろそろお暇しようと準備を始める。

「兼一、修行がんばれよ。ひとつだけアドバイス……死ぬな」

「はい……」

兼一の肩にポンと手を置き、一夏は自分の荷物をまとめ始めた。

「一夏さん、鈴ちゃんによろしくですわ」

「分かった。美羽も元気だな」

「はい」

荷物をまとめ終え、美羽と一言二言言葉を交える。そしてちらりと、アパチャイと兼一が向かった中庭へ視線を向けた。そこでは二人が向かい合い、これからミット打ちを始めるようだった。

「け、兼一……死ぬな」

「うふふ、大丈夫ですよ」

「ホントか？ 本当にそうなのか！？ アパチャイって手加減を知らないんだぞ。比喻じゃなく、言葉そのものを！」

一夏の体がぶるぶると震える。前に一度だけアパチャイにムエタイを教わろうとした時、アパチャイの手によって死にかけたためだ。あの時の出来事は今でも鮮明に思い出せる。それほどまでに一夏の記憶に深く刻み込まれ、トラウマと化していた。

「見ていれば分かりますわ」

美羽の言葉に促され、一夏は少しでも修行風景を見ていくことにした。

アパチャイがミットを構え、兼一がそれに拳打や蹴りを放っていく。

「レウ！ レウ！」

レウとはタイ語で『速く』という意味。アパチャイの指示に従い、兼一は更に速く、鋭くミットに打撃を叩き込んだ。

「そこで避けるよ……！」

その合間を縫い、アパチャイがミット越しにパンチを放つ。右腕が消失したかと思うような超高速のパンチ。それが兼一の顔面に直撃し、一夏は思わず渋い表情をした。アパチャイの本気の一撃を受けて、無事でいられるはずがない。

「はー……相変わらず凄いパンチだ。速すぎて見えなかったや」

だが、兼一は無事だった。アパチャイの一撃を受けて生きてる。今度は驚きの表情を浮かべ、一夏は美羽に向き直った。

「どうですか？ アパチャイさん、手加減を覚えられたんですよ」

「凄いな……本当に驚いたよ」

「これで兼一さんや一夏さんにムエタイを教えられるって、本当に喜んでましたわ」

裏ムエタイ界の死神と呼ばれるアパチャイ。達人級の中でも上位の実力を持つ彼だが、未だに弟子を持ったことがなかった。

武術を修めた者にとって弟子は誇りであり、己の技術を後世に伝えるための大切な存在。そんな存在にアパチャイもあこがれており、いつか弟子を持つことを夢見ていた。

だから、本当に嬉しいのだろう。ムエタイを人に教えることが出来るようになり、初めての弟子が出来たことが。

「はい、また避けるよ！」

一夏は微笑ましそうにアパチャイを見る。アパチャイは優しく、とても良い人物だ。一夏が小学生の時はよく遊んでもらった。

梁山泊の者達を家族と思っている一夏だが、アパチャイの場合はそ

れに加えて歳の離れた親友という言い方がしっくりとくる。だから、そんなアパチャイの嬉しそうな顔を見ると、まるで自分のことのように嬉しく感じられた。

「へぶっ!？」

その表情が引き攣る。

「……………」

美羽は言葉を失った。

「……………お〜」

アパチャイは間の抜けたような表情で、冷や汗をたらりと流した。今、アパチャイが放ったのは蹴り。テツ・ライン（ローキック）だ。足元から掬い上げるように蹴り飛ばされ、兼一は宙で何回も回転し、頭から地面に落ちる。そして、ぴくりとも動かなかった。

アパチャイは確かに手加減を覚えた。けれど、足加減はまだまだだった。

「一瞬だけ、これならムエタイを教わってもいいかなと思ったけど……………やっぱりやめとこう」

「キヤー!!! 兼一さん!!!」

梁山泊は今日も騒がしい。

### BATTLE 13 梁山泊（後書き）

あとがき

二巻編を始める予定でしたが、その前に外伝、梁山泊編を。兼一の登場です。

それにしてもケンイチって、季節感というか時期が分かりにくいんですね。一巻開始が入学から一ヶ月くらいなので五月。それから空手部と揉めて梁山泊に入門し、主将を倒して、個人的には今の時期は武田戦前だと思っています。

既に手加減を覚えたアパチャイ。けど、足加減がまだまだでした。兼一の苦難もまだまだこれからです。

次回は五反田食堂編を書きたいなと思います、二巻開始ですね。一夏が既に鈴とくつついてるんで蘭涙目……

さて、次回は五反田食堂編ということでこんな短編をどうぞ。

その名は我流W

「クソツタレがあー!!」

五反田弾。彼は足元にあったゴミ箱を蹴飛ばす。ゴミ箱は壁に当たり、ゴミを散らしながら転がっていった。

「落ち着け、弾」

「これが落ち着いていられるか!」

「そうですよトール。これは忌々しき事態です」

トールこと祐馬が荒れる弾を落ち着かせようとする。が、弾はその程度では落ち着かず、ジークこと響も同調するように、帽子を深く被り直して頷いた。

「スネイクの奴らふざけやがって! 蘭を攫っただあ!?! 上等だ! 一人残らず地獄に送ってやる!」

「おい、どこに行く!?!」

「決まってるだろ! スネイクのアジトに乗り込むんだよ!」

スネイクとは弾の所属するチーム、ラグナレクと敵対関係にあるチームだ。

要するに不良集団であり、スネイクの連中はラグナレクの幹部であ

る弾をおびき出すため、妹の五反田蘭を人質として誘拐したのだ。それに怒り狂った弾は鼻息を荒くし、今にも殴りこみを仕掛けそうな雰囲気だった。

「だから落ち着け。一人で行っても返り討ちにあうだけだ」

「ならどうしろってんだ！？ 蘭を見捨てろってか！！」

弾は祐馬の胸倉をつかみ、腹の底から怒鳴りを上げた。

蘭は弾にとって大切な妹だ。そんな選択肢など存在するわけがない。祐馬もそのことはちゃんとわかっており、手を振り払ってから弾を宥める。

「一人で行けば返り討ち。だが、二人ならどうだ？ 三人なら？」

「それって……」

「ええ、私達も妹君を助けに行きます」

かけられる力強い言葉。友が困っているというのなら、その友のために動く。熱い、男と男の友情。

「一夏殿にも先ほど連絡を入れました。すぐに向かうとのこと。ここは戦力を整え、確実に救出しましょう」

「響……」

「こんな時だからこそ冷静にならんでどうする？ 大丈夫、蘭はワシらが絶対に助け出す」

「祐馬……」

弾の目頭が熱くなった。彼らは友のためならば命を懸けるだろう、そんな奴らだ。そんな奴らだからこそ、弾は共につるんでいる。

「すまない、ありがとう」

「まだ、お礼を言う必要はありませんよ」

「そうだ、それは無事に蘭を助け出してからだ」

結束を固め、いざ、蘭の元に向かおうとする三人。だが、その三人に待ったをかける存在がいた。

「待て」

「オーディーン……」

ラグナレクの将、第一拳豪のオーディーンこと朝宮龍斗<sup>あさみや りゅうと</sup>。彼の登場に弾は生唾を飲み込み、重々しい口調で問う。

「なんですか？　いくらあなたの言葉でも、俺達は止まりませんよ」

「そうじゃない。別に止める気はないよ。ただ、スネイクの奴らには誰に喧嘩を売ったのかちゃんとわからせる必要がある」

龍斗から弾への返答は、とても予想外なものだった。

「ラグナレクに直接の関係がない君の妹を攫ったんだ。その報いを受けさせるため、スネイクの連中は今日潰す。僕も行くよ」

「オーディーン」

ラグナレクトップの参戦。その事実、弾は驚愕する。

「オーディーン……蘭はやりませんからね」

「君はなにを言っている？」

弾の言葉を聞き流し、龍斗は眼鏡を掛け直した。

「待てよ、オーディーン。最近退屈なんだ。そんな面白そうなことに俺を連れて行かない気か？」

「私も行こう。欄とはそれなりに面識もあるしね、放ってはおけない」

そして、更なる戦力の加入。第二拳豪バーサーカー。第三拳豪フレイヤ。この二人を加え、彼ら六人はスネイク殲滅へ向かう。  
ラグナレクの敵対チーム、スネイクの運命は風前の灯だった。

＋＋＋

「うわああああっ！」

「な、なんだよあれ!？」

「化け物だ……」

風前の灯……いや、それどころかスネイクは今にも鎮火してしまい  
そんな勢いだった。

ラグナレクの敵対勢力なだけあり、百を超える人数で結成されている  
スネイク。だが、その集団がたった一人の手によって壊滅しよう  
としていた。

「我流~~~~~っ……………W」  
ホワイトオオオオオ

謎の少年、その名は我流<sup>ホワイト</sup>W。学ランに身を通し、宇宙刑事のような  
面をした十代半ばほどの人物がスネイクを相手に大暴れしていた。

「彼は何者なんだ……………」

現場に駆けつけ、呆気にとられるオーディーン。

「弾、あれって……………」

「ふむ、非常に酷似したメロディーを感じますね」

「なにやってんだ、一夏の奴……………」

我流Wの正体に感づく三名。面で顔を隠しているが、間違いない。  
彼は弾、祐馬、響共通の友人である織斑一夏その人だった。

「ホワイトオオオオオ!!」

「へぶっ!？」

「どぶっ!?!」

ゴミのように一掃されるスネイクの連中。その光景を見て、フレイヤは引き攣った表情を浮かべていた。

「本当に人間なのか？」

「面白そうな奴だな」

バーサーカーは我流Wに興味を持ったようで、くつくつと小さく、不敵な笑みを浮かべていた。

「流石に数が多いな……なら、無敵超人直伝、108秘儀が一つ」

そういつて、一夏はある構えを取った。世界的有名で、王道なバトル漫画に出てくる構え。それを見て、祐馬はポツリとつぶやく。

「そういえば子供のころ、かめはめ波を出せないかとよく真似たものだ」

かめはめ波。男なら一度はあこがれる必殺技。けれど、それを実際に出来る人などいない。そんなことが出来れば、それは既に人ではない。人を、人類をやめているといっても過言ではない。

「梁……！」

それでも我流Wは、

「山……！」

織斑一夏は、

「波！！！！」

やってのけた。人を、人類をやめた。  
掌から波を出し、人をまとめて吹き飛ばす。何人も地に倒れたが、  
それ以上に戦意を削げたのが大きい。

「波が出たぞ、波が！！」

「逃げる！ あんな怪物に勝てるわけがねえ！！」

「わあああああああ！！」

蜘蛛の巣を散らすように逃げていくスネイクの構成員。我流Wは敵  
が一人もいなくなったことを確認すると、呆けている弾達の下へ歩  
み寄ってきた。

「やあ、君が五反田弾だね。安心するといい。君の妹、蘭ちゃんは  
既に我流Pが保護した」

「ああ、ありがとぅな……それはそうと一夏、お前何をやってるん  
だよ？」

「っ？ ち、違う！ 俺は織斑一夏ではない。我流Wだ！！」

「いや、嘘はいいから。お前って嘘が下手だな。それに俺は一夏と  
しか言っていないぞ。なのになんで織斑って苗字を知ってるんだ？」

「そ、それは……」

面をしているが、それでも我流Wが動揺しているのがよくわかった。最初っ殻まったく隠せていないが、それでも一夏は隠し通せると踏んでいたのだろう。はつきり言って馬鹿である。

「おっと！ 我流<sup>フリック</sup>Bからの通信だ。今すぐ向かわないと！！ 世界の平和を守る我流Wとして、この場は失礼する！」

「あ、逃げた……」

腕にはめていたおもちゃの通信機見て、我流Wはそうつぶやく。そして脱兎のごとく、その場から離脱した。その背中を弾は呆然と見送る。

「なんだっただ、一体……」

なににせよ、悪は滅びた。蘭は無事に戻り、更に一夏に好意を寄せる原因になったことをここに明記しておく。

そして一夏と弾が激しく激突したとかしなかったとか……

あとがき2

正義の味方、我流Wでした。

ちなみにこのおまけの時期は一夏の中学時代。鈴が転校して、セシリアがイギリスに帰った数カ月後くらいですかね？

秋雨達に師事してる時点で我流じゃないですが、おまけですので。

ちなみに我流Bは千冬ですw

梁山波を使う一夏。正直やりすぎかと思いましたが、反省はしていません。しょせんはおまけですしね。

さて、上にも明記してますが次回は二巻、五反田食堂編。弾は書いて結構楽しいキャラですw  
次回も更新がんばります。

それはそうと熱すぎる原作史上最強の弟子。最近のサンデーで美羽が……

美羽の身も心配ですが、それはそうと相変わらずあの漫画ってエロいですよねw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6723v/>

---

IS 史上最強の弟子イチカ

2011年10月9日08時13分発行